
スクール・オブ・ザ・デッド～ジ・アナザー・デッド

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スクール・オブ・ザ・デッド〜ジ・アナザー・デッド

【Nコード】

N3243B

【作者名】

NAO

【あらすじ】

本編「スクール・オブ・ザ・デッド」では語られなかった、もう一つの物語群。本編主人公である正臣の視点からではなく、ここでは様々な視点から本編を補完していきます。（性質上、本編を先に読むと、分かりやすいかも知れません……申し訳ありません）

第A - 1話・体育館は絶叫を内包する（前書き）

今回は、三人称です。

第A - 1話・体育館は絶叫を内包する

絶叫が聞こえた。

それは真つ暗闇の前方から、津波のように押し寄せる。

ジェットコースターの絶叫とは比べものにならない。いや、比べることなどできないだろう。なぜなら、ジェットコースターの絶叫は歓喜であつて、今、目前で起こっている現実には、命が危険にさらされている人間の断末魔だからだ。

そもその声の種類が違う。

訳も分らず、前方の生徒の制服をつかみ、床に引き倒す。

引き倒された生徒が怒号をあげるも、その怒号を踏みつけて走ろうとする。踏みつけられた生徒は、踏みつけた生徒の足をつかんで転ばせ、さらに後方から来た生徒がその生徒を乗り越えていく。

そこには、上級生も下級生も、男も女も、友人も親友も、果ては恋人も関係ない。

あるのは、限りある生に執着する強欲のみ。

「……妙なことになったわね」

亡者のように逃げまどい、正気を狂気に塗り替えられた生徒の醜い群集心理。

最後尾付近でその光景を見た少女が、知らず舌打ちをする。

長い漆黒の髪の毛を持った、美しい少女だった。

周囲が恐怖で埋め尽くされようとする中、少女の瞳の中には好奇心が芽生え始める。両手を組みながら、肩をほぐすその姿は、あまりにも奇異な光景。これから競技に挑もうとする短距離ランナーそのものだ。

スカートから伸びるしなやかな両足が、贅肉を筋肉に昇華させた二の腕が、絹のようになめらかな鎖骨から首筋のラインが、モデル

のようにくびれたウエストが、そして、女性のシンボルとしてこの上なく我を主張する胸の膨らみが、来る悪寒を迎え撃とうと熱を帯びる。

「……邪魔」

つまらなく告げた言葉は、少女をつかもうとした男子生徒へ。
軽い言葉とは裏腹に、振り上げられた拳は強烈だ。伸ばされた右手を、少女は難なく左手でいなす。走るスピードそのままに、すれ違う加害者の男子生徒を、ぎりぎりまで引きつけて、顔面を右の拳で打ち抜いた。

無惨。

鼻がつぶれる音にも、少女は薄笑いを浮かべるだけ。同情すべきは、殴られた男子生徒か、それとも襲われかけた少女か。

「汚い手で触らないで」

悲鳴にかき消される、男子生徒の悶絶。深紅のバラが、男子生徒の顔面で咲き乱れる。

「まったく、一体何よ。ただでさえ機嫌が悪いんだけど、私」

少女は、ほんの数分前までの静寂を思い出す。
きっかけはたった一声の悲鳴。

黒板をひっかくような金切り声は、おそらく女子生徒のもの。
真つ暗闇の中で聞こえたその絶叫に、体育館で待ちぼうけていた全校生徒の耳が、いやがおうにも跳ね上がった。

ただでさえ、照明が落とされ、窓という窓が締め切られ、カーテ

ンが光を遮る密閉された空間。何百人という生徒が一同に会している体育館は、生徒たちの発する体温で、さながら蒸し風呂のようだった。

涼しげに状況を把握しようとするこの少女でさえ、頬を伝う汗を何度もハンカチで拭うほどだった。

口に出さないまでも、何十回と心の中で毒づいた。

いつまでも始まらない集会。暗闇に閉ざされたまま、動くことから許されない不可解な状況。

誰もがいらだちを隠せない。徐々に募る不安。

その中で交わされたのは二つ。

口々に飛び出す邪推と、疑念を帯びた視線。

切り裂いたのは、絶叫。

これが混沌を引き起こさないでいられようか。

五感。

視覚を失った人間がまず頼りにするのは、聴覚だ。それを見透かしたかのような絶叫に、残念ながら生徒たちはなすすべがなかった。

「密閉された空間で、火災が起こったとき、人がなぜ死ぬか」

強欲に支配された生徒たちの波に、敢然と立ち向かう少女。誰に問いかけるでもなくつぶやきながら、跳躍する。

「それは群集心理に他ならないわ」

舞い上がった勢いそのままに、女子生徒の首元に跳び蹴りを見舞う。くぐもった声は、肺を押しつぶされた衝撃によるもの。

「みんな言うのよね。なんで空いている方に逃げないんだって」

テレビの防災特集でも見たのか、得意げに語る。胸に強烈な蹴り

を受けた女子生徒は、後方の生徒を巻き込んで仰向けにのけぞった。

「頭では理解していても、いざって時には身体は動かない」

ひらりと舞い降りた少女には、酷薄な笑みが浮かぶ。

「理解は、経験とは違うわ。人はそれを勘違いする」

仰向けに倒れた女子生徒の腹を容赦なく踏みつけて、少女に殺到する狂気の群れ。踏みつけら女子生徒は、口から汚物を吐き出し、やがて白目を剥いて気を失った。

「だから、火事場では……」

少女の声など誰の耳にも入っていない。もちろん、少女のふるった暴力も、倒れた女子生徒に加えられた虐待も、誰の視界にも入っていない。

それを分かった上で、少女は重心を下げて、拳に体重を乗せた。

「煙が人を殺すんじゃない。人が人を殺すのよ」

手が腹部に入り込むような掌底は、男子生徒の臍物を歪ませる。力を無駄なくたたき込むその一撃の威力は、腹部を押さええてうずくまった男子生徒を見れば明らかだ。

「と、言うわけで、これは正当防衛」

うずくまった男子生徒を踏み台に、より高く舞い上がる少女。闇に映える下着の色が、ひらめくスカートから見え隠れする。

「何よ、これ」

ひとときわ高く飛んだ少女の目には、一瞬だけ体育館の全貌が見渡せた。クリスマスに点るキャンドルのように、体育館のあちこちで携帯電話のバックライトが光っている。その隙間を何か小型のものがよぎったように見えた。

見ることができたのは、そこまで。

少女はさらなる跳躍を求めて、着地点を探さねばならなかった。首を振ってすぐさま状況判断。目の前にいる男子生徒に狙いを定める。片足を肩に乗せて、踏ん張りをきかせる。男子生徒はすぐにバランスを崩して倒れるが、そのときにはすでに少女は宙を舞っていた。

「タす……け」

狂気の波から抜け出すやいなや、目の前でふらついていた生徒に襲われる。

「悪く思わないで」

少女は伸ばされた手をつかむことも払うこともせず、腰を回転させた。

少女はたちまち旋風と化す。

スカートの裾はまるで社交場で踊る貴婦人のように広がり、それに遅れて、風を巻き込んだかかとが、生徒の後頭部にたたき込まれる。

生徒の視界には何も映らなかったことだろう。

暗闇だったと言うことも理由の一つだが、何より、少女の回転速度には一部の無駄もなかった。鞘から解き放たれる日本刀がそうであるように、少女の美脚は最短で最大の威力をかき集めた。

体術で言うところの、単なる回し蹴りに過ぎない一方。

剣術で言うところの、居合い抜きにまで昇華されている。

それゆえ、生徒の目には映らない。

手をつくこともできずに頭から落ちた生徒が、悲鳴の代わりに鈍い音を立てた。

「……なにかしらね」

少女は自分が興奮していることに気づく。胸に手を当て、心臓の高鳴りを聞く。

いや、手を当てる必要もなかっただろう。

それぐらい、少女の胸はまだ見ぬ恐怖に高揚している。全身に供給される血液には、きつと高濃度のアルコールが入っている……そんな馬鹿げた妄想でさえ、少女はおかしく思えた。

原因不明の現状を、かくも冷静に受け止める自分自身に。

くずおれた生徒が一度大きく痙攣するのでさえ、難なく受け止められている自分自身に。

自嘲をもよおし、口元に手を持ってこようとすると、その手は何者かによって遮られてしまう。

「私に」

触るな。

語尾は暴力に変換された。

第A - 1話・体育館は絶叫を内包する（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

そして、本当に申し訳ありません。
本編につきましては、一度削除しておきながらの再掲載。謝っても、謝っても済まされることはありません。

こちらの方は、何とか週一掲載を目標に頑張ります。
評価、感想、栄養になります。

第A - 2話・ある少女の思い

「私に
」

触るな。

語尾は暴力に変換された。

つかまれた手とは反対の腕を素早く折りたたむ。肘を鋭角にし、感覚で相手の顔面を探り当てる。顎は人体の急所の一つ。それを周知した上で、一撃必殺の元に沈める。それを意図した肘打ち。

相手は、私の手をつかんだことを後悔するだろう。

そんな傲慢な思考と一緒に、少女はひじうちをたたき込む。

イメージは、すぐに現実に変わるはずだった。

「な、何を！ 危ないだろ！」

「和輝君！」

もちろん、先の声も、後の声も、少女のものではない。

「睦月……雫か？」

睦月と呼ばれた少女は、うつつしそくに黒髪を跳ね上げ、腕を組む。

「だったら何なの？」

尻餅をついた和輝に手を貸そうとする少女。

右足を怪我しているのか、包帯の巻かれた足が痛々しい。

松葉杖を転がしてすがり寄る少女は、自分の怪我など気にはしていないようだ。

「ありがとう、水野さん」

怪我の痛みをおして手を貸してくれた水野に、和輝は頭を垂れる。

「軟弱ね」

吐き捨てる睦月の声に、和輝の眉間にしわがたくわえられた。睦月の他人を寄せ付けようとしない姿勢。和輝が知る親友の姿とは、真逆と言っている態度。

「いいの……和輝君には助けてもらったから」

消えそうな笑みを浮かべて、和輝が拾い上げた松葉杖を受け取った。なんとか和輝に寄り添うことで、不安に心を折られないようにしている。

それが水野の精一杯だった。

「水野さん、行こう」

和輝が松葉杖をつく水野を助けようと、腰に手を回す。

「あ、あの……あり、がとう……」

水野は少しだけ恥ずかしがったが、和輝の思いやり到下心はないと判断し、うつむき加減にお礼を伝えた。

「いいナイト精神ね。彼女も満足？」

「わ、私は！」

好きな人の顔を頭に浮かべた瞬間。

どうしようもなく、大声を張り上げたくなった。

私は誰の物でもない、高らかに宣言したかった。

私には好きな人がいる。

そう目の前の傲慢な少女に伝えたい。

勘違いしないで欲しかった。

隣で支えてくれる和輝君には悪いと思う。でも、それだけは間違
って欲しくなかった。大好きな彼が、少しでも私のことを想ってい
てくれるなら。身を引いてしまう原因を作ることだけはしたくなか
った。

たとえ、私の一方的で馬鹿げた妄想でも。

「水野さん、気にしちゃダメだ」

冷静な和輝の声で水野は口をつぐむ。

「う、うん……」

和輝は水野をかばいながら、舞台袖の放送機器が詰め込まれた部
屋に歩を進める。

力強い足取りと、決してくじけることのない強い意志が、水野の
足の痛みを和らげていく。

水野はそんなかたわらの優しさの向こうに、和輝という人間を支
える、優しすぎる親友の影を見た気がした。

「睦月さんも」

和輝は睦月とすれ違った後、肩越しで。

「助かりたいのなら」

水野の腰を抱く和輝の握力が強まる。

水野はそれを分かっている、和輝の苦渋の表情の前では、何も言うことができなかった。

「元から私もそのつもりなんだけど」

腕を組んだまま、暗闇に冷笑を浮かべる。

生徒たちの悲鳴、怒声、懇願、自暴自棄な声の真ん中で、それはなつけるような強固な態度。

自信を見せつけるかのような睦月の所作に、水野は自らの足が再び痛み出すのが分かった。

思うように歩け無いどころか、和輝の助けを借りてしまっている自分と、まるで誰の助けもいらなかった自負を持った睦月。

比べた自分自身に歯ざしりした。

こんな自分を、大好きな彼が見たらどんな風に思うだろう。

睦月に惚れてしまうのはないか。

そんな悪い予感が水野の頭をかすめた。

「しっこい」

水野を助けて歩く和輝の後方。

睦月は裏拳で、背後から襲おうとした生徒を床に沈めていた。

背後を振り返らない一撃。

自らの肩の位置に、生徒の顔があることを知っていたの攻撃だった。

返り血がついた拳を、倒れた生徒のシャツで拭くと、不敵に笑って二人の後に続く。

「松葉杖。早くしなさいよ」

背後でつぶやかれて肩が跳ね上がる。

松葉杖は、私の名前じゃない。

そう反抗しようとした水野の耳に、奇怪な音が進入する。

トマトがつぶれるような音がしたかと思うと、木の皮を剥がすような音。

布が破れる音がしたかと思うと、ガムをかむような不快な音。剥がす音、ちぎれる音、硬質な音、つぶれる音。

……今までになかった音。

未知のそれらが、渾然一体となって体育館中から聞こえ始めているのだ。

「な、何……？」

背後から生暖かい風に乗ってやってくる圧迫感に、水野は背筋が凍っていくが分かった。

和輝もそれが分かっているようで、歩幅が水野に気をつかう速度ではなくなっている。

額に汗を浮かべながら転がるように舞台袖に飛び込むと、和輝は水野を手放し、閉めたドアに体重をかけた。

途中で和輝たち二人を追い抜いた睦月は、高価な放送機器を、何のためらいもなくドアの前　和輝の前でもある　に放って緊急封鎖した。

「これで一時しのぎにはなりそうね」

両手をたたき合わせて、ほこりを払う仕草。

いかにも、一仕事終えました、とでも言いたそうに大きな息を吐く。

そんな睦月に和輝は恨めしそうな眼差しをぶつける。

「……物を投げる前に、きちんと確認して欲しいけどな」

「怪我しなかったんだからよかったでしょ。感謝しなさいよ、私に」

小声で、するかよ、とこぼすが、睦月には聞こえるはずもなく。

水野はそんな和輝の悪態に目を丸めている。

普段から優しく人柄の良い和輝の中に、鋭いナイフのような物が隠されていることを知ったからだ。

その瞳は、穏和などとはほど遠く、必要ならば血で血を洗うことも辞さない、という危険なものだった。

予期せぬ和輝の姿に、思わず手に持った松葉杖を取り落としてしまふ。

「水野さん？ どうしたの？ 痛む？」

テレビのチャンネルのように、あっさりと和輝の表情が切り替わった。

取り落としてしまった松葉杖を素早く拾い上げ、きちんと取っ手側を向けて渡す。

誰しも好感触を得るであろう笑顔付き。

「う、ううん、大丈夫です。もう、治りかけなんです」

「でも、無理しちゃダメだよ。甘えるところは、きっちり甘えていかないかね」

水野の作った笑顔よりも、数段上手な笑顔。

二つの作り笑いが交錯した。

無理をして明るい笑顔をつくらうとした水野に対し、和輝はすでに用意してあったシールを貼り付けた感覚だ。

「和輝君は……」

自分の心の中に、特定の人しか入り込めない聖域を持っているんだね。

「優しいね」

言葉と心は裏腹だった。

私の大好きなあの人と、その人にいつも寄り添う女の子。その二人にだけ踏み込むことの許された、絶対的な領域。

心の内側と外側。

二人以外には、ただの優しい和輝君。

二人には、本当に優しい和輝君。

和輝君の境界線の内側に二人はいて、私は外側。向けられる優しさも、笑顔も、全く違う。

笑顔の区別はほとんどできないけれど、私は唐突に理解した。

「優しいなんて。ほら、俺って人が良いから」

おどけた調子で笑う。

この和輝君も、きつとよそ行きの和輝君。どうでもいい他人に向けられる笑顔。

そう、きつと世界と二人を秤にかけても、きつと和輝君は二人を選ぶ。

断言できる。

だからこそ、胸が痛い。

……私にはそんな友人はいないから。

私はただの都合の良い友人でしかない。

テストや、学校生活でだけ必要とされるお利口さん。優等生。

誰にも嫌われてはいない。でも、夜にたわいもない話を電話越しに聞かせてくれる友人はいない。

もし、私がお利口さんじゃなかったら。優等生じゃなかったら。きっと私には何も残らない。

うらやましい。

私も誰かの特別になりたい。

違う。

誰かではなく、大好きなあの人の。たった一人だけの特別になりたい。

すぐにでも、今すぐにでも、必要として欲しい……されたい。

「……まさ……」

胸の鼓動が止まらない。

目の前にある命の危険に対する動悸ではない。

精神的な危険。

必要とされていない……満足に走れない足手まとい……。

それらを掛け合わせた、涙も枯れるような焦り。

水野春美という存在の希薄さ。

「水野さん？」

「……おみ」

助けて欲しかった。

呪文のように唱えれば、助けてくれるような気がした。必要として欲しかった。私が私でいていいと、つなぎ止めて欲しかった。

彼ならそれができる。

……ねえ、助けて。

「水野さん！」

和輝の声に、水野はようやく脳内の迷宮から抜け出した。危つく抜け出せなくなりそうだった迷路から、強制的に連れ戻される。

「え、あ……和輝君？」

「よかった……いきなり黙りこくっちゃったから」

胸をなで下ろして、水野ではなくドアに視線をくれる。

和輝は、その向こうに蠢く得体の知れない物を見つめていた。夜目が利く和輝以外には、まだ認知されていない異形の生物。人では到底破壊できないこの封鎖されたドアにも、不安が残る。

「ねえ、いつまで隠れているつもりなの？　かくれんぼする気はないんだけど」

和輝は睦月の声の先に身構える。

声の先は、地下室へと続く階段だった。

第A - 2話・ある少女の思い（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。いきなりですが、文字数が少なくて申し訳ありません。更
新優先……と前向きにとらえていただけると嬉しいです。
評価、感想、栄養になります。

第A - 3話・日和見主義者

「その無粋な声は……睦月だな？」

「む、睦月って、あの睦月ですか？」

暗闇に閉ざされ、視界ゼロとなっている暗闇から、二人の人間がゆっくりと現れた。剣の切っ先のように鋭い視線が、階段の上でふんぞり返る睦月を切り上げる。

長身瘦軀にまとった制服には、一筋のしわも見当たらない。どれだけあらを探しても、校則に抵触することはないだろうと思える、完璧な御姿。

その姿は、百戦錬磨の弁護士を思わせる。

「他にどの睦月がいる」

一人目の男は、毅然とした態度で全校をまとめる生徒会長、後藤俊史だった。

一方、後ろからそろそろと出てきた人間の視線は、一点に定まっていな。危険がないか探し続けるあまり、疑心暗鬼に陥っている。一見すれば、不審者だ。

もみ上げまでしっかりと刈り上げられた短髪は清潔な印象を受けるが、同年代の若者から見れば流行遅れを感じさせた。制服はほこりまみれで、所々が白く変色している。

状況が状況でなければ、いじめられた生徒に間違えられてもおかしくない。生徒会長に比べ背も格段に小さく、少しぽっちゃりした体形も、そういった印象を助ける要因のひとつだった。

「で、でも……い、いえ、あの、すみません」

二人目の男は、放送部の機械マニア、佐藤達也だった。
ゆつくりと地下室から上がってくる二人を満足げに見下ろして、
睦月は鼻を鳴らす。

「ふん、睦月、睦月って、そんなに私が珍しい？」

眼鏡のブリッジを持ち上げる生徒会長の目が、さらに細められた。

「珍しくはないさ。テレビでも拝見させてもらっているからな。まったく、たいした演技力だと感心している。どうやったら、あれほどうまく猫をかぶれるのか……ひとつご教授願いたいほどだよ」

口の端を持ち上げたまま笑ってみせる。

のどの奥が、声に出ることのない笑いでうごめく。

「猫をかぶっているのはお互い様だと思うわよ。でも、アンタの場合、虎の威を借る狐ってところかしら」

鋭い、剣のような視線でつばぜり合う睦月と生徒会長。

生徒会長の背後で控える佐藤の視線は、おどおどと二人を行ったり来たり。

「どうせ地下室にいたのだって、誰よりも先に逃げ込んだからじゃないの？」

睦月の声の先を追って、佐藤の視線も動く。

「その後ろに連れている目障りな八工は、一応放送部だから、放送部の倉庫である地下室にも入れるわけだし」

「僕は、い、一応じゃな」

「羽音が耳障りね」

睦月の容赦ない言葉の雷が、佐藤を生徒会長の後ろに隠れさせる。

「……な、なんなんだ……自分を、自分を……何様だと思っているんだ。僕はれっきとした放送部員だぞ……」

弾除けとして使った生徒会長の背中で、ぶつぶつと文句をたれる佐藤。

「その弱虫。聞こえないわよ。言いたいことがあるなら、聞こえるようにはつきり言えば？」

「う……」

睦月の地獄耳は、佐藤のつぶやきを逃さない。

睦月の剣幕に圧倒されて、佐藤は言葉を失う。

跳ね上がった肩は、いたずらが露見した子供のようだ。

「ぼ、僕は……」

「聞こえない」

腕を組む睦月。

「ぼ、僕は！」

「全然聞こえないわね」

半笑いで、佐藤を見下す。

「僕はれっきとした放送部員だ！」

裏返った声で、腹から振り絞る。

息の荒い佐藤は、今にも呼吸困難に陥りそうだった。

「ところで、いつまでここににいるわけ？」

佐藤の叫びには取り合おうとせず、睦月は和輝を振り返る。佐藤は目を丸めて痴態をさらした後、睦月のあまりの傍若無人さに、地下室にあったバケツを蹴り飛ばす。

きれいに芯でとらえられなかったバケツは、佐藤の意思には従わず、階段に当たって跳ね上がる。

跳ねたバケツは、生徒会長のズボンの裾をかすめて転がった。地下室を静寂が覆う。

「……す、すみません」

冷酷な視線が、階下ですくむ佐藤を射抜いた。

眼鏡の奥で凍てついていく瞳は、佐藤の謝罪を受け入れようとはしない。

軽蔑ではない。嫌悪でもない。それは、明らかな拒絶。人を見る目ではない、汚物を見る目。

「……気がつかなかったが、いつの間にか制服が汚れているな」

佐藤を目で射殺した生徒会長が、何気ない風を装って、自らのズボンの裾に視線を落とす。

バケツがかすただけで、ズボンが汚れるわけがない。

それでも生徒会長は、さも大きな汚れを見つけたかのように、わざとらしくつぶやいて見せた。

佐藤は生徒会長に走り寄ると、震える唇をかみ締めた。あわてて生徒会長の足元にすがりつき、バケツがかすった箇所を

丹念に払い始める。

ポケットからハンカチを取り出し、それを叩き代わりにして、ありもしない汚れを取り除いていく。

見るからに手馴れた作業。

「……まるで下僕ね」

「佐藤君……どうして」

水野が自分の手でふさいだ口から、憐憫を漏らす。
命乞いをする奴隷。和輝は脳内でそう例えた。

「フン」

生徒会長はしばらくの間、佐藤に裾を掃除させると、興味がなくなつたように睦月の横を通り過ぎる。

佐藤は震える手でハンカチを握り締め、睦月をにらみつけた。

睦月はそんな佐藤の怒りなど知る由もない。

その怒りがお門違いであることも、佐藤は気がついていなかった。
生徒会長の怒りを買ってしまった原因は、すべて睦月にある。
佐藤は、自分と生徒会長を棚に上げて、物事を判断していた。

「僕を……馬鹿にした報いは……」

恨み言を地下室に溜め込む。

もちろん、そんな佐藤にはまったく気がつかず、睦月はただひとつの出口である施錠されたスライドドアを動かそうとする。

「このドアを開けるわ。見ていないで、手伝いなさいよ。そのナイト。彼女に手を貸すことはできても、私には手を貸さないって言うわけ？ ただでさえ、役にたたないのが多いんだから、アンタぐ

らしいっかりしなさいよ」

和輝は眉間にしわを寄せたまま、睦月を手伝い始める。

二人はへこんでいる取っ手部に手を差し込んで、横に動かそうと踏ん張った。

一センチにも及ばない隙間から外光が差し込み、和輝の顔を真っ二つに切り裂く。

しかし、外側にかけられている錠は思いのほか堅固で、二人の力をもってしても外れる気配はない。

「手を抜いてるんじゃないわよ！」

「やってる！」

「罵り合う暇があったら、さっさと開けて欲しいものだがね」

めがねを持ち上げながら、いらだたしげに腕を組む。大きなため息は、その場にいた全員の耳に届いた。

「口しか動かさない軟弱者にしては、少し言うことが大きすぎるわね」

動きを止めた睦月の背中。煮えたぎる怒りが、水蒸気のように舞い上がる。

「ふむ、確かに。それは確かだぞ、睦月」

生徒会長の白い歯が見えた。

「……だが、動きを止めて、口だけを動かすようならば、その人間も結局は同じではないか？ 有言実行という言葉を学んだほうがいいな。睦月、お前は『開ける』と言ったんだ。公約通り開けてもら

われないとな。……それとも、お前はあきらめるのか？ 開けることができないと自分の非力さを認め、放棄するのか？ ……まあ、それもいいだろう」

肩をすくめて見せる。

めがねの締め付けがゆるいのか、身振り手振りを交えるたびに、めがねが下にずれる。

その作業を生徒会長は面倒だと思っていけないのか、毎度毎度めがねを中指で持ち上げ、会話に妙な間を作った。

その独特のリズムは、まるでクライマックス直前でCMを入れるバラエティー番組のように計画的で、狡猾だった。

核心を遅らせ、沈黙を作る。

じらす、という一番興味を引く手法。

『……』それが、めがねを持ち上げる合図。

「そして、残念ながら私はお前が言うように軟弱者だ。本当に残念だよ。私に、もう少しの力、あとほんの少しの力があつたら……手伝うことができたのだが」

大げさすぎる演技。

素人演技というよりは、コメディイ演技だった。

明らかに皮肉と分かるように、残念そうな面を作る。

最初から、手伝う気などありはしない。

「……さて、そこでだ。選択は二つほどある。あきらめるか、それとも、軟弱者であっても手を借りるかだ」

生徒会長による、明らかな答えの誘導。

「そうそう……暴力に訴えて黙らせるというのも選択の一つだな。確かにそれで私のような軟弱者の、余計なお世話はいはなくなる。効果的かもしれないな。……だが、それではドアは開かないぞ。問題の解決には至っていない。そもそも……時間は限られているんだ。合理的かつ生産的な思考を期待するよ」

握り締められていた睦月のこぶしに目を落として、先手を打つ。
誰かの指図は受けない。

そういう性格であることを、生徒会長は熟知している。

「……選択肢は三よ」

ドアの取っ手から手を離して、生徒会長に向き直る。

「今すぐ、殺してやる。二度と立ち上がれないくらいに」

殺したら、言うまでもなく二度と立ち上がることはできない。

そんな矛盾を通り越した睦月の直情的な感情の放出が、その一言に凝縮されていた。

「……ば、馬鹿な。冷静になれ。そんなことをしても」

選択するはずのない選択肢だったのだろうか。生徒会長の仮面が、めがね同様にずれ落ちた。

睦月の手が生徒会長の胸倉をつかもうと伸びる。

生徒会長は、なすすべなく睦月に殴られ、顔を腫らすだろう。

佐藤もそれを察知してか、生徒会長から離れ、睦月の後ろのほうへ少しずつ移動し始めていた。

強いほうの味方。日和見主義。

プライドの高い睦月や、生徒会長に比べるまでもない、こんにゃ

くのような意思。

風になびく力ない雑草。少しでも強い風が吹けば、茎は簡単に折れるだろう。

和輝はそんな佐藤にいらだちを覚えるとともに、生徒会長に行われる制裁は自業自得だと思った。

止める筋合いもない。

和輝はもう一人の傍観者、水野の動向をうかがう。

「水」

口に出そうとした水野の名前よりも、先に視界に入ったのは。耳に入ったのは。

水野が、真っ青になって全身をこわばらせる姿だった。

水野が、震えた手から松葉杖を落とす音だった。

「水野さん？」

和輝の声に驚いて落としたのではなかった。

少し大きめの声で問いかけた先で、水野は先ほど放送機器でふさいだドアを見ていた。

無言で、ゆっくりと和輝を振り返る。

「誰がいるの？　ねえ、誰がいるんでしょ？」

ドアの向こうで聞こえた声は、悲痛に歪んでいた。

第A - 3話・日和見主義者（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

一週間家を空けたら、ほこりだらけになっていました。頑張っ
て掃除します。小説は何とか書きためたので、しばらくは連続更新できると思います。
評価、感想、栄養になります。

第A - 4話・加藤優理子は、今日も元気です！（前書き）

加藤優理子（加藤さん）の一人称視点です。

これからも、時々別視点での短編を唐突に挿入していきます。読みにくいのは承知ですが、ご了承ください。

第A - 4話・加藤優理子は、今日も元気です！

朝が弱い私にとって、学校への坂道は難所である。

頭も回っていない状態なのに、肉体を酷使しなければいけないのだから当然だ。

この坂はまさに地獄。

私なりに名付けるなら、地獄坂。

「我ながら、ひどいネーミングセンス……」

空回りする頭と体質を呪う。

下を向いて、地獄坂にため息をこぼすのが、毎日の日課。

と、私は下を向いていたせいか、誰かの背中に頭をぶつけてしまったようだった。

「あ………すみません。よそ見をしていて」

私は相手が誰であるか確認もせずに、深く頭をたれる。

「あ、気にしないで。痛くも痒くもないから」

それ見かねてか、優しく声をかけてくれる。声から判断するに、男子だ。

……しかも、この声には聞き覚えがある。

「あれ、和輝」

「おはよう、加藤」

顔を上げた私に軽く手を上げて挨拶する。

切れ長の目と、すっきりとした顔の輪郭が、笑みに揺れた。

「珍しく今日は早いね。いつも遅刻してくるのに」

「ま、たまにはこういう日もあるってことかな。今日はなぜだか早起きできたから、みんなを驚かせてやろうと思ってね」

私は青空を仰ぎ、横切っていく大きな雲に目を馳せる。

「悪いが、槍は降ってこないぞ」

和輝が口を尖らせる。

わざとらしく空を見つめてみたのだが、どうやら皮肉が上手く伝わってくれたようだ。

「正臣なんか特に驚くんじゃない？」

正臣の話題になったとたん、和輝の顔が一段と華やいだ。

「そうなんだよ。俺もそれが楽しみでさ」

彼と正臣はとても仲がいい。

何をやるにもいつも一緒に、なおかつ阿吽の呼吸。羨ましいぐらいの友情がそこにはある。

彼ら二人の笑いが教室に響かない日はない、ってぐらいに。

「あんたたち、いつもうるさいんだよね。何がそんなに面白いのよ」

私がそう言うと和輝は腕を組んで考え込む。

「布団が吹っ飛んだ」

和輝、ご乱心。

私は戦国武将さながらに、大声を上げようかと思った。

「面白くないだろ？」

「……良かった。正常だったのね」

和輝の肩に手を置いて、知らず安堵の息を漏らした。

「当たり前だろ。でもさ、普通面白くないネタでも、正臣が言うとすぐ面白く聞こえるんだ。アルミ缶の上にある蜜柑、東京特許許可局、いい国つくろう鎌倉幕府……なんでもないことが面白くなるんだ。色がついたみたいにな」

右にかしげた首を、今度は左にかしげて考える和輝。

「さあ、なんでだろうな。俺も面白くなる理由は良く分かんないけど、ただ、正臣といると世の中を好きになれる気がするんだ。上手くいえないけど、あつたくなれるっていうかさ。ほら、あいつ誰にでも優しくしようとするくせに、人一倍優しくされたい奴だから放っておけないんだよ。……あ、でもなんか違うかな、こう……もっとしつくり来る言葉があるはずなんだけどな」

「なにそれ。正臣が女に思えてくるような大胆発言。ひよっとして……」

私が和輝の横腹をひじでつつくと、和輝は面白いように狼狽する。

「お、おい！俺はそういうつもりで言ったんじゃないぞ。これは

親友としての」

「えー、ご町内の皆様！ 永沢和輝は、同性愛者でございます！」

私はマイクで演説するように周囲にいる生徒に触れ回る。通学路を歩いている生徒たちが、そんな私たちを振り返っては、くすくすと笑っている。

「加藤！ お前！」

和輝は真っ赤になつて腕を振り上げる。

「暴力？ へえ、和輝は女の子に暴力を振るうんだ？」

「悪いけどな、俺はお前を女だと思ったことは一度もない」

鼻息荒く、腕を腰に当てて宣言する。

なぜだか、その言葉に私の胸が痛んだ。

「あれ……」

私は痛んだ胸を押さえて、また痛みが来るのではないかと待っていた。

しかし、苦痛は和輝が言葉を発した瞬間だけで、それ以降はまったく苦痛は訪れない。

瞬間的な、あの痛みは何だろうか。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

「眠いだけで、そんなことはないはずだけど……なんでだろ」

私は首を傾げる。

昨日、放課後の部活練習で素振りをやりすぎたからかな。最近の

ソフトボール部は成績が悪いから、練習量を増やしたのが原因に違いない。加えて、週末には試合もあるし、怪我が発覚するのは非常に困る。

ピッチャー、それも二本柱の内の一本である私が、怪我をするわけにはいかないのだ。

「あ！ あったぞ、正臣を表すのに一番適当な言葉が！」

和輝の顔は子供のように無邪気だ。

親友のことで、こんなに一生懸命になれる人間を、私は見たことがない。

「愛、だ」

太陽は反対側で輝いているのに、目の前にももうひとつ太陽がある。

本当に朝から眩しい。

「えー、ご町内の皆様！ 永沢和輝は、完全な同性愛者でございます！」

私の声は気持ちのいいほど朗らかだ。苦手な朝なのに、なぜか今は清々しい。

「いや、待て！ 前言撤回する！ それに全国の同性愛者に謝れ！」

さっきとは打って変わって気持ちがいい。地獄坂も気にならない。

「男に二言はないでしょ、普通」

和輝が参ったな、と言いたそうに頭を掻いている。
朝がこんなに楽しいと思えたことはない。
毎日がこんな朝ならいいのに。

「……和輝のおかげかな」

地獄坂だけに、地獄に仏、もとい、地獄坂に和輝。

「なにが？」

疑問符を頭に浮かべる和輝。

目の前に迫った校門を背に、私は和輝と向かい合う。

「和輝、明日もこのくらいの時間に登校しなよ」

和輝といると朝が楽しいから。足取りが軽いから。
だから、明日も一緒にいられたら。
それはきつと素敵なことかもしれない。

「……ん、俺は遠慮するよ。正臣がいれば別だけどな」

また、胸が痛んだ。さっきよりも痛みが大きい。

「それに、香奈もないしな」

さらに大きな痛みが私を襲う。今度は連続だ。

「加藤、本当に大丈夫なのか？ さっきより苦しそうだぞ」
「あはは、何でかな。今日は朝から調子がいいのに……」

鋭い針に串刺しにされるような痛みだ。

部活でいくら練習しても、こんな痛みに見舞われたことはないのに。

和輝が言葉を発すると、決まって胸が痛くなる。

でも、普段の会話では、そんなことがなかったはず。

もしかしたら、特定の言葉に反応しているのかも。

仮にそうだとしても、私にはなぜ反応するのかが分からない。

靴を履き替えて、教室へと向かう。

「おはよう」

松葉杖をついた夏美に並んでから挨拶する。

「加藤さん、おはよう」

さすがに夏美は朝が早い。

でも、本来はもっと早く教室にいて、自習でもしているはずなのだ。

それが出来ないのは、右足の怪我のせい。

「おはよう、水野さん」

「か、和輝君？ どうしたの今日は」

和輝が、驚いた夏美に早起きの説明をしている。

私はそれを一歩離れた位置で見つめながら、考えを巡らせる。

和輝という楽しくなれた朝の登校。

ある特定の言葉にだけ痛みを発する私の胸。

考えれば考えるほど、エスパーな方向に想像が飛んでいってしま

体育会系の頭はこんなものか。
私は大きなため息をつく。

「ま、今日出さなければいけない答えではないし、明日また考えればいいか」

私は楽観的だ。

今日出来ることを躊躇いなく明日に回す。
テスト勉強だって、短期集中型だ。前日の夜に徹夜すればいい。
これで赤点は回避できる。

「加藤さん、さっき聞いたんだけど、今日これから集会なんだって」
「え、それって授業つぶれるの？」

私の嬉々とした表情に、夏美は困っている。

「授業がつぶれるのを喜んじゃ駄目だよ。次の授業で遅れを取り戻すの大変なんだから。先生も生徒も……」

「ま、それが加藤らしいよな」

笑って私の肩を叩いた。和輝に触れたところから、温かいものが私に入り込んでくる。

まるで、最高級の毛布に頬擦りするような、眠くなるような感覚。すごく心地いい。

「正臣早く来ないかな、驚かせてやりたいよ」

「そうだね、私も楽しみ。正臣君の驚く顔……本当に楽しみだな」

二人が楽しそうに話している後ろで、私はやっぱり考え込んでしまっ

明日に回していいことなのか。早く答えを出さなければいけない問題なのではないか。

私をせかす、もう一人の私。

私は頬を両手で勢いよく挟みこんで邪念を払う。

パン、という子気味のよい音が二人を振り向かせた。

「よし！ 加藤優理子は、今日も元気です！」

夏美はそんな私を見て笑っている。

「おかしな奴だな」

和輝もつられて笑い出す。

今日一番の和輝の笑顔。目が離せなくなる笑顔。ずっと見ていた
いと思わせる笑顔。独り占めしたいと思わせる笑顔。私を温かくし
てくれる笑顔……。

集会が始まってから、最後まで、その和輝の笑顔が、私の脳裏か
ら離れることはなかった。

第A - 4話・加藤優理子は、今日も元気です！（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。次回は、また三人称に戻ります。読みにくくてすみません。
評価、感想、栄養になります。

第A - 5話・最初の扉越し

「加藤……なのか？」

水野の友人であり、ソフトボール部員の加藤優理子。声に出した和輝は直後、しまった、という顔をした。

「今の、その声は……和輝？　和輝よね？　和輝！」

地獄に仏とばかりに、うれしそうな声がドアの向こうで弾む。

「お願い、ここを開けて！　みんな変なの、何かに取り付かれたように生徒同士で……それに、見たこともないようなものが沢山いて、襲ってきて、私、怖くて！」

「かと」

和輝は水野の口をふさぐ。喜びの声を中断された水野は、和輝を不思議そうに見上げる。

「今はまだ気づかれてない。今のうちなら、開けても大丈夫だから」

扉の向こうで加藤が声のトーンを下げる。

体育館に広がる暗闇の中、加藤は和輝たち同様、何者かから必死に逃げてきたのだろう。

潜めた息の中には、抑えきれない息切れがあった。

「和輝？　和輝なんだよね？」

返事が聞こえないことを不安に思ったのか、加藤が扉を控えめに

ノックする。

「ああ、和輝だ。聞こえてる」

水野の口を押さえたまま、和輝が厳しい顔をした。刻まれたしわに深い影が落ちる。

「良かった……早く、開けて？ 私ずっと逃げて、みんな狂ったようになって、もみくちゃにされて……もう逃げられないってあきらめてた……でも、和輝が生きていてくれてよかった。嬉しいよ……」

扉にしなだれかかる加藤。

そこには、明朗快活で男勝りなソフトボール部員の姿はない。

正体不明の恐怖におびえ、すぎるものを見つけた弱者の姿がある。

「和輝く」

「水野さん、黙って」

口をふさぐとする和輝の手を引き剥がす。慌てて真意を探ろうとするが、言葉尻を上書きされてしまう。

和輝の声には、有無を言わせない真剣味があった。

「和輝？ 他に、他に誰がいるの？ 生きてるの？」

「いや、誰もいない。中にいるのは俺だけだ」

どうして和輝は、自分以外の生存者の存在を隠そうとするのか。水野には理解できなかった。

「そ、そうなんだ……。でも良かった。和輝だけでも生きていてくれて。私、気がついたことがあって、どうしても和輝に言いたいこ

とがあつて、和輝に生きていてほしいって思つて」

扉を通して痛いほど伝わってくる綺麗な心。

水野は加藤の気持ちが痛いほど分かつていた。

伝えたい気持ちがある。どうしても、知ってほしい気持ちがある。あの人に、私が大好きな人に。生きていてほしい。一縷の望みだとしても。

だから、私も生きていたい。

再会して、伝えるまで。思いを伝えるまで、生きていたい。

「ね、だから、ね？　和輝、お願いだからここを早く開けて？」

加藤の言葉が胸を打つ。水野は視線で和輝に訴えかけた。

加藤さんを助けて。

けれども、和輝は目を合わせることすらせず、扉をじっと見つめたまま。

「あ、あ……気付かれた……！　早く！　和輝！　開けて！」

切迫した声に変わる。

「こつちに来る……！　生徒だけじゃない、何……？　何よ、あれ……嫌、来ないでよ……来るな！」

扉に背を預けた加藤が、生徒、そして、未知のものに対して声を荒げる。

「和輝！　開けてよ！　早く！」

背後に迫る集団が耳を貸さないことが分かった、扉に向き直る。

「和輝！」

扉が叩かれた衝撃で、積まれたアンプが転がり落ちる。一番上に積んであった不安定なそれは、部品を撒き散らして転がり、睦月の足元で停止した。

睦月は和輝の背中を見つめて 監視して いる。

口を引き結び、隣に立つ生徒会長に視線をくれる。視線を受けた生徒会長は、めがねのブリッジを持ち上げて、ゆっくりとうなづいていた。

それは、確認だった。

「加藤……俺は」

感情を押し殺した声。

「いや……嫌よ……こっち来ないで！」

そんな声が危機迫る加藤に届くはずもなく。

「ねえ、和輝！ 助けて！ 早く開けてよ！ 私、まだ死にたくないの！」

叫び。

友人である水野の胸に突き刺さる。

「まだ、やりたいことがあるの！ 私ね、週末、試合があるの！ 楽しみにしてたの！ あと、あと！ 買い物だってしたいし！ そ

れにそれにそれに……お父さんと昨日けんかしたままで、まだ謝ってない！お母さんにも、会いたいのに！夏美に借りたノートも返してない！だから！」

取捨選択すらできない、生の懇願。

思い立った順に叫びとして変換される。

水野の心身が震えた。

心が音を立ててきしみ、痛みに壊れてしまいそうになる。体から汗が噴出し、扉に向かって手を伸ばす。

放送機器をどけて、加藤さんを助けたい。

水野は和輝の束縛から逃れようと抵抗する。

「まだ生きていたいのに！死ぬのは嫌！死にたくない！」

水野の手が、山積された放送機器に伸びる。

「助けて……助けてよ！和輝……和輝！」

裏返る声。

「私は！私は！」

こぶしを叩きつける加藤。されど、バリケードと化した扉は開かない。

「気がついたの！」

叫びに涙が混じりだした。

「私、自分の気持ちに気がついたの！」

もがく水野を、和輝は必死に押さえつけようとする。

「朝、話したよね！　ね？　明日一緒に登校しようって、胸が痛くって、なんでだろうって！　私！　考えて！」

もがく水野を、背後から忍び寄った睦月と生徒会長が押さえつけた。背後から睦月に羽交い絞めにされ、手と口を生徒会長に押さえつけられる。

「怖くって、生きたくて、死にたくなくて。そうしたら、和輝がいるの！　私の頭の中が和輝でいっぱいになったの！」

水野の目から、大粒の涙がとめどなく溢れ出した。目の前の闇に陽炎が立ちのぼり、風景をぼやけさせていく。

「触らないで！　やめて！」

扉の向こうで、加藤が引き倒される音。醜悪な音が加藤を取り囲む。

「私、私　和輝が好き！　気がついたの！」

魂を揺さぶる加藤の声。

呼応し、水野は叫ぶ。涙を爆発させるように。

松葉杖はとうに放り出していた。

怪我した足さえも駆使して、扉を開けようとする。けれど、その足でさえ、加勢した佐藤によって拘束されてしまう。

水野の叫喚は、生徒会長の手の中で消失し。

水野の抵抗は、睦月の力の前に押さえ込まれ。

水野の歩行は、佐藤によってがんじがらめに。

唯一自由を許された涙腺だけが、滝のような涙を流し続ける。

生徒会長の手を涙でぐしゃぐしゃにしながら、水野は心中でわめいた。

加藤さんを助けたい、と。

「初めて誰かを好きになったの！」

「……加藤、ありがとう」

積まれた電子機器に手を添える。

睦月はあわてて和輝の名前を呼ぼうとする。

……が、声に出る直前、振り返った和輝によって制された。声による確認ではなかった。

生徒会長のときと同じように、アイコンタクトだけで意思は統一される。

再び扉一枚向こうの加藤に向き直る和輝。

水野はそこに、わずかな希望を見出す。

「……でも、俺は加藤のことをなんとも思っていない」

水野はデジャヴを感じた。

「……え、え？」

扉越しの戸惑いは、疑心へ。

「加藤、お前は俺にとって領域外の人間なんだ」

「か、ずき？」

やがて疑心は、絶望へ。

「嫌……嫌よ、嫌！ 助けて……お願い、助けて！」

水野は動きを止めていた。

「見捨てないで！ お願い！ 何でもするから！」

すがりつくように、がりがりやつめで扉を引っかく。
死に物狂い。

加藤のつめが扉に食い込み、無残にべりべりと剥がれた。つめが
無くなった指先は血で染まり、扉は真っ赤な画板になる。

「好きなの！ 和輝！」

友人が悪魔に陵辱される。

友人が好きな人に見殺しにされる。

友人が殺される。

友人が死んでしまう。

「離して！ 触らないで！ 嫌、なにこれ……化け物……来ないで
！ 近寄らないで！」

布が引き裂かれる音。扉を乱暴に叩く音。

「死にたくない！ 何で？ 私、死にたくないよ！」

和輝は積み上げられた機械の前。動き出す気配はない。

「痛い！ やめてええっ！ 痛い！ まだ何もしてない！ 私、何も悪いことしてない！」

引きずられる音。加藤の肉体を痛めつける鈍い音。

「かずきいいっ！ 助けてよおおっ！」

耳孔をふさいでしまいたい。熱暴走する心臓を止めてしまいたい。のどを裂傷させる絶叫が響く。

耳に入れば、それは殴られたような激痛へ変化する。

「取って！ 和輝！ 助けて！ はがしてよおおっ！」

どんなに加藤が叫んでも、和輝は微動だにしない。

「いや……あが……かず、きいっ！」

水野は思い出す。

「私の……げ、ぐ……腸……ださ……な……で」

宿題を忘れたことを悪びれず、ノートを見せてと、子供のような顔で舌を出した友人の姿を。

「たすけ……和輝……」

今朝、階段で私を助けてくれた友人の姿を。

「かずきいいっ……たすけ……て」

うがいをするような脆弱な声。
風前の灯は、言葉通り、水野の意識が途切れる瞬間。
あまりにもあっけなく……

消えた。

第A - 5話・最初の扉越し（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

部屋が綺麗になりました。パソコンが壊れました。

でも、頑張ります。

評価、感想、栄養になります。

第A - 6話・夢見る少女

夢と現実の境界は、いったいどこにあるのだろう。

痛覚があれば、それは夢？ 現実性がなければ、それは夢？

私はどちらも現実と夢を分ける根拠とは思わないと思う。

夢は脳とリンクしているし、痛覚とも関連付けられていてもおかしくはない。現実性だって、ただの思い込みに過ぎない。誰かに植え付けられた一方的な当たり前を、当たり前と思い込んでいるに過ぎないのだから。

もし、長い、とても長い夢を見ることができたなら。

夢はきつと現実になっってしまうのだと思う。

「夏美、ごめん！」

加藤さんが私を拝むように手を合わせる。

私は目をぱちくりさせながら、片目をつぶっておどける友人を見つめた。

「宿題見せて！ 今日、指されるの忘れてました」

「いつそのこと忘れたまま先生に指されて、分かりませんって答えて、みんなの前で恥をかいたほうが、加藤さんのためになるのかも……？」

「おほほほ……夏美先生、それはないですよ。この私にそんな羞恥プレイは似合いませんわ」

右手の甲を口に添えて、高飛車娘を演出する。

「それはそうと夏美先生？　ここはやはり、この私めに颯爽と宿題のノートを差し出すのが、夏美先生たる器の大きさを見せ付ける絶好の機会であると存じ上げますが！」

極端にへりくだった加藤さんの物言いに、私は思わずほほを緩ませてしまう。

「もう……。夏美先生はそろそろ加藤さんに愛想を尽かしそうです」

私は渋々ノートを机から引つ張り出して、加藤さんに差し出した。

「夏美！　愛してる！　ああ、夏美！　あなたはなぜ夏美なの！」

「シェイクスピアも怒るよ、加藤さん……」

「加藤よ、お前もか！」

「シェイクスピアも怒るよ、和輝君……」

二人とも、物知りなのかそうでないのか分からなくなる、見事な連係だった。

「べーだ、和輝には見せてあげないもんね」

私の貸したノートを背中に隠して、加藤さんは舌を出した。

まだ十分時間はあるのだから、和輝君に見せてあげてもいいと思うのだけれど。

「いいのか、加藤。こっちには誰も知らない秘密兵器があるんだぞ」
「口に出した時点でもう秘密ではないけどね」

口を挟んだ私に咳払い。

「……ごほん。とにかく、俺にもノートを見せてくれたほうが身のためだと思うぞ。これは脅しではない、取引だ」

「和輝君、悪役の台詞だよ……」

「水野さん、いまさら気がついたか。しかし、時すでに遅し！」

和輝君が悪党さながらの不敵な笑みで、こぶしを振り上げる。

「正臣！」

「え？ 俺！？」

胸から心臓が飛び出すかと思った。事を傍観していた正臣君が、話を振られて戸惑っている。

そんな困惑した表情も、どこか可愛いと思えてしまう私は、きつと馬鹿だ。そうに違いない。

「いいか、水野さんのノートを最初に俺に貸すように言ってくれ。いや、言うんだ。むしろ、言え。さあ言え。すぐ言え。疾く言え」

腕を組んだ和輝君が、じりじりと正臣君に迫る。両手を胸の前に広げた正臣君は、頬を引きつらせていた。

和輝君の顔が、よほど悪党面化しているらしい。

「ちよつと！ 夏美の弱みをつくのは卑怯よ、和輝！」

「悪役に、卑怯も糞もない。勝てば官軍、手段は選ばん」

「弱み？ 水野さん、弱みって何？」

「あ、あの……その……弱みというか……その」

指を差して非難する加藤さんに、胸を張って応戦する悪党、和輝

君。

私は正臣君に見つめられて顔が赤くなる。

正臣君の鈍感な、今に始まったことではない。でも、心の準備がこれっぽっちもできていない私にとって、気持ちは複雑だけれど、すごく助かる。

「夏美が好きだって知ってるでしょ！ 悪党とかそういう以前に、友人として問題があるわよ！」

「……却下。さ、正臣、言ってくれ。俺のために」
「水野さん、加藤さんが言う好きって？」

質問と回答が錯綜して、私の脳がパンク寸前。

「あ……う、その……弱みが好きというか、好きなのが弱みで、えっと、そうじゃなくて、正臣君が弱みを握っているというか、弱みそのものが正臣君というか……」

頭に浮かんだ言葉の羅列をうまく整理できない。

主語と述語がくるくると回転して、落ちものパズルゲームのように次第にスペースを失っていく。

「み、水野さん？」

「夏美？」

和輝君と加藤さんが、競い合うようにノートの端を持ちながら、私を振り返る。

私は哀れなノートを取り上げて、ほほを膨らませた。

正臣君が見てるんだから、なるべく可愛い物言いをしなければいけない。

「二人ともそこに正座！　喧嘩両成敗です！」

腰に手を当てて二人を叱りつける中、ちらりと正臣君を盗み見た。正臣君は、やれやれといった風体で頭をかいている。少し長め髪の毛が彼の耳を隠していて、時々現れる耳元にどきりとする。

正臣君は、福耳だった。

「夏美い……」

「水野さん……」

涙目になった和輝君と加藤さんが、神にでも祈るように両手をがっちりと組み合わせている。正座した二人が私を拝むのを見ていると、教祖様って案外悪くないかもしれないと思ってしまう。

「問答無用。両成敗です」

手に持った松葉杖で、二人の肩を軽く叩く。

「大岡裁きならぬ、水野裁き。いや、名裁き名裁き」

楽しそうに拍手する正臣君に、私は少し照れてしまう。

「あ、ありがとう、正臣君……」

恥ずかしさで首筋がかゆくなる。

「今の感謝するところか？」

「馬鹿にはしてはいないと思うわよ」

机の横で正座する二人が顔を合わる。

「水野さん、あんなこと言ってるけど」
「裏切り者！」

正臣君が私に密告した瞬間、正座した二人が同じタイミングで声を上げた。

第A - 6話・夢見る少女（後書き）

興味を持ってくださいました方、読んでくださった方、ありがとうございます。

気を失った水野が過去の夢を見えています。視点が、コロコロと変わっていて、読みにくいとは存じますが、どうかお許しください。
評価、感想、栄養になります。

第A・7話・放課後の記憶はのちにデジャヴに変わる

夕日にかげる夏の教室で、私は参考書のページをめくる。

宿題はとくに済ませたから、残るは明日の予習と、今日学んだ範囲の応用問題を残すのみ。

机に立てかけた松葉杖の影が、いつのまにか長く伸びていた。

窓の外からゆるゆると吹き込んでくる風。夕日で橙色に染まったカーテンを優しくなでる。吹奏楽部の個人パート練習がそこかしこで聞こえ、その間をぬうように、女子ソフトボール部の威勢のいい声が、私の耳に飛び込んできた。

教室には私以外誰もいない。

私はシャープペンシルを置いて参考書を閉じると、松葉杖を使って窓に歩み寄る。

「気がつかないうちに日が伸びてたんだ……まだ太陽があんなところにある」

風に揺れる髪の毛を耳元にまとめながら、遠くに見える山々と、赤く燃える太陽を見比べる。

「紅白試合かな」

グラウンドを見渡した。ちょうどネクストバッタースサークルで片ひざを着く加藤さんが目に入る。

今週末の試合にかける思いが、円の中心で素振りをする彼女から伝わってくるようだった。

「あれ、水野さん？ まだいたんだ」

和輝君が、かばんを持ったまま教室に入ってきた。
ぐるりと教室を見渡して、私の机に目を留める。

「勉強していたのか……俺も見習わなきゃな」

「見習う気なんかないくせに」

「あ、バレた？」

薄っぺらいかばんを小脇に抱えて笑う。

気持ちのいい笑い声だった。冗談を気持ちよく笑い飛ばせる和輝君が、なぜかうらやましく思える。

「あ、そうだ。正臣と香奈を探してるんだけど、水野さん知らない？」

手のひらを、ぽん、とこぶしで叩くと、私の隣に並んで窓の外を眺める。

「校内を探していないなら、グラウンドにでも……」

「下駄箱は？ 見たの？」

「靴はなかった。でも、あいつが俺に何も言わずに帰るとは思えないからさ。……香奈は分からないけど」

和輝君の横顔がかけつたように見えたのは、夕日のせいだろうか。

「お、あのごつい姿は加藤じゃん」

「ひどい。和輝君てば、何気に毒吐くんだね。あとで加藤さんに言っちゃお」

「か、勘違いしてもらっては困るな、水野さん。これは褒めてるんだ。ソフト部としてのがっちりした体格は、対するピッチャーにとっても脅威だ、ってことを俺は言いたかったんだ。うん」

「今の絶対に後付けだね」

和輝君の慌てた身振り手振りで、そう判断した。

そんなやり取りも露知らず、加藤さんはぶんぶんとバットを振り回すと、体を伸ばしながら右バッターボックスに向かう。

ランナーがいないところを見ると、前のバッターはアウトになってしまったようだ。

「最近、加藤さんと仲いいよね」

「……ん、そうか？」

数秒の沈黙を苦にしたわけではないけれど、私は開口していた。

「私にはそう見えるよ」

加藤さんが、一球目を見逃した。余裕を持って見逃したボールは、キャッチャーが要求したボールよりも高めに外れていた。まずワンボール。

「正臣の隣の席だから、話す機会が多いだだけだよ」

和輝君は真っ直ぐに加藤さんの打席を見つめている。表情のない顔からは何も読み取ることができない。

「でも、加藤さんと話しているときの和輝君は、とても楽しそうに見える」

二球続けたストレートを、待つてましたとばかりに鋭く振り抜く加藤さん。芯で捕らえた打球は、ヘッドスピードが勝ってしまったのか、サードベースを巻き込んでファールになる。これで、ワンス

トライク、ワンボール。

「きつと和輝君と気が合うんだね。男性の話題にもすごく溶け込んでいるし、次々に話が飛び出してくる感じで……相性ぴったり。みんなそう思ってるんじゃないかな？」

加藤さんの圧力に恐れをなしたのか、三球目は外に大きく外れてツーボール。
キャッチャーの指示だったが、ピッチャーは納得がいつていないようだった。

「水野さんは、俺に何を期待してるの？」
「え……？」

和輝君の瞳が私の顔を映す。
不覚にもどきりとしてしまった。

悪いことをしたわけでもないのに、罪悪感にさいなまれてしまう。

「和輝……君？」

夕焼けの微風が、窓から入り込む。

和輝君の前髪をなびかせ、耳元でまとめた私の髪の毛を散らす。
風に乗って、ミットにボールの収まる音が聞こえた。間髪いれず審判のストライクコール。

私の記憶が正しければ、加藤さんはツーストライクで追い込まれたはずだ。ツーボールということもあって、次が勝負球となる。ボールひとつ遊ぶことができるという余裕は、逆に命取りになる。
だから、次がどちらにとってもウイニングショット。

「クラスのみんなや、加藤自身、そして」

和輝君の声に申し合わせたように、吹奏楽の演奏も止む。
放課後とは思えない静寂が、緊張感を生みだした。

「水野さんがどう思っているかは知らないけど」

胸に痛みが走る。和輝君の表情が怖いくらいに冷静だった。

「俺は加藤のことをなんとも思っていない」

ストライクバターアウト。

審判の声が私の耳に届いた。

「どうしてそんな言い方……」

和輝君の瞳を見ていられなくて、視線をグラウンドに逃がす。
三振した加藤さんが、夕陽を背負いながらベンチに引き下がって
いく姿が見えた。

その背中が、ひどく小さく見える。

「もっと別の言い方してもいいと思う」

「だったら、どう言ったらいいの？」

和輝君は微笑みながら聞いてくれる。

でも、どこかその微笑みは作られたもののような気がした。オレ
ンジ色の光がそう錯覚させるのだろうか。

「そんなの、私に聞かれても分からないよ……」

「ごめん、水野さん。でも、俺はね」

かばんを小脇に抱え、両手はポケットの中。夕日に目を細めて、ゆっくりと息を吐く。

そんな和輝君の横顔は、二枚目だと思える。正臣君も素敵だと思うけれど、和輝君はおそらく誰が見てもそう答えるくらい格好良い。

「香奈が好きなんだ」

悲哀をたたえた微笑。

好きという気持ちを誇る、というよりは、どうしても好きになってしまったんだろう、という後悔のほうが強いの。

少なくとも、私にはそう感じられた。

「水野さんが、正臣を好きなのよね」

いたずらにウィンクして見せた。

「やっぱりバレてたんだ……」

「うん、バレバレ。おそらくクラスで知らない奴は、正臣本人を残すのみだと思うよ」

クラスメイトの態度から薄々感じてはいたから、いまさら驚きはしなかった。

そう考えると、最後まで気がつかない正臣君は、もう超が冠に付くくらい鈍感で、鈍感で、鈍感だ。

女心が分からない、という冠もおまけで付けたいくらい。

「気がつかなかったな。和輝君が香奈さんを好きだったなんて」

「隠していたつもりはないんだよ。ただ、俺の周りには、積極的に好意を態度で示す人間が多くてさ。木を隠すなら森の中というか。意図せずにそうなったみたい」

「香奈さんも……そうだもんね」

グラウンド上では、スリーアウトで守備と攻撃が入れ替わる。それを一瞥した和輝君が、興味を失ったように窓から離れて、教室の出口に歩いていく。

話は終わり、背中から和輝君の声が聞こえてくるようだった。

「香奈は正臣が好き。水野さんも正臣が好き。俺は、そんな香奈が好き」

出口近くで立ち止まった和輝君が、香奈さんの机を見下ろしている。

「俺の親友はさすがにモテるな。でも、あいつは……」

「正臣君は？」

私は思わず声に出していた。正臣君のこととなると、耳を手のひらより大きくすることが出来るのが、私の隠れた特技。悪い癖だ。

「……あいつの好きな人って誰かな、と思ってさ」

でも、に続く言葉としては不適切だと思う。

とつさに言おうとした言葉。それが禁句であることが分かって、あわてて取り繕った。

私の第六感はそう教えてくれた。

「和輝君は知ってるの？」

「……知らない」

平板な声は、これ以上の言及を許さない。

「でも、もしも、あいつが他の誰かを好きだとしたら……」

和輝君の言おうとする言葉が、テレパシーのように私の脳に伝わった気がした。

でも、それは幻聴に過ぎなくて。

テレパシーはシンパシーに過ぎなくて。

「救われないな、俺たち」

肩越しにその言葉を残して、和輝君は教室を出て行く。

和輝君の言葉に負けそうになる私がいた。

引っ込み思案で、香奈さんのように積極的になれない私。

勉強しか取り柄がなくて、正臣君を笑わせる冗談も思いつかない私。

和輝君の言う通り、救われないのかもしれない。

正臣発見！　かなり探したんだぞ！　それこそ掃除用具入れの中まで！

そうそう、体中縛られて、口にはガムテープ……って、いじめかよ！

遠くから、正臣君と和輝君が出会う声が聞こえて、私は自分のことのように嬉しくなる。

「生きている限り、可能性はゼロじゃないよ……きっと」

攻守の交代したグラウンド。
ピッチャーマウンド上では。
バッターから三振を奪った加藤さんが、
天に向かってグローブを
突き上げていた。

第A・7話・放課後の記憶はのちにデジャヴに変わる（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。面白いものって何でしょうね……自分の小説を読んできて、面白いと感じたことがないのでそれが分かりません。プロットに沿って書いていると、時々流れ作業になっていることに気がつきます。第三者になって、自分の小説を読みたいです……。世迷いことでした。

評価、感想、栄養になります。

第A - 8話・キスが痛みに変わった日

第二棟の三階。

廊下を直進した突き当たりにある観音開きの扉を開けると、そこはパラダイス。

広大な読書スペースには、大きな卓上の机が点在していて、卓の中央には仕切りのための板がある。誰の視線も浴びずに読書や勉強に集中できる点は、さながら専用の個室のよう。

奥には、本棚がまるで碁盤の目のようにぎっしりと林立していて、さらにその向こうの扉の中には、持ち出し厳禁の貴重な本まで置いてある。博物館にあってもおかしくないほどの貴重な初版本や、すでに発禁、または生産終了となっている本まで、まさに宝の山。自分の通う学校に大きな図書館があるなんて、本当に幸せだと思ふ。

……そう思っているのは、私だけかもしれないけれど。

「夏美、奥からこの本取ってきて」

間延びした声で、隣のクラスの中山由美がカウンターから声をかけてくる。

図書委員を通して知り合った子で、自由奔放で茶目っ気たっぷり。けれど、どこかいつも気だるげ。

面倒くさがりの彼女は、いつもそう言って面倒事を私に押しつける。

それでも、飽きもせず私と一緒に活動を手伝ってくれる彼女は、どこかで活動を楽しんでもいるのだろうか。

相変わらず気だるそうにしているけれど、目が合えば微笑む彼女に、私はそう思えた。

……憎めないのが憎たらしい。

そんな言葉が私の辞書に書き込まれた。

「この本って言われても、どの本なのか分からないよ……」
「ごめんごめん、『B』『さ』『一五四二』の本」

やはり彼女は面倒くさそうだった。

「分かった。すぐ持っていくね」

唐突だけど、私は放課後の図書室が好き。

誰もいない図書室に差し込む夕日、揺れる白いカーテン、野球部や、ソフトボール部の威勢のいい掛け声、吹奏楽部の音あわせ……まるで映画の一ページにいるような気分になる。

セピア色に彩られた空間は、太陽の余熱でほのかに暖かく、眠気さえ覚えてしまう。

まさに夢心地。

私は、貸し出し厳禁の本がぎっしりと詰め込まれた、奥の部屋に入る。

「えっと……『B』『さ』『一五四二』は……」

図書委員の私には、大体の場所が分かっている。

可動式書棚のクランクを回すと、大きくて長い書棚が、ゆっくりと動いていく。こんな大きな書棚が、小さなクランクひとつで動いてしまうのだから驚きだ。

その昔、この書棚にはさまれて死んでしまった生徒がいるそうで、学校の怪談のひとつに、この可動式書棚の隙間から漏れ出てくる血というものがあつたらしい。らしい、というのは過去の図書委員が残した日誌に挟まっていたメモを、先日偶然にも見てしまったから私は身が震えるような思いでさつさと目的の本を発見すると、その場を後にした。

「ねえねえ、夏美」
「何？」

私は持ってきた本を中山さんに渡しながら、次の仕事に取り掛かる。毎日のように繰り返される書庫の整理。

「見て、窓の外」

すでに図書室は閉館しているので、私たち二人以外誰もいない。私は、中山さんの言葉に耳を傾けながら、脚立に足をかけた。手には大量の本。

「あれ、正臣君じゃない？」
「え？」

私は慌ててしまつて、危なく脚立から落ちそうになりながらも、窓の外に目をやる。

「なんか、いい雰囲気」

中山さんが指差した方向には、確かに正臣君がいた。そして、その隣には、いつも正臣君のそばにいる女の子。

……中井香奈さん。

「あの二人、いつも一緒にいるよね。付き合ってるのかな？」

私は二人が寄り添う風景から目が離せない。

正臣君は私たちに背中を向けているので、表情は確認できないけれど、正臣君の正面に立っている香奈さんの表情は、はっきりと確認できる。

普段は静かに微笑を浮かべている香奈さんが、信じられないような幸せな笑顔を浮かべていた。

そんな風に正臣に笑いかけている様子を見ると、胸が締め付けられるように痛み出す。

「付き合ってるよね、なんかお似合いって感じ」

「……似合ってなんかないよ。香奈さんが一方的につきまとってるだけ」

冷たく、感情のない声を出してしまえる私に驚く。

中山さんもそんな私に気がついたようで、脚立の上で本を抱えたままの私を振り返る。

「どうしたの？」

「え……あ、ううん、幸せそうだね。あの二人」

本をばらばらと床に落としながら、私は答えた。

「その反応……いまどきドラマでも見かけないんだけど」

薄ら笑いを浮かべる中山さん。

私は大げさに胸の前で手をふり続ける。

中山さんのアンニュイな空気が、いつの間にやら霧散していた。

「ち、違う違う。私はそんなんじゃない……」
「へへ、怪しいなあ」

半眼で見上げてくる意地悪な視線に、私はひるんでしまう。

「違うつてば。中山さんが思っている感情なんて、私にはないよ」
「うんうん。分かる、分かるよ、その気持ち」

「……話、聞いてくれる？」

「この中山由美、水野夏美のために一肌脱ぎましょう!」

「あ、あの、私の話を……」

私の力なく伸ばした手は、脱アンニユイを果たした中山さんには届かなかった。

「なんと偶然にも、男のハートをがっちりつかむ、いい方法があるのよ」

窓の外の二人は、なにやら楽しそうに話をしているようだった。
和輝君と一緒にいる正臣君とは違う、普段見慣れない彼に、私の胸がざわめき立つ。

「夏美、男なんてね、結局は単純なものなのよ。正臣君もしかり」
腕を組んだ中山さんが、胸を張る。

「……名付けて、おまじない作戦」!

なんともメルヘンチックな作戦名。
ビルが鬱蒼と生い茂る現代には似つかわしくない作戦名に、私は

肩を落とす。

一方の中山さんは、一人で拍手をしながら、満足そうに納得していた。

満足のいく命名だったらしい。

「まあまあ、そう肩を落とすのも分かるわ。でも、最後まで聞いてから判断して頂戴な」

よほどの自信があるのか、中山さんは鼻息が荒い。

「まずは、二人つきりになること」

「それが一番難しいんだってば……」

心の中でつぶやいた言葉が、つい口から漏れてしまう。中山さんは耳にしているはずなのに、相手にはしてくれなかった。どこまでもマイペースな人だ。

「そして、次に甘えたような視線で、下から見上げる！」

両手を祈るように組み合わせると、脚立の上の私に、懇願するような眼を向けてくる。子猫のように目を潤ませるしぐさは、確かに可愛い。

「ねえ、正臣……元気になるおまじないがあるの……」

脚立の上の私を正臣君に見立てているようで、視線を絡ませるように、猫なで声を上げた。

「……」

私はぐくりとつばを飲み込む。同性なのに思わずときめいてしま
いそうになった。

「台詞はどうともなるわね。要は、ケースバイケース。相手が落
ち込んでいるようだったら、今の言葉を使えばいいし。二人つきり
で緊張しているようなら、『落ち着かせてほしい……』とかでもい
いかな」

「でも、変な女に思われないかな？」

「大丈夫。男心に訴えるから、そんなこと思いやしないって、そ
れに、夏美はただでさえかわいいんだから、二人つきりになった時
点で、半分はもう成功したものよ」

ウインクする中山さん。漫画ならハートが飛び出しているかも。

「半分なんだ……」

「あら、意外と贅沢なこと」

中山さんが、驚いたようにまばたきする。

「あ、違うの！ もっと自分に自信があるとか、そんなのじゃなく
て、その……もっと確率が高くなってからじゃ駄目かなって」

「夏美、それじゃ、正臣君を取られちゃうよ」

「そ、そうかもしれないけど」

「何かを失うことなくして、何かを得ることは出来ない！」

拳を高々と突き上げる、脱アンニユイ中山さん。

「さ、純粹さを失ってらっしやい」

お先にどうぞ、という風に私に手のひらを差し出してくる。

「失うのは、純粹さなんだね……」

どういった基準で純粹さが失われてしまうのか詳しく聞きたかったが、中山さんはやはりマイペース。

「私が脱げるのはここまでかな。これ以上は、別料金ね」

どうやらすでに一肌は脱いだらしい。意味深な言葉を残して、図書室を出て行こうとする。

「と、いうわけで、後は頼みます」

ぺこり、と私に一礼して図書室を出て行く。

「え……え？」

私はよどみのない動作の連続に、あっけに取られて引き止める暇もない。仕事を私に押し付けて帰ったと気がついたときには、すでに中山さんの姿はなかった。

ご丁寧に彼女は、仕事と一緒にアンニュイな気分も置いていったらしい。

その証拠に、私は今まさに倦怠感に背中を押しつぶされそうだった。

「や、やられた……」

私の周囲には私が落とした本が散乱している。そしてさらに、手も付けられていない本の山が、床に山積みになっていた。

窓の外に目をやると、正臣君はいない。

二人で仲良く会話していた姿は、すでにどこかへ消えた。山の向こうに消える太陽のように、恋人同士のような二人も街の中に消えてしまったのだろうか。

仲良く手を握り合って、体を寄せ合って、公園のベンチに座ったりして、唇と唇が接近して……。

「そんなのヤダよ……」

急に涙が出そうになる。妄想に火がついてしまっただけで止められない。……窓の外で会話をしていた。

たったそれだけの情報なのに、私の心はそれより先を想像して止まない。様々なパターンを想像しては、ありえない、と否定していく。

危機管理シミュレーション。

そんな言葉が、私の頭をよぎってしまっただけで、私は自嘲した。

「何かを失うことなくして、何かを得ることは出来ない……か」

期待して待っているばかりでは、正臣君はいつまでたっても私のことを見てくれない。ただの一人のクラスメイトのまま。自分から積極的に近づいていく香奈さんに、彼を取られてしまうのは、確実。私は自分の唇に触れてみる。

「頑張れ、水野夏美！」

脚立の上で、自分を自分で励まして、今度は別のシミュレーションをしてみる。

「正臣君……私ね……」

目をつぶって、教室の一角で二人きりになった風景を想像する。

放課後の教室、校庭からは野球部の掛け声、金属バットがボールをはじく音が入り込んでくる。オレンジ色に輝いた夕日が、教室に差し込んで、正臣君の反対側の頬には淡い影。穏やかな風が、開けっ放しの窓から入り込んできて、二人の間を軽やかに駆け抜けていく

「……元気になるおまじないがあるの……」

媚びるような声を出してみる。

瞳をまぶたの裏に隠して、ドキドキする胸を押さえて、少しだけ背伸びする。唇を正臣君に向けて、私は来るべき時を待つ。

正臣君の手が私の両肩に置かれて、二人は禁断のキスをする。

「水野さん、話があるって、中山さんから言われたんだけど？」

それは、もつと前の段階。今は、キスのシーンなんだから、その会話はおかしい。

私は脳内で映画監督のように女優に叱咤した。

女優といっても、私なのだけねど。

「水野さん？」

雑念が入り込んでいるようだ。

私は、シミュレーションに集中するために、首を横に振った。もう一度最初のシーンから。

監督が女優にかける言葉のように、私は心の中で念じた。

……放課後の教室、校庭からは野球部の掛け声、金属バットがボ

ールをはじく音が入り込んでくる。オレンジ色に輝いた夕日が、教室に差していて、正臣君の反対側の頬には淡い影。穏やかな風が、開けっ放しの窓から入り込んできて、二人の間を軽やかに駆け抜けていく

再び背景が鮮明に脳裏に描かれる。

「正臣君……私……」

「うん。何？」

リアルだ。非常にリアルだ。

私は想像の天才。

正臣君の生声を想像できてしまう私は、きっと妄想の天才だ。それだけ彼に惹かれていることが理解できて、胸が苦しくなる。

「元気になるおまじないがあるの……」

「おまじない？ 元気になるって？」

……なんだろう、この私の想像を超えるアドリブは。

「それより、水野さん、脚立の上でつま先立ちするのは、危ないからよしたほうがいいと思うよ」

「……え？」

私は、つま先立ち、唇を斜め上方に向けて尖らせたままの姿勢で、薄目を開ける。

脚立のそばには、窓の外にいたはずのあの人がいる。

……中山由美、曲者なり。

一滴の汗が、額から頬に流れていくのが分かった。

見られた。絶対に一部始終見られた。彼は見てた。彼に見られた。見られてしまった。

「あの！ これは！ 決して、そういうやましいことではないんです！」

慌てて体勢を戻して、頭を下げようとした。

「水野さん、危ない！」

気がついたときには遅かった。不安定な脚立の上でバランスを崩した私は、図書室の床に急降下する。

現実、かくも厳しいものか。

正臣君が、私を受け止めてくれることはない。そんな超反応が出る人間は、ドラマの中だけにしか存在しない。

転びそうになった主人公を抱きとめるとか、銃弾に撃たれそうになるのをかばうとか、そんなことは実際には起こりはしない。

正臣君が、私を助けようと必死に体を動かしてくれるのが、視界に映った。

それだけで、私は十分嬉しかった。

彼の頭の中には、今、私を助けようという気持ちしかないのだから。

そんな小さなことでも嬉しくなれる私。

なんて哀れ。

でも、これでさっきの奇行は忘れてくれるかな。帳消しになってくれるかな。

私はスローモーションのように流れる視界の中で、そんなことを思っていた。

病院に運ばれた私に伝えられたのは、右足骨折という診断結果だった……。

第A - 9話・大切なもの

朝の昇降口。

松葉杖をつきながら、そんな過去の苦い　　痛い　　思い出にふけていた私。

松葉杖のことを考え、いつもより朝早くに起きて登校することが日課になってしまっただけからは、自分の馬鹿さ加減を呪うように、毎日のように思い返していた。

あれは、きつと日頃から積極的になれない私への戒めなんだ。今ではそう思うようにしている。

「おはよ」

隣に並んできた加藤さんが、私に挨拶してくれる。考え事にふけていたからか、時間はすでに加藤さんが登校してくる時間になってしまっていた。

「加藤さん、おはよう」

落ち込みそうになる心を隠して、加藤さんに挨拶する。

「おはよう、水野さん」

驚いたことに、加藤さんの後ろから出てきたのは、正臣君の親友である、万年遅刻常習者の和輝君だった。

「か、和輝君？　どうしたの今日は」

歩くペースを、松葉杖の私に合わせてくれる和輝君の心遣いが、

嬉しい。

「ん、なぜだか早起きできたんだよね。神様の思し召しかな。日ごろから模範囚のような俺への」

「……すでに、投獄されてるんだね」

和輝君の、冗談か本気が分からない言動に、私は笑わされてしまう。正臣君がいつも楽しそうに笑っているわけが、分かった気がした。

「正臣君、きつとびつくりするね。和輝君がこんなに早く登校したことを知ったら」

「そうなんだよ！俺もそれが楽しみでさ。正臣のヤツ、俺が遅刻してくるといつも馬鹿にするからさ。今度くらいは、あいつのこと馬鹿にしてやるつもり」

正臣君の話題になると、本当に嬉しそうな顔を見せる和輝君。それは、私にとっても同じ。

和輝君から聞ける正臣君情報は、私にとっては何よりも有益なもの。

有益さで比べたら、学校の勉強内容なんて、正臣君情報の足元にも及ばない。

……ふと気づくと、いつもなら嬉々として会話に参入してくるはずの加藤さんが、後ろを黙ってついてきていた。

「加藤さん、さっき聞いたんだけど、今日これから集会なんだって」

楽観主義者の加藤さんにしては珍しく深刻な表情で考え込んでいたので、私は心配になってしまう。だから、教室に行けば嫌でも知ることになる今日の集会の予定を、話しかける材料にした。

「え、それって授業つぶれるの？」

授業がつぶれて欲しくない私としては、加藤さんの喜びようは、正直言つてとても複雑だった。

「授業がつぶれるのを喜んじゃ駄目だよ。次の授業で遅れを取り戻すの大変なんだから。先生も生徒も……」

「ま、それが加藤らしいよな」

笑って加藤さんの肩を叩く和輝君。

「正臣早く来ないかな、驚かせてやりたいよ」

憂鬱だったはずの朝が、正臣君の驚いた顔を想像するだけで払拭されていく。

「そうだね、私も楽しみ。正臣君の驚く顔、楽しみだな」

突然、パン、という平手打ちのような音が加藤さんから聞こえてきたので、私は驚いて振り向いた。

「よし！ 加藤優理子は、今日も元気です！」

体育会系らしい加藤さんの元気の出し方に、私は笑ってしまう。

「おかしな奴だな」

和輝君もつられて笑い出した。

「水野さん、正臣ってどれぐらいに登校してくるか分かる？」

「うーん、普段は、大体今の時間くらいかな。今日は遅れているみたいだけど……」

「それなら、俺も今ぐらいに登校するかな……。そうだ、加藤、さつきは断ったけど、お前も一緒に登校するか？ 俺一人では起きれないけど、お前と二人なら、連帯責任のようでは起きれるかもしれないし」

和輝君の何気ない問いかけに、加藤さんは飛び跳ねるように喜ぶ。

「する！ するする！ 登校する！」

「よし、そうと決まったら、明日から早速な」

「まかせてまかせて」

拳と拳をつき合わせて、意思の確認をする二人。

私は、そんな二人を見ていて羨ましくなる。

私が正臣君とそんなことが出来るとは思えない。

きつと、これからもずっと……。

「水野さんもうどう？」

「……え？」

誘われるとは思っていなかったの、私はびっくりしてしまふ。

私は怪我をしていて、松葉杖で、人一倍登校に時間をかけなければならぬ。そんな私に合わせながらの登校は、二人にとって負担でしかないから。

だから。

「私は、いいよ。早めに登校して予習したいから。だから、ごめんね」

「……そっか。それじゃ、正臣にも、そう言っておくよ」

和輝君が何を言っているのか図りかねる。

「正臣さ、最近数学分からないってばやいてるから、水野さんが教えてやってよ」

和輝君が、笑みを浮かべて、松葉杖で階段を上る私を手伝ってくれる。

「正臣も喜ぶと思うよ」

私は涙が出そうになるのをこらえながら、大きくうなづいた。

「ついでに私からも言わせてもらえば、夏美はもっと積極的になったほうがいいと思うよ」

加藤さんが、白い歯を見せる。

右から支えてくれる和輝君。その反対側を、加藤さんが支えてくれている。

私は二人に挟まれる格好だ。

二人とも大変なはずなのに、喜んで、笑顔で手伝ってくれる。

二人の何気ない厚意に、じわじわと胸が熱くなっていく。

「……がと………ありがとう……」

加藤さんの言う通り、少しでも積極的になってみよう。

少しでも勇気を出してみよう。

少しでも自分勝手になってみよう。

少しでも大好きな彼に近づいてみよう。

たとえ結果的に救われないとしても、何もしないまま救われない自分を後悔したくないから。

「気にしない気にしない」

右を支える和輝君が朗らかに笑う。

「これぐらい遠慮しない！ 友達なんだからさ」

左を支える加藤さんが、元気に笑う。

私を支えてくれる人がいる。

こんなにも優しい友人がいる。

だから、私の大好きなあの人にも、こんな優しさを伝えられたなら。

彼を思いやることが出来たなら。

支えることが出来たなら。

それはどんなに素晴らしいことだろう。

素敵なことだろう。

救われなくても構わない。

片思いでも構わない。

「……水野夏美……頑張ります……」

流れてしまった一滴を、私は止めることが出来なかった。

きっと今日という日は、私にとって大切な日になるに違いない。

だって、こんなにも優しさに囲まれていることに、気がつくことができた。

だって、あんなにも消極的だった私が、人生の階段を一步、踏み出すことができた。

私は生涯忘れない。

和輝君と、加藤さん、そして、大好きなあの人と出会ったことが
きた喜びを。

私は、生涯忘れない。

第A - 9話・大切なもの（後書き）

興味をもって下さった方、読んで下さった方、ありがとうございました。

久々の連続更新でした。

今回投稿した朝の登校風景は、加藤さん視点のものとリンクしています。……はい、ダジャレです。

面倒ですが読み比べてみると面白いかもしれません。あくまで、かも、です。

それではこれからも細々と頑張っていきます。

評価、感想、栄養になります。

第A - 10話・白と黒

夢と現実の境界は、いつたいどこにあるのだろう。

痛覚があれば、それは夢？ 現実性がなければ、それは夢？

私はどちらも現実と夢を分ける根拠とはならないと思う。

夢は脳とリンクしているし、痛覚とも関連付けられていてもおかしくはない。現実性だって、ただの思い込みに過ぎない。誰かに植え付けられた一方的な当たり前を、当たり前と思い込んでいるに過ぎないのだから。

もし、長い、とても長い夢を見ることができたなら。

夢はきつと現実になってしまふと思う。

そして、もし、現実から覚める、という言葉があるのなら。

私は、今すぐにでも、現実から覚めたかった。

「夢じゃないんだね……私が見ているのは現実なんだよね……？」

甘く、それでいて、心地の良い映像の連続だった。

「……水野さん」

「加藤さんは……加藤さんは、どうなったの……？」

仰向けになって倒れてしまった私の背中を支える和輝君。

「加藤は……」

語尾を濁しながら、真一文字に引き結んだ唇。その先の言葉を紡ぐのを拒否するように、和輝君は下唇を噛み、縫い合わせた。

「死んだわよ」

腕を組んで、ぶっきらぼうに言い放ったのは、睦月さんだ。

「死、んだ……？」

鈍器で殴られたような衝撃。

痛みを感じない衝撃は、私の視界を多重に分裂させた。

私の背中を支えてくれる和輝君の体が強ばる。

「……なんで？　なんで助けてくれなかったの？　和輝君……加藤さんはね……加藤さんは！」

甘い夢の残り香。

私はまだ現実にとどまり続ける夢の映像をつなぎ止めた。

和輝君と会話した放課後の風景、休み時間のノートを巡る攻防……青春と呼ぶにふさわしい、青く切ない出来事。

「友達だよね？　今日だって、二人で一緒に登校しようって約束を」

拳を付き合わせた二人の笑顔がよぎる。

「彼氏に文句を言うのは、筋違いもいいところ」

彼氏ではない、そんな訂正をすることすら億劫に感じられる。体の中に、血ではない黒く濁った液体が流れ込んできた。

関節の動きを鈍化させるぬるぬるした液体。

私はそれを振り払おうとする。

取り付かれたら、飲み込まれたら終わり。

自分でも気付き始めている黒く、悪寒すら感じる物体に、私はあらがいたかった。

「一隻のボートがあるじゃない？」

組んだ腕をほどいて、世間話のように話し始める睦月さん。

「アンタはそれに乗ってる。定員は三人」

睦月さんの三本の指が私に突きつけられた。

教師が駄目な生徒に何とか理解させようと、仕方なく同じ説明を繰り返すように、それは特大の倦怠感を臭わせた。

面倒臭い、そんなわずらわしそうな臭い。

「で、近くに三人が溺れていて、二人助けられる。全員助けたら、定員オーバーでボートは沈み、全員助からない」

私の体を浸食する、黒い液体の勢いが早まる。

「アンタならどうするわけ？」

生徒会長が、軽く鼻で笑っていた。
馬鹿な質問をしたものだな、と言いたそうに、めがねの橋を持ち上げる。

「参考までにその日と見主義者、答えてみなさいよ」

睦月さんににらまれた佐藤君は、驚いて自分の背後を振り返る。
もちろん、背後には誰もいない。

「アンタよ、アンタ。他に誰がいるっていうのよ」
「……ぼ、僕のことなのか？」

自分を指さして、心外そうに眉根を寄せる。
確認するように生徒会長の目の色をうかがったが、残念ながら生徒会長は取り合ってくれないようだった。

「そうよ、当たり前じゃない」
「……く」

奥歯をかみしめる耳障りな音。

「定員が、三人なんだ。二人助けるしかないだろ……」

佐藤君の答えに眉一つ動かさず、睦月さんの視線が生徒会長に動いた。

「質問の意図が分かりかねるな。その質問は……百人が百人、同じ答えにたどり着く。まあ……溺れる者は藁をも掴む、と言うから、

助けようとするれば其相応の危険も伴うわけだが。そう考えれば……溺れる者をすべて見捨てるという答えもありだな」

さも当然とばかりに、口元に笑みを浮かべた。

「そ、そうだ！ それに、ボートで救助する状況が曖昧だ！ 溺れている人間の体型とか、性別とか、判然としていないぞ！」

佐藤君がこれ見よがしに、睦月さんの揚げ足をとろうとする。

佐藤君にすれば、睦月さんの、凶星を突かれた、という苦い表情を見たかったにちがいない。

「痛いところを突いてくるわ」

佐藤君の頬の筋肉が、満足そうに動く。

しかし、言葉とは裏腹に、睦月さんは痛みどころか、かゆみすら感じていないようだ。

「……って、聞きたかったようだけど、一度死んだ方がいいわね。馬鹿は一度死ななきゃ治らないし。まして、二度あることは三度ある。念のために、三回死んだ方がいいんじゃない？」

佐藤君の意気が、簡単に崩れ始める。

「そんな屁理屈は、どこかの某匿名掲示板にでも書き込めば？ ま、アンタならすでにやってそうだけど。荒らしとか得意そうだし」

抵抗する人間は、容赦なく叩き潰す。

「力では対抗できない軟弱な人間の末路ね。社会的には弱者のまま」

完膚無きまでに。

「話がそれたけど、彼氏はどうなの？」

呪詛を唱える佐藤君を無視して、睦月さんは和輝君に問いかける。

「俺は彼氏じゃない」

「悪かったわね、それじゃ、ナイト」

「……」

私の背中を支えてくれる和輝君が無言を貫く。
相手をするだけ無駄だと感じたのだろうか。

「そっか、聞くまでもなかったのを忘れてたわ」

私に近づいてきたかと思うと、片膝を着いて顔と顔をつきあわせる。

鼻同士が今にもぶつかりそうなくらい。

睦月さんの長い漆黒の髪が揺れると、今まで気がつくことの無かった芳香が私の周囲を覆い始める。

女らしく上品でありながら、雨上がりの午後のような爽やかな香り。

「ナイトのしたことは、正しいのよ」

漂う香りはこれほどまでに優しいのに、突きつけられる言葉には、
一片の優しさもない。

「放送機材をどけて、あの女を助ける……素晴らしいくらいの友情

ね。聞いてるだけで涙が出るわ。でも、その後はどうする気？」

睦月さんの香りは、そのまま彼女のテリトリーであるかのように。壁際に追い詰められたネズミは、自分の不運を呪うしかない。配役を考える必要がないくらい、私はネズミそのものだった。鋭すぎる視線で射抜かれて、声も出ない。

「あのタイミングでもう一度ドアを閉めて、さらに放送機材を積み上げる時間があった？」

満員のボートの上に私はいた。

その下で加藤さんが溺れていた。

加藤さんが無我夢中で伸ばした手を、私は。

「答えは、ノーよ」

私はそばに落ちていた松葉杖を素早くつかんで、睦月さんに振り下ろしていた。

右足の痛みはすぐに私を襲ったけれど、後悔はしていなかった。怒りに身を任せることが、心地よいとすら思えたから。

「分かっているようだから、もう一度言っわ」

私が振り下ろした松葉杖をいとも簡単に受け止めて、さらに顔を突きつけてくる。

ネズミは、どんなにあがいても、ネズミでしかなかった。

「私たちが助かるためには、あの女を見捨てるしかないのよ」

私に突きつけてくる眼光は、まるで死神の鎌。

「それ以外に選択肢はないわ。ボートの例もそう。余った一人を見殺しにするのが正しい選択よ。それが人間だもの。見捨てることで罪悪感にさいなまれるのは、少しだけ分かる気がするわ。でも、アంతは言い訳できるわよね？ ナイトと違って」

ちらりと和輝君を見る。

「私は助けようと思いました。でも、周りがそんな私を拘束して、助けられないようにしました」

鳥肌が立つくらいの猫なで声。

聞いているだけで腹部が煮えたぎってくる。

「だから、私は助けたくても、助けられなかったんです。私は悪くないんです」

一オクターブ高い睦月さんの声は、私の声真似なのだろうか。語尾を上げる抑揚。それでいて男にこびを売るような。

温厚なはずの私にも、生まれて初めて堪忍袋があることを知った。

「……でも」

突如、睦月さんの表情が、声とともに一変する。

「ナイトは違う。ナイトは、名前を呼ばれてしまった。因縁を作ってしまったのよ」

和輝君は、加藤さんに存在を確認されたときに、しまった、という顔をした。

あの顔の訳。

「命の危険が迫れば、人は常軌を簡単に逸する。見苦しいことだって平気です。なんでもするから助けて。そう言う奴を助けても、そいつは何でもなんてしないわ。助かるためなら、嘘でも平気で言う。使える手段は何でも使う。そう」

松葉杖を受け止めた手に、握力が込められるのが分かった。それは睦月さんの言葉に熱がこもっている証拠だった。

「すぐれるものなら、どんな人間だろうとすぐるのよ。罪悪感を作れるだけ作って、自分を助けて欲しい状況を作らせる」

松葉杖を握りつぶさんばかりの握力は、彼女のどこから出てくるのだろう。

少なくとも突発的ではない気がする。

太古から心の奥に寄生し続けているような。そんな過去の記憶に根ざしているように思えた。

「……あの女もそれが手だったのかも」

「違う！ 加藤さんは違う！」

突発的だったのは私の方だった。

……一方で、その突発性が私を少しだけ安堵させた。

少しでも思考してしまったら。迷ってしまったたら。即答できなかつたら。

それは、少なからず加藤さんを疑ってしまったことになる。信じていないということになってしまう。

「言っておくけど、一番つらいのは、アンタじゃない」

私の思考を呼び戻すように、詰め寄ってくる。

「一番つらいのは、名前を呼ばれたナイトなのよ。アンタは助けを求められなかったただけ幸せ。見捨てたことにはならないもの。ただ、見てた、だけ」

屁理屈だと言ってやりたかった。

けれど、彼女の言うことは、なぜかすんなりと頭の中に入ってくる。

それどころか、私をがんにがらめにしようとする黒い液体に、力を与えさえた。

「でも、ナイトは違う。助けて、そう言って伸ばされた手を振り払った。因縁を作ってしまったナイトは、見るだけではなくて、見捨てなければならなくなった。もちろん、それは呼びかけに答えたナイトの落ち度だけど、名前を呼ばれたからには、罪を犯さなくてはならなくなったのよ」

助力を得た黒い液体が、私の血に混ざり、私自身を黒くしていく。暗鬱とした気分が、私の思考を黒くしていく。

「……もういい」

背中を支えてくれる和輝君の、押し隠すような声も聞こえないほどに。

「力もない。案もない。それだけならまだしも」

睦月さんも聞こえなかったのだろう。

いつそう凄みを増した炯眼で、私の脆弱な心を射る。

「出来もしないのに、そうやって良い人ぶるの止めてくれる？ 何にも分かってないくせに」

ああ……彼女は知っている。

私が優等生であると。

口から出る言葉と、心の奥に秘めたものが、少なからず異なっていることを。

同様に、笑顔の裏にあるものや、優しさの裏にあるものも。

「虫酸が走るのよ。いかにも正しいことをしています。正しいんです、って顔して、被害者面……」

痛みは、鈍痛へ。

骨折した右足よりも激しい。

打ち身……違う。もっと胸の奥。

鈍痛は、激痛へ。

心臓……違う。もっともっと胸の奥。

「被害者は扉の外で死んでる女、ただ一人なのよ。残りは加害者ではないわ」

……そう、これは、私の心が傷ついている痛み。

友人を助けようとして、実は助けることができないと知っていた。右足が不自由な私に、あるとき何ができたというのか。

たとえ、加藤さんの呼びかけに答えたとしても、私一人では積み上げられた放送機器を取り除くこともできない。

仮に、取り除くことができ、扉を開けたとする。

でも、その後は？

足手まといである私が、加藤さんを救うなんてできたろうか。
伸ばされた手を取ることができただろうか。

加藤さんのように襲われ、辱められ、なぶり殺しにされるかも知れないと考えただけで、私は身が震える思いだというのに。

私が加藤さんの立場じゃなくて良かった。

心の奥で、黒い液体が渦巻いた。

白くて、きらきらしていたはずの心の奥が、汚されていく。

正臣君じゃなくて良かった。

いや、違う。

白いと思っていたはずの心は、遙か昔にすでに汚れていて、輝いていたはずの心も、同じく光を失っていたのではないか。

まだ清いままだと、自分勝手に思いこんでいただけではないのか。
見ようとしなかっただけではないのか。

「私は……私は……」

松葉杖を取り落として、私は自分の手のひらを見つめた。
暗闇も手伝ってか、両手はうつすらと黒い。がたがたと震え、病人のよう。

「加藤さんを助けられないと理解していて……でも、助ける振りだけしたくて……それで……」

袖の隙間から、黒い触手のようなものが飛び出してくる。

それはムカデのように無数の足を持ち、ゴキブリのように長い触覚を揺らし、蜘蛛のように鋭い手を持っている漆黒の影。

べたべたと這い回り、蠢き、私の手を黒で埋め尽くす。

まるで、血塗られたように。

「……みんなが私を引き留めてくれて……口をふさいでくれて、良かったって……止めてくれなかったらどうしようって……そう思ってた……！」

私の手が黒く染まっていく。

心の奥にある真っ白な家は、廃墟のように真っ黒だ。

その中には倒れている真っ白な私がいて、そばで見下ろしている

黒ずんだ私もいる。

黒い手にはナイフが握られていて、返り血を浴びている。

白い私が呼吸を失っていくのが分かった。

落ちたガラス細工のように、心が壊れていくのが分かった。

「私は自分が好きだから……みんなに悪い子だって思って欲しくなくて……」

黒い私は、見ている私に気がついたのか、ナイフを振り上げたまま近づいてくる。舌なめずりしながら、面白がるように獲物である私に焦点を合わせる。

「嫌われたくなくて……助けようとしたふりでも見せればって……」

黒い私が、ナイフの柄に力を入れた。

きらりと光ったナイフの切っ先には、すでに乾き始めた血の紅。狂気に頬を歪めながら、私の目の前へ。

……問答無用。

黒い私がナイフを横様に振り抜いた。

「水野さん！ もういいんだ！」

ナイフの切っ先は、私の首筋をかすめていった。

「俺が加藤を見殺しにしたんだ！ 水野さんは悪くない。悪いのは俺だ。俺が殺したんだ！」

和輝君が私を後ろから抱きしめる。

「俺は知ってる。今言ったことは、水野さんが考えるようなことじゃない。暗い気持ちにとらわれたら駄目だ。そんな気持ちに負けちゃ駄目だ！ 水野さんは水野さんの意志で、優しい心で、加藤さんを助けようとしたんだ」

力強く、それでいて、深く。

「とっさに出た優しさは、打算なんかじゃない！」

白い私が、力を振り絞って立ち上がる。腹部から血を流しながらも、黒い私に歩み寄っていく。

「水野さん……水野さんの優しさは嘘なんかじゃない」

白い私に抱きしめられた黒い私は、まるで灰にでもなったように空に立ち上って消えた。

「きつと正臣も、分かってくれる」

その言葉が最後だった。

大好きな彼の笑顔が私の心に広がったかと思うと、温かく清らかな液体が心臓から送り出される。

水を得た魚のように駆けめぐったそれは、黒い液体をあつという間に洗い流した。

「だから、そんなこと言うもんじゃない」

排出は、涙腺から。

ため込んだものが流れていく。

黒く染まっていた心の家が、少しだけ白さを取り戻す。

人は生まれながらにして善、と孟子は言った。
人は生まれながらにして悪、と荀子は言った。

汚れていくのか、それとも、綺麗にしていくのか。

私はどちらなのだろう。

でも私はどちらともであって欲しかった。

たとえ汚れていくと知っても、人は償うことができる。

償うことで、汚れをぬぐうことができる。

そう思いたいから。

たとえ、真っ白にはなれないとしても。

私は白になりたい。

「言っちゃ駄目なんだ、水野さんだけは……」

その始まりの涙が、私の握りしめた両手を濡らしていく。

第A - 10話・白と黒（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございました。ありがとうございます。アクションがないですね……。いつになったら、アクション部分までたどり着けるのでしょうか……。これは、ライトノベルなんです。誰がなんと言おうと、娯楽アクションのつもりなんです。そんな作者の自己満足でした。

今回の執筆につき、ローリング・ストーンズの「Paint it black」（邦題「黒くぬれ」）を聞いていました。そのせいか、思いつきり黒だとか白だとか比喩的に使ってしまいました。歌詞は関係ないんですけどね……。

影響されやすいのは駄目ですね、反省です。

長々と申し訳ありません。

評価、感想、栄養になります。

第A - 最終話・彼女が見つけた結晶

真夜中に蛇口から落ちるたった一滴の雫。

蛇口の先につららのようにゆっくりと水がたまっていって、やがて……人知れず落ちる。

涙のように、一滴、ぼとり。

無人のキッチンに響くその清澄な音は、長い時間をかけて溜まっていた無為なものなのに、なぜか胸が締め付けられるように寂しく心に響いた。

真夜中に目が覚め、窓から差し込む白刃のような月光が、キッチンに差し込んでいる。

恐ろしいほどの静寂と、張り詰めた空気。

不意に私はそれが不気味に思えてなくなる。

寒くもないのに身震いしたかと思うと、急に不安に襲われた。

私はしっかりと蛇口を閉めて、水漏れのないようにする。

それは、私の心と一緒にだから。

確たる自分を持って、きっちりと閉じておかないから。

だから、すぐに揺らぐ。すぐに、染み出す。

長い時間をかけて一滴は落ち続け、気が付けば大河になっていた。大河になれば、もう止めようがない。

心も、涙も。

私がこぼした涙はまさにそれで、最後の一滴は、時間が止まったかのようにゆっくりと落下し、和輝君の袖に染みこんでいった。

「格好いいわね、さすがナイト」

私が放棄していた松葉杖を、和輝君に突きつける。

「女の扱い方も、心得てるのね」

和輝君は、心底忌々しそうに睦月さんを見上げた。

「俺には、守りたいものがある」

松葉杖をつかむ。しかし、睦月さんは離さない。

二人の間に、意志の火花が垣間見えた気がした。

お互いに譲ろうとしない視線での戦いは、和輝君の先制攻撃で幕を開ける。

「それを守るためなら、どんな犠牲だって厭わない。たとえ世界中が敵になっても、世界を犠牲にしても、俺には守りたい大切なものがある」

松葉杖を握りしめあう膠着状態。

「そのためなら……もし、そのときがくれば……俺は迷わずこの場にいる全員を見殺しに出来る」

周囲の飽和した空気が動き出す。

生徒会長は興味深そうに頷きながらメガネをなおし、佐藤君は和輝君の言葉に少なからず動揺していた。

睦月さんは、均衡していた松葉杖の競り合いをあっさりと止めて立ち上がる。

「……アンタ、和輝って言ったわよね」

私は真っ赤に晴れ上がってしまっただろう目をこすり、二人を見比べた。

お決まりのポーズなのか、鷹揚に腕を組み、和輝君と再び視線を重ねる。

重ねると言っても、恋人のように甘い視線の絡み合いではない。かといって、剣戟のように火花散るものでもなく。

「そついうの、嫌いじゃないわ」

まるで握手でもするかのような、敵同士、健闘を誓い合う行為にも思えた。

もちろん、馴れ合いなどは微塵も存在しない。

「私も似たようなものだし。他人を助ける義理なんて、もらうのもあげるのも嫌。ま、そんな私でも、売られた喧嘩は高く買うけど。もちろん、格安で売ってあげてもいいわ」

鼻で笑う。

「勝手にしてくれ」

「ええ、言われなくても勝手ににさせてもらっわ」

組んでいた右手を軽く振って、和輝君を見下した。

「……水野さん」

私は腫れぼったい目をぱちくりさせて、後ろから抱きしめてくれた和輝君を見上げた。膝について座り込んだ私を労って、背中を支えてくれている。

抱きしめてくれた、と一言で言っても、女らしい部分には直接触れようとはせず、そこを避ける形で抱きしめてくれていた。

「和輝君？」

右手は私の首元から回すように、左手は腹部を回すように。私が正臣君を好きだと知っているからなのか、どさくさであっても無遠慮なことはしない。

私が自分を見失いかけたときでも、和輝君は慌てずに、そこまで頭を回転させていたのだ。

逆に言えば、その冷静さ、思慮深さが、和輝君の聖域内に私がないことの証。

そして、その証から導き出される結論は、先ほど和輝君が宣言したとおり。

この場にいる全員を見殺しにする準備が出来ている、ということ。

流れ落ちたはずの汚れ。

白い家に、未だわずかな黒ずみが残る。

「今はそのときじゃない。だから、それまでは……」

無理しないで。

そう言ってしまいたかった。言っただけだった。

けれど、足手まといの私には、自分一人で出来ることなど極端に限られていて。

和輝君の手を借りずに、大好きな人に出会える可能性はゼロに近くて。

私は、本当にずるい人間。

和輝君の優しさからくる責任感や罪悪感に、みつともなくすがりつくしかない情けない人間。

分かっていて、おんぶにだっこをしてもらうしかない弱い人間。甘えてもいいと、和輝君は言ってくれた。

だから、甘えてもいい。

甘えてもいいんだ。

そのためには、右足が骨折していることを悲しげな顔で訴えて。大丈夫だよと、あえて強がり言うって。

時々、わざと口に出して痛んで見せて。

弱者であることを、庇護してもらうことを当たり前のようにさせなければならぬ。

弱い人間には、弱い人間なりの処世術がある。

図書室で中山さんも言うてくれたように、私は確かに可愛い。かも知れない、なんて世間体を気にした言い回しはしない。

私は可愛い。

鏡を見て、時々、可愛い顔で良かったな、と微笑んでいる醜い自分がいるから。

口では、可愛くなんか無い、と遠慮してみせるが、自分が可愛いことぐらい誰よりも自分自身が知っている。

男子の態度を見れば一発で分かる。ある種の、バロメーター。クラスメイトの男子が、すぐにでも駆け寄ってきて、助けてくれることに優越感を抱いたりもした。そうでない女の子が確かにいる

から。

比較すると、余計に分かる。

そう……弱くても、私は可愛いから、優等生でみんなに優しくしてきたから。

誰かが必ず助けてくれる。恩を返してくれる。

たとえ下心があつたとしても、誰かを味方に出来る。

出来ないよりは、出来る方が何倍も心地いい。

弱者は、群れないと生きていけないから。

誰もが、睦月さんのように孤高でいられないから。

「……和輝君、ごめんね」

情けは人の為ならず。

私は、私のために誰かに優しくしているんだ。次に助けてもらうために。

私が助けた人に、罪悪感と、後ろめたさを植え付けるために。

ぬるま湯につかるような心地よさを持った集団、馴れ合いの集団を作るために。

それが弱者の生き方。弱者なりの生き方。

私の生きる術。

「もういい。もういいんだよ……」

私。そんな私。

自分が好きで、どこかで他人を見下してもいて、打算的で、和輝君が言うほどの優しさもない私。

それを必死になって隠し続けて、優等生を演じてきた私。

みんなに、大好きな人に好かれようと、必死になっていた私。寂しさに殺されないように躍起になっていた私。

こんな私でも、和輝君はそのときまで守ってくれるという。私は領域の外側にいるのに。

「ありがとう……ありがとう、和輝君……」

和輝君のたくましい腕を通して、彼の守ろうとする意志が、ぬくもりとなって伝わってくる。

かけがえのない、あるイメージを伴って。

「私……今すぐに正臣君に会いたい」

自然にこぼれだしていた。

「……うん、俺も正臣に会いたい」

和輝君の腕が震えた。

「正臣君に会ったら、こんな気持ちもなくなるのかな……？」

正臣、という確たる名前を出したことで、和輝君の力がほどけていくのが分かった。

今なら、和輝君の心の内側に入っていけそうな気がした。

鎧を脱いだ生身の心は、それこそ傷つきやすい鏡面体。

人間なら誰しもそうであるように、和輝君も支えられなければ生きていけない脆弱な部分がある。

手を伸ばせば触れられるような気がした。

入り込んでしまえば、和輝君は最後まで力になってくれるかも知れない。

「ああ……きっと無くなる。あいつなら、すべてを許してくれる。一緒に悩んで、傷ついて、最後には特大の笑顔をくれる」

でも、それだけは出来なかった。してはいけないと思った。

和輝君の声は、切に正臣君を求めている、私の心にも響いてくる。これほどまでにずる賢く、打算的で、薄汚れている私でも、一つだけ純粹な、真っ白な気持ちがあるから。

嘘偽りのない想いがあるから。

だから、彼の聖域に踏み込んではいけない。

「分かるよ……和輝君の気持ち」

正臣君が、恋しい。

「欠点も多い奴だけど、その欠点を補って余りある優しさを持った奴だから」

焦るとすぐに失敗して、慌てて謝って、でも最後には笑顔で終わる。

「鈍感だけだね」

「……補ってくれるさ」

何だろう　心が温かい。

「だいいいな」

素肌を通して染みこんでくる郷愁。

ぼかぼかして、太陽の下にいる感覚。忘れていたノスタルジー。

幼い頃、畳の上でお腹を出して寝てしまつて。

そんな私に、そつと毛布をかぶせてくれた優しさ。

薄目をあけると、そこには正座した母がいて、幸せそうな丸い顔があつて。私を起こさないように気遣いながら、ゆっくりと薄い毛布を掛けてくれる。

しばらく微笑みながら、愛しそつに、本当に愛しそつに私を見下ろしていた。

そこには、自己愛も、ずる賢さも、打算もない。
あるのは純白の想い。

ただの、愛情。けれど、この世で唯一の汚れなき心。

ずつと、忘れていた。

……うつん、思い出さなかっただけ。

生きることの難しさに、埋もれてしまっていただけ。

友人間のしがらみや、醜聞や、体裁、心の探り合い、騙し合い……
そんな細かいテクニクに忙しく時間を費やしていたせいで、考えることさえなくなっていた。

思い出せば、いつでもあつた。思い出さなくても、心の中で息づいていた。

たった一つ、誰にも譲れない、純真無垢な私自身。

うまく言葉で言い表すことが出来ないけれど、私はそれを、正臣君に伝えたい。

伝えたくて、知って欲しくて仕方がない。

「正臣君のために」

「正臣のために？」

私は背中を向けていた和輝君に向き直る。

「私は生きるよ」

和輝君はそつと微笑んでくれる。

「私達は……に訂正してくれるか？」

「え……」

私が疑問符を浮かべる間もなく、和輝君は言葉を紡いだ。

「正臣のために」

私はすぐに気付いて呼応する。

「正臣君のために」

二人の共通の想いを誓い合う。

「俺達は生きよう」

「……うん」

私が頷くのと時を同じくして、和輝君が勢いよく立ち上がった。

「あ……」

「どうしたの、和輝君？」

「黙って！」

自分の口元到人差し指を持つてくる、沈黙のジェスチャー。

私と和輝君のやりとりをつまらなそうに傍観していた他の三人も、それぞれの反応を見せる。

睦月さんは、皮肉ろうとした言葉をいらだたしげに飲み込み、生徒会長は、直したメガネが再びずり落ちていた。

佐藤君に至っては、二度、両肩びくりと跳ね上がらせ、尻餅すらついていた。

そんな三人とは対照的に、和輝君は細心の注意を払いながら耳をすませる。

「……聞こえた」

道の先に待つのは、生か、死か。

外側から施錠された扉を見、和輝君が静かに審判を下す。

「……今、あいつの声が聞こえた」

幽霊にでも取り憑かれたように、扉から身を離す和輝君。

「ちょっと、どうする気？」

取り憑かれたと言っても、その姿はまるで東大寺法華堂に飾られた金剛力士像のよう。

今まで失ってきた何かを帳消しにするような起死回生の姿。和輝君にだけ聞こえた声は、よほどのものなのだろう。

「引いて駄目なら、押してみる。押して駄目なら」

自らの身を省みないで、和輝君が加速した。

「……ぶち破るだけだ！」

扉から十分に距離をとると、低い体制で、弾丸のように飛び出す。一歩、二歩、三歩。

それは、自動車で言うところのギアチェンジ。

一速、二速、三速。

爆発的な燃料を搭載したまま、急加速を経て、和輝君はドアを突き破った。

「正臣！ 香奈！」

真っ暗闇だった放送機器が詰められた部屋に、満を持して外光が差し込む。

私はあまりのまぶしさに目をつぶるしかない。

……まぶたの上にかざした手の向こうで、和輝君の歓声が聞こえた気がした。

「え？ 人間？ 人間なの？」

「睦月、早く行け！ 邪魔だ！」

「早く、ど、どいて！」

なだれ込むように外に転がり出る三人の背中。

光をうまく制御しつつある私の瞳孔は、ようやく失われた景色を取り戻す作業に入る。

「佐藤君、大丈夫です。まだ十分もちますから、あわてないで」

足下に転がっていた松葉杖を何とか拾い上げ、私は転びそうになる佐藤君に続いて外へ。

長いようにも、短いようにも思えた悪夢からの解放。

暗闇からの脱出は、一時的な解決に過ぎないのだと分かっている、私は胸を撫で下ろさずにはいられなかった。

白く靄がかった景色が、日常を取り戻す。

体育館の外は、入場したときと何も変わらない。

学校が崩壊したわけでもなければ、血みどろの戦争があるわけでも、世界が荒廃しているわけでもない。

外界には悪夢など無く、すずめが木の上で楽しげに鳴いていて、太陽光がさんと降り注いでいる。心地よい風が私の首元をなでていくと、木製の体育館らしい木の匂いから、学校を囲むみずみずしい新緑の香りに変化した。

まるで悪夢が嘘のように。

すずめが飛び、風が髪を揺らし、太陽の暖かさを感じ、愛しき人の姿を目に宿す。

夢にまで見た姿は、当たり前のように列挙した中であつた。

枯れたはずの目から、熱いものが流れ出るような感覚。当たり前なのに。

全てが当たり前のはずなのに。

でも、今となつてはすごく愛しく、待ち望んでいた当たり前がそこにある。

少し長い髪が微風と遊べば、寝癖らしき跳ねっ返りは逆らうように揺れる。

きつと寝坊したに違いない。

寝癖のせいではつきりと見える福耳は、今日も今日とて健在。気だるそうなまぶたが、優しい瞳を隠そうと重くのしかかる。

今にもあくびが飛び出しそうな口元は、扉にうつぶせになる和輝君のせいで、開けっ放しだ。

少だけ笑ってしまいそうになる。

これが日常。ずっと、私が欲しかった日常。

苦しみが、悲しみが、醜い自分の黒ずみが吹き飛んでいく。

けれど、その隣で微笑む小柄な少女を見つけてしまう。少女の瞳が、漆黒よりも深い闇変わった気がした。

目が合えば、相変わらず微笑む少女の静かな佇まいは、触れるまで認識出来ない、まるで静電気のような雰囲気をもっていた。

しかし、私はそんな些細なことよりも、今は再会の感動を味わいたかった。

「あ、正臣君に、香奈さん、無事だったんですね！　よかった……」

一瞬、和輝君と目が合う。

彼の目には、正臣君に対する慈愛と、過保護にすら思える思いやりが混同していた。

きつと、加藤さんのことを言っているのだと、私は直感した。

知らないことが幸せ。

もし、その選択肢の後に、知ることの不幸が加われば、人は必ず後者を選ぶ。

和輝君の目は、選択肢にすら上さないことを以心伝心させていた。二人共通する正臣君への想いが、そうさせたのかもしれない。

正臣君のために私は生きる。

過去からの声が聞こえ、不意に私は見つけた。

「和輝、それよりも何やってるんだ？　俺、今日は学校ないようだから、これから帰ろうとしていたところだぞ」

和輝君は正臣君のあまりの間の抜けた問いかけに我を忘れている。

「学校なんてどうでもいい！」

それは、突然。本当に突然に、私の心に去来した。
私は心中で繰り返す。

思い出せば、いつでもあった。思い出さなくても、心の中で息づいていた。

たった一つ、誰にも譲れない、純真無垢な私自身。
私は心中で繰り返す。

繰り返して、欠片を拾い集めて。
たった一つの言葉に結晶する。

「今はとにかく」

正臣君に伝えたい。見せてあげたい。
自分でも綺麗に、上手に出来たから。

そうか、これがそうなんだ。

生まれて初めて分かったよ。

これが。

この結晶が

愛、なんだね。

第A・最終話・彼女が見つけた結晶（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

このような経緯を経て、彼らは正臣という人間と出会い、あるいは再会したのです。少々後付感はありませんが、実際に後付なので仕方がありませんね。元々、こういった番外編を書くことは想定していませんでしたので……。

さて、次回からはまた別の視点、時間でお送りします。今度は一体誰になることやら……

評価、感想、栄養になります。

第B - 1話・翼（前書き）

新しいアナザーストーリーです。前回を引き継ぐわけではありませんのでご注意ください。

第B - 1話・翼

翼を失った鳥は、大地に落ちて一体何をなすのだろうか。

大空を自由に飛び回り、飛ぶことの出来ない他者を悠々と見下ろしていたときには、ついぞ抱くことの無かった思考。

両翼を広げ、風に乗り、誰よりも高く、早く飛ぶことの出来た者が大地に落ちたとき、彼の者は一体何を糧として生きるのだろうか。

飛び立てず、大空を見上げ、過ぎた夢を見るだけだろうか。過去に思いをはせるだけだろうか。

傷ついた翼はただの足かせに過ぎない。

翼をいやすこともままならない今、大地をはいずり回るしかないのだろうか。

「……先輩」

私は傍らで眠る先輩の額をタオルで拭う。

先輩の長い髪の毛が、苦しそうに寝返りを打つ度、真っ白な額に執拗に張り付く。私がそれを丁寧に取り除いてあげると、再び先輩の苦痛に歪む美顔を見ることが出来た。

「苦しいんですね」

こんなにも美しく、此の世に永劫称えられるべき芸術品である先

輩が、どうして苦しまなければいけないのか。
考えるだけで、やるせない思いに支配されていく。

「どうすれば、先輩を救うことが出来ますか？ 痛みを取り除いてあげることが出来ますか？」

先輩の耳元でささやいてみる。こういうのも睡眠学習というのだろうか。

「もしも、取り除くことが私に出来たなら、先輩は私を心の中に加えてくれますか？」

先輩がどうして苦しみ、どうして私の前で泣いたのか。

「加えていただけたら、私はきつと欲張りになってしまう」

涙を流す姿など、誰にも見せたことなどないのに。

「先輩、私はきつと先輩の全てが欲しいんですね」

圧倒的な強者である先輩が、私に対して弱みを見せてくれたことはとても嬉しかった。

心の奥が締め付けられるような愛しさに襲われ、その場で卒倒してしまいそうだった。

でも、そうならなかったのは、先輩の弱さを知ってしまったという、幻滅の心もあったから。

幻想が壊れ、裸の先輩を見ることが出来たことへの嬉しさと、自分が思っていた以上に幻想にすがっていた私の揺らぎ。

「ねえ、先輩……？」

幻想か、それとも、真実か。

そのせめぎ合いの中で生まれたのは、私がかつて持ち得ていた愛しさを上回る、狂おしい感情の本流。

異常とも思える感情だった。

「もし先輩が私のものになって、私に表情の全てをくださるのなら、心の全てを、体の全てをくださるのなら……」

想像しただけで心臓が高鳴り、真っ赤な溶岩が私の心を埋め尽くす。

他の感情を全て溶かし、灼熱で上書きしていくどろどろとした流れ。

何物をも溶かす絶対的な熱量を持った心。

「……いいえ、違う。先輩は誰のものにもならない。孤高で、絶世で、それでいて誰よりも美しい輝きを持った人だから、きっと誰も先輩を手にするることなんか出来ない。でも、ならせめて……」

先輩の唇が開かれ、苦しそうに呼吸をする様は、嗜虐心を刺激させられる。

苦しむ姿でさえ艶やか。

細い眉の根元に刻まれるしわも、歪む頬の筋肉も、鎖骨に流れ込む汗の水滴も。

その全てが欲情をかき立てる。

「先輩の……睦月先輩の心のそばに、私を置いてください」

先輩が苦しそうにうめいた。

汗はいつの間にか噴き出して、私は慌ててそれを拭う。

閉め切られたカーテンから差し込む月の光が、先輩のまぶたを切り裂いた。どうやら、覆われていた月が、雲の中から逃げ出したらしい。

私は先輩の眠りを妨げてはと、静かにカーテンを閉める。

右手に持った、先輩の汗を吸収してぐっしりと濡れたタオル。

鼻元を持っていくと、女らしい香りの中に、わずかに野性的な香りが混じっているように感じられた。フレグランスの内側に隠された先輩自身の香り。

名残惜しく思う自分を封印して、新しいものと交換しようと先輩に背中を向ける。

「……真由？」

「先輩、目が覚めたのですか？」

「ええ、そうみたいね。ひどく気分が悪いわ」

忌々しそくに歯を食いしばる先輩。

「何かお食べになりますか？」

「いらないわ、何も」

「では、飲み物は……？」

「いらないって言ってるじゃない」

口調が強くなるのが分かったから、私は静かに引き下がる。

「……申し訳ありません」

深く頭を垂れて、先輩の汗がしみたタオルを握りしめる。

「真由」

「はい」

謝罪に曲げた腰を真っ直ぐに戻すと、先輩の顔は険を減らしていた。

「八つ当たりだから気にしないで。水が飲みたいわ」

「すぐにお持ちしますね」

タオルを握りしめた握力をゆるめ、私は小走りにキッチンへ向かう。

心が晴れていくのが足取りで分かった。

八つ当たりされれば誰でもむっとするはずなのに、私はそれが嬉しかった。鼻歌が飛び出しそうなくらい。

単純な思考だと人は馬鹿にするかもしれないけれど、きっと私のように思い入れが強ければ強いほど、簡単に揺れ動いてしまうのだと思う。

まるでショックを吸収するバネが私と先輩を隔てているよう。衝撃を与える者に近づけば近づくほど、バネは縮んでしまい、吸収する余力を失ってしまう。結果、私は直接衝撃を受け、揺れ動く。

思い入れが強い私を例えればそう。でも、もし思い入れが強くなければ、距離は離れているのだから

バネは衝撃を吸収する余地を多大に持つことになる。

その分、衝撃を簡単に吸収し、結果私も揺れ動くことはない。

風変わりなたとえかもしれないけれど、心躍る今の私には十分適合するたとえだと思った。

そんな発想を胸に秘めながら、綺麗に磨かれたコップに氷を二個投下し、冷蔵庫に買いだめしているミネラルウォーターを注いでいく。

「先輩、お持ちしました」

「ありがと」

コップを受け取ると、元気よくのどを動かして一気に飲み干した。のど元があらわになり、カーテンから透ける月光を浴びて淡く光る。

余った氷のうち一つを指でつまみ、口の中に入れる。濡れた指の先を軽く口に含んで水分を拭う様は、妖艶さすら感じられて、あまりにも絵になりすぎている。

月光に光る唇の隙間から指を抜き出したとき、先輩の瞳が私をとらえた。

「私がそんなに可らしい？」

「違います！ 睦月先輩が……あ、あまりにも綺麗なものですから

……」

「知ってるわ。腐るほど言われてきたから」

呆れたようにため息をついて、乱れた髪を手で整えていく。

「申し訳ありません。でも……」

両手に力が加わる。

「そんな睦月先輩が、どうして苦しまなければならないのですか？」

私の問いに答えるための熟考なのか、それとも単に答えるのが面倒なためなのか、先輩は自らの汗で濡れたベッドから立ち上がり、カーテンを開くまで、言葉を発することはなかった。

純白の月光が先輩を包み込む。

「真由……確か言ったわよね。昔好きだった人がいたって」

「……言いました」

光を背負いながら、先輩が自分を抱く。

自嘲するように口を笑みの形に曲げると、ちょうど背負う月の形に似ていることに気がつく。美しい二つの月はなおも輝き続けようとするが、やがてどちらも雲に隠れてしまう。

「私にもいたわ」

「聞きたくありません」

即答していた。

反応したのは脳ではない。脊髄が反射的に返答していたようだった

た。文字通り骨の髄まで、私の感情が染みこんでいるに違いない。だからこそ、これほどまでに即座に答えることが出来たのだろう。

「いたのよ。たった一人だけ」

小さな雲を払いのけ、月が再び顔を出す。

つぶやいた先輩が窓を開けて外気を取り入れた。

月からの使者を思わせる外気は、そつと先輩に寄り添い、汗で濡れた長い髪と遊び始める。

右に揺らし、左に揺らし。

まるで、つかの間のチークダンスを踊っているようだった。

「先輩、止めてください」

幻想的な光景には無粋な私の声。

「好き……違うわね、愛していたわ」

過去形でつぶられた言葉だとしても、終わっているのだとしても、先輩の口から紡がれる、愛、という言葉に、私は体をかきむしりたくなる。

「睦月先輩！」

先輩がそこまで心を許してしまえる、傾けてしまえる人間が存在していることが悔しかった。

一度耳に入り込んだその言葉は、もうきつと私の心からは出て行ってくれない。

「愛していると、初めて口にも出したわ。手で、体で、心で、結びついた。何度も……それこそ、すり切れるくらい。痛むくらい……確かめ合った」

海馬が、シナプスが、四方から鎖でつなぎ止めて、一生記憶の牢獄に閉じこめておくに違いない。先輩の一言一句を。そして、私は忘れることが出来ずに、ずっと苦しみ続ける。

先輩には、愛を注いだ者が存在していたという事実には。

「……でも、違った。理解したのよ」

開け放った窓から、先輩が手をのばす。自分の手を月にかざし、手のひらを眺める。

表、裏。

手のひら、手の甲。

「ぬくもりを抱いた日々はもう終わり。そして、新しく始める……過去の私に戻って、そこから始める」

月を握りつぶし、私に向き直る。

帰る場所を無くした 自ら退路を断った かぐや姫は、不敵な笑みを浮かべながら、冷徹なまでの意志で私に問う。

「真由……アンタはどうするの？」

決まっている。改めて自問自答などしくとも。

「私は睦月先輩のおそばにいます。いさせてください、最後まで」
窓のそばにたたずむ先輩の足下で膝をつき、ゆっくりと抱きしめる。

先輩の腰は高く、膝について抱きしめても顔は腹部には届かない。それでも私は先輩の臀部の綺麗な形を感じ、太もものなめらかさを感じた。

「本当に馬鹿な子」

かしづく私の頭に先輩は手を置いてくれた。

「はい、私は本当に馬鹿な子です」

馬鹿でも構わない。愚か者でも構わない。
異常者とののしられても、常軌を逸しているとさげすまれても。

「大馬鹿」

「はい……」

それでも先輩のそばにいたい。

彼女の右腕の代わりになりたい。右足の代わりになりたいと思える。

「馬鹿」

「はい……」

私の頭に置かれた手は、撫でってくれるためにそこにあるのではない。慰め合うために触れるのではない。

優しさを与えないと明言しているから、撫でずにただそこにあるのだ。

「馬鹿」

「はい……」

先輩を苦しませた元凶を、涙を流した原因を私は知らない。

力強く、天空へ羽ばたくことの出来る先輩から、翼をもぎ取り、大地にたたき落とした者がいる。

それだけならまだしも、愛を注いだ先輩を悲しみの奈落へ突き落とす者がいる。

私はそれから先輩を守る。身をていして、人間の盾になって守りたい。

たとえ先輩に愛されることはなくても、私を瞳の中に納めてくれないでもいい。

そう、私は愛されなくてもいい。

ただ私が愛した人に限りなく尽くすことさえ出来れば。
先輩が高く羽ばたくための踏み台になれば。

私は愛されなくても本望。

「馬鹿」

「はい……」

千日手のように繰り返された同じ言葉の応酬。

うざったそうに私を引き離れた先輩が、バスルームに吸い込まれるのを見届けて、私は遙か高空で輝く月を仰いだ。

兎が餅をつく、というファンタジーはとうの昔に捨て去った。同じように、夢や希望も。

「由美お姉ちゃん、大君……私、三年前のように、もう何も失いたくないの」

二人も、きつとどこかであの月を見上げているのだろうか。

「最後までそばにいたいから、二人なら私のわがママを許してくれる？」

闇夜に流れた一条の星は、二人の返答が肯定であるような、そんな気がした。

窓から吹き込む風の冷たさに、気がついたように身を震わせる。

しっかりと窓の鍵を閉め、少し離れたクローゼットの引き出しを開けると、そこから大きめのバスタオルを取り出した。

先輩の整った肢体に勢いよくぶつかる水の音。

私は先輩の体を包むだろうバスタオルを抱きしめながら、足早にバスルームに向かう。

第B - 1話・翼（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

この一話のみですが「スクール・オブ・ザ・デッド」から二作目をつなぐエピソードです。また、ちらほら出たりします。続編のちょい出しとっていただけると嬉しいですね。……といいますか、解説している時点で不手際が多すぎる作者です。

次回から、ある姉妹とある幼馴染みの「スクール・オブ・ザ・デッド」を始めます。よろしくお願いします。

評価、感想、栄養になります。

第B - 2話・姉妹

「お姉ちゃん！ 由美お姉ちゃん！」

ノックもせずに開けた扉の向こうには、一面の赤い景色が広がっていた。

真っ赤なカーペットに足を踏み入れ、少女はゆっくりと深紅のベツドに歩み寄っていく。

「…………お姉ちゃん？」

身動き一つしない姉を見下ろしながら、少女はそっと手を伸ばす。

「ねえ…………お姉ちゃん…………」

そっと姉の肩に触れ、赤く染まった姉を揺り動かした。

わずかな揺れでも目を覚まそうとしない姉に、少女はあせりを覚える。

「起きてよ…………」

あせりは、すぐにふくれあがった。

「お姉ちゃん…………起きてつてば！」

赤に囲まれた姉はなおも動き一つ見せない。

激しく揺り動かしても、幾度となく名前を呼んでも。

時計の秒針が時を刻む。

耳の中に入っていき、あせる心を加速させる。

一秒が一秒だと思えないほどに、その一時が伸長していく。

「お姉ちゃん！」

叫びにも似た声は、やっとベッドに横たわる姉に届いたらしい。
びくりと痙攣した姉は、妹のあせりをよそに、ひどく下手くそな
言葉を形成した。

「オ……ねが……い」

姉の返事にほっと胸をなで下ろそうとした瞬間、いきなり飛び起
きた姉に遮られた。

真っ赤なカーペットに尻餅をついて倒れた妹は、意識があるのか
無いのか判然としない姉を驚いたように見上げるしかない。

「お、お姉ちゃん……」

信じられないといった表情を浮かべる妹と、機械のようにぎこち
ない動きを繰り返す姉。

「オ、オ……ね……がい」

「お姉ちゃん！」

絶叫が、真っ赤な室内に破裂した。

「……お願い、もう少し寝かせて」

姉はばたりとベッドに倒れ込んだ。

「駄目！ 遅刻しちゃうでしょ！」

あせりを満面にたたえて姉をベッドから引きずり出すと、カーペットに転がす。

「うーん、カーペットもふかふか……」

お気に入りの真っ赤なカーペットにほおずりしながら、まぶたを落としていく。

「お姉ちゃん！ 今用意してあげるから、もう少しだけ、もう少しだけ意識をしっかり！」

エマージェンシー。

緊急事態。

任務内容。

姉が眠るまでに、着替えを見つける。

妹の頭にそんなテロップが流れ出した。

時間は限られている！　いいか、ヒヨッコども！　可及的速やかに、任務を遂行せよ！

鬼軍曹が、言葉汚くほえる幻想のおまけ付き。
妹は心の中で答える。

サー、イエッサー！

「真由……お願い……もう眠らせて……私、とっても眠いの」

「お姉ちゃん！」

姉の上下のまぶたが、つぶらな瞳を隠そうとする。

「見つけた！　お姉ちゃん！　これ、モルヒ……じゃなかった、着替え！」

クローゼットの引き出しから、パンツやらブラジャーやらを取り出して、姉に放り投げる。

ふわりと舞った緋色のそれは、見事にカーペットにほおずりして

いた姉の目の前に着地する。

細かい刺繍が入った赤い下着。

上下おそろいであり、なおかつ薄手の生地は、どこか蠱惑的だ。

「……く、なんで」

人知れずつぶやいた妹。

姉に気付かれないように、投げる前にちらりとサイズを盗み見ていた。

……残念ながら、僅差での敗戦。

カップ一つの差だった。

けれど、そのカップ一つが大きい。

たとえるならばアジアチャンピオンズリーグと、ヨーロッパチャンピオンズリーグぐらいに、カップの規模と質が違うのだ。

下唇を噛む妹は、ウエストの勝負に持ち込むことにした。

寝る子は育つもの。

ウエストという土俵で、ぐうたら、かつ面倒くさがりな姉に負けるわけがない。

間違いない、勝っているはず。

重ねて言えば体重もだ。

そんな自負を胸に秘めながら、妹は壊れかけたプライドを何とか修繕するのだった。

一方、妹の複雑な乙女心など我感せずの姉はと言えば。

目の前に舞い降りた自らの下着を、寄り目になって見つめていた。

「……今日は、勝負の日じゃないわよ、真由」

おしりを突き出した格好で寝そべる姉が、論点のずれたことを言う。

「寝ぼけたこと言わないで！ 毎日が勝負よ！ 私にとっては！」

しばしばドラマや映画などで、寝ぼけたことを言うな、という台詞がある。

妹は思った。

おそらくこれが正しい使い方だろう、と。

「……今、妹が大胆発言を」

「違う！ 方向性が違う！」

もちろん、毎日時間と勝負しているのである。

「……真由、脱退するの？」

「私はメンバーを捨てて一人歩きするボーカルじゃない！」

「冗談よ、もう真由ってば……朝からテンション高いアルよ」

油の切れた機械のように姉の動きが鈍くなる。

「中国人っぽく言っただけ駄目！……って、そこ！私が丁寧に
つつこむのをいいことに寝ちゃ駄目！」

「……………チッ」

「舌打ち！？起こしてあげた妹に舌打ちしましたよ！このお姉
ちゃんは！」

うちひしがれる妹などお構いなし。

姉はなおもお尻をふりふり、カーペットに頬をすりすり。

よほど睡眠にご執心と見える。

睡魔が視認可能な動物だとすれば、おそらく姉は睡魔に上から覆
い被さられているに違いない。

蛇足だが、きっと睡魔の姿は溶けかかったパンダのような格好を
しているに決まっている。

姉は寝惚け眼のまま大きなお尻を右に左に揺らすと、みっともな
い格好で、お気に入りの真っ赤なパジャマを脱ぎ始めた。

立つことを知らないのだろうか。

どこまでも面倒くさがりな姉に、妹はがつくりと肩を落とす。
人類が立ち上がったから、気の遠くなるような時間が過ぎたのに、
姉は無様にも退化している。

目の前でカーペットにはいずり回っている姉は、妹にとってどこ

かナメクジを連想させるものだった。

妹の想像は、もはやほ乳類ですらない。

「あゝ……脱げないようゝ」

睡眠時間を得るために、わざとまたもたしている姉を見て、妹が
心中で一句。

じらす姉、理想の就職、ストリッパ……。字余り。

「うゝん……脱げないゝ」

なおも姉の格闘は続く。

「……脱げない……脱ゲナ」

パジャマのズボンを半分脱いだ格好のまま、とぎれた言葉尻とともに停止する。

「お姉ちゃんが、抵抗するのを放棄した!？」

……妹は強く確信した。

この姉の面倒くさがりな性格は、一生かかっても治らない、と。

「駄目だよ、お姉ちゃん！ 頑張つて！ お姉ちゃんならきつと出来るよ！ あきらめちゃ駄目だよ！」

「むむ、あれ駄目これ駄目それ駄目……妹はそうやって姉のフリーダムを奪おうとする」

「私はお姉ちゃんのフリーダムを奪おうなんて思っていないよ！」

ナメクジに化けた姉が、屁理屈の鬼と化す。

「妹よ、そんな君に……ジャスティスはあるのかね？」

半眼で指を突きつける姉。

言葉とは裏腹に、全く威厳がない。

「フリーダムもジャスティスもないよ！ 私がナーバスになってるのは、マイシスターが、タイムにルーズで、トウバーッドだつてことだよ！ ハリーアップ！ ゲッドアップ！ スタンドアップ！ これ以上は、さすがの私も、堪忍袋がプットアップウイズでなくなるよ！」

息を切らせた妹の耳に、窓の外でおしゃべりをする小鳥たちのさえずりが入り込んでくる。

室内の喧噪に比べ、窓一枚隔てた向こうは平和そのもの。

肩で激しく息をしながら、妹は小鳥たちをとてもうらやましく思

っていた。

「……姉は今の言葉の半分以上を理解できなかった……」

「……妹も言つて何が何だか分からなかったよ……」

一人称を変えてため息をつく姉妹。

姉は自分の英語力の無さを呪い、妹は虚無感で目にじんわりと涙を浮かべた。

「真由、私、決めたよ。起きようと思うんだ」

決意の朝。

姉の勝負下着である真っ赤な下着が、握り拳からはみ出している。

「うん……うん……私もそれがいいと思う」

目に浮かべた涙を指先で拭い、やっと進化してくれた姉を感動のまなざしで見つめた。

ナメクジから、人類へ。

前向きに考えれば、途方もない大進化だ。

後向きに考えれば、やっと人並みに戻れたと言うことか。
妹はそれすらも度外視して感動していた。

「少しだけ待って、すぐに着替えるから」

次の瞬間。

妹は、驚きに目を見開くことになる。

姉が着替えていた。

なにより、一人で出来ていた。

問題なくパジャマのボタンを外すことも出来た。

姉は、進化したのだ。

やっと人間に戻れたのだ。

一人で着替えられるようになったのだ。

「真由……」

登校の準備を整えた二人は、お互いに頷き合う。

「お姉ちゃん……」

さあ、一日が始まる。

「パンツをはかないで行くのは止めてね」

三点リーダをいくつ使っても足りないくらいの沈黙を経て、姉は頬を指でかきながら、笑って見せた。

「面倒じゃない」

「面倒じゃない！」

「だよね〜！ 同意してくれるなんて、お姉ちゃん嬉しい〜」

自らの両手をがっちり合わせながら、大きな目でウインクを飛ばす。組んだ手を頬のわきに添え、絵に描いたようなしなを作る姉。

「……あ！ お、お姉ちゃんの愉快的冗談でした〜、あ、あはは〜」

姉の趣味である真っ赤な装飾を施した真っ赤な部屋。温暖化がコンセプトの赤い部屋に勝るとも劣らない、真っ赤な妹の憤怒に、姉は慌てて睡魔を捻り潰した。

……一分後の玄関。

「さ、さあ！　行くわよ真由！　遅刻遅刻〜！」

王道ともいえる食パンをくわえた姿で、元気よく玄関を飛び出していく姉。

そんな姿も、どこか面倒くさがりな姉らしい。

翻ったスカートの中には、姉の大好きな色である赤い下着があつて、鞆には赤いキーホルダー。携帯電話も、もちろん赤。

赤には食欲増進の効果があると色彩心理学でも証明されているけれど、ハンバーガーが好きな姉ならばそれも頷ける。

放課後にふらふらとハンバーガー店に入店する姉。

彼女は黄色と赤で彩られたファーストフード店の目論見に、ままと乗せられているというわけだ。

「もう……由美お姉ちゃん……調子良すぎるよ」

そんな姉にどこか頬がゆるみそうになる自分を慌てて訂正して、妹は振り返る。

「お母さん！　お父さん！　行つてきます！」

奥から聞こえた優しい両親の声と、前方で手招きしながら走る姉の呼び声。

その中心で、妹は知らず微笑んでしまうのだった。

第B - 2話・姉妹（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

そして、ごめんなさい。今回は至ってコメディです。私にとっては、以前書いたコメディー小説を思い出すようで楽しい執筆となりました。少なからずいい経験になっているように思います。慣れないことに挑戦したかがあるというものです。

もちろん、今まで完全なるシリアス路線で来たので、ふざけるな、と言う方がいらっしゃるかもしれません。もちろん、苦情も謹んで受け付けます。

そういった様々な点でまだまだ未熟な作者ですが、これから頑張ります。

評価、感想、栄養になります。

第B・3話・弓道場の二人

早朝の弓道場。

射場に立ち、盛り上がった安土を見つめる一人の男。

射法八節をゆつくりと行い、弓を引き分けた。

自らの動きを脳裏に描きながら、流れるように射法に従うその姿は、袴姿ということもあって実年齢よりもだいぶ大人びて見える。

弦が引き絞られると、まるで心までも張り詰めていくようだった。

引き分け……会。

弓を引き絞る極限の状態が、男が一番好きだった。

矢を放ち、的の中心を射る瞬間にも、もちろん爽快感や達成感はある。けれども、男は思うのだ。

精神、身体、弓矢。

その三者が渾然一体となり、今まさに爆発しようとしている。度重なる段階を、礼節を経て、やっとたどり着ける爆発の時。

その先に待つであろう解放感。

己の中にみなぎる気迫をたたえ、隅々まで伸ばした自分の体に行

き渡らせる。

足袋をはいたつま先から、ゆがけをはめた指の先まで。天と地に届くようなイメージで体の隅々を伸張し、発射の機をうかがう。

無意識のうちに体の奥底からふくれあがってくる透明な力。

有視界が限りなく狭まっていき、やがて視界は的と矢をつなぐ一本の線のみとなる。

肌にまとう袴でさえ、億劫だ。

弓が体と同化する。そんな極限までたどり着きたい。

そのためには、まだ。

まだ、何かが足りない。

男は大きく息を吐く。肺が酸素を失ってきしみ出す。

遠く離れた的の中心が、残像を伴ってクロースアップしていく。

集中力を帯びた目がそうさせるのだろう。

手を伸ばせば、的に触れることが出来そうだった。

吐く息を止めた。

力はまだそこにある。

求める力ではない、解き放つ力。

抑圧、その先に満を持す解放。

カタルシス。

だが、まだ……まだそのときではない。

もう少しだけ、もう少しだけ待てば、極限にたどり着ける。
今までずっと追いかけて、手の中からすり抜けていったもの。
あと、ほんの少し待てば。

きつとこの手の中に、抱くことが出来るはずだ。
理解できるはずだ。

けれど、手でつくった水が、指の隙間から流れ落ちていった。
カタルシスを待つ男の意志に、初期微動が走る。

限りなく膨張させた精神と身体が、我慢できずに弓と矢からあふれ出したようだった。

均衡を失い、暴走する。

ゆらりゆらりと動き始め、均等に行き渡っていた力が身勝手な方向へ。

まるで綱渡りだった。

一度バランスを乱せば、立ち直すのは容易ではない。

男の迷いは、そのまま弓へと伝わる。

抑圧された戦場では、たった一発の銃弾が、戦争の引き金となるものだ。

本人が望んでいなくとも、恐れる心が、震えた指先が、誤って引金を引かせてしまう。

極限とは、一歩間違えば破壊にも、再生にも変わる。

いわば未知のエネルギーの集合体。

男のアンバランスな心が、指先を動かす。

今。

男は望まない引き金を引いてしまったのだ。

離れ。

一瞬遅れでやってくる脱力感と、的に命中する音。それは、銃声のように男の耳に届いていた。

快哉を叫ぶ声はそこにはない。

残心の中に、やりきれぬ思いを抱きつつ、男はゆっくりと息を吸い込んだ。

久しぶりの酸素に、体が喜ぶのが分かった。

「アンタは離れるまでが長いのよ」

的の隅にかろうじて命中した矢尻がぶるぶると震える。

「一矢射るのにそんなにもたもたしてたら、射る前にアンタは失格。そんな奴は矢を欠ける必要なんて無いわね。練習用のゴム弓でも引いてるのがお似合いよ」

ふてぶてしい態度で壁により掛かっている女。腕を組んで、小さな口をつり上げた。

「睦月、そんなことを言う前に上級生に対する口の利き方を少しは学んだ方がいいと思うぞ。もっと言葉遣いをしとやかにするとか、目上の者に敬意を払うとかだな……」

残心を十分な時間をかけて解除すると、男は睦月に向き合った。矢尻の揺れが止まるのと同時に、朝の少し冷やかな風が、射場に吹き込んでくる。

朝露のみずみずしい匂いに混じって、弓道場独特の匂いが戻ってきていた。

木と汗が長年かけて培ってきた匂い。たとえるなら、神社の境内のそれ。

「私は誰にもこびたりしない。それに、高く買う価値もないのに、払う敬意なんてあるわけじゃないじゃない。逆にこっちに払って欲しいわ。それとも、アンタには私に敬意を払わせるだけの価値があるって言うの？ 弓道部副部長、あかつきだい暁大センパイ」

センパイ。

そう言った睦月の言葉には、込められるだけの皮肉が込められている。日本全国どこを探しても、その発音の仕方は見つからないだろう。

「ああ言えばこう言う女だな……」

大は困ったように眉根を寄せるが、それ以上に感情が高ぶったりはしなかった。

日頃から困らせられている。

そんな気配すら漂うあきらめがそこには漂っていた。

「アンタがつまらないこと言うからでしょ」

「……俺はそれ以前に、睦月が面白いと思うことがあればそっちが

知りたい」

この世に存在するかどうかすら怪しい睦月の面白いこと。
大も睦月と同じく皮肉を込める。

「アンタが吠え面かいて土下座したあと、安土に横たわって頭の上
に的をのせるのよ。それで、私がその的に向かって射るわ。生と死
の紙一重って興奮するし、どんなショーより面白いわ」

腕を組んだまま、大の横に並ぶ。

「お前はウィリアム・テルか」

「睦月零よ、私は」

「知ってる」

「ならいちいち間違わないで。痴呆症？」

「……ボケが通じない奴」

無遠慮な言葉の応酬の中で、幼馴染みの姉妹を思い出す大。

物心ついたときから隣に住んでいて、機会さえあれば一緒に遊ん
だりした遠慮の知らない幼馴染み。

どうやら、睦月との遠慮のない会話が思い出のトリガーになった
ようだった。

中山姉妹。

中学を経てからは、男女間のプライバシーやら、社会への体裁から、大手を振って　それこそ本当に手をつないで　遊びに出ることはなくなつたものの、今でも交流が途絶えることはない。他人に話せば本気ともとられかねない冗談でさえ、言葉の機微を感じ取って冗談だと即断できる腐れ縁。

中山姉妹。

姉、中山由美。

一見ぼけつとしているが、興味のあることには積極的。珍しく放課後も図書委員の活動をこなしているらしいが、ただ単に恋に悩む委員仲間にいらぬお節介をにかけているだけという噂がある。

面倒くさがりは子供の頃からで、背負つた荷物　責任　をよく周囲に押しつけていた。

することは子供っぽく、どうでもいいことに頭を使うことが得意だ。そのくせ、体だけはしっかりと大人びていて、グラビアもつまるのではないかという反則技。

体は子供でも、頭脳は大人。

そんな少年探偵とは正反対な彼女は。

頭脳は子供でも、体は大人。

面倒くさがりな人間だからこそ、そこまで育つたのだろうかと思

をかしげたくなる。

寝る子は育つ……とは、よく言ったものだ。おそらく、全国の婦女子が聞いてうらやましがる成長の仕方だろう。

中山姉妹。

妹、中山真由。

母体から早く取り出されたために、妹というレッテルを貼られてしまった哀れな子羊。

面倒くさがりな姉をことごとくフォローしてきたために、人一倍精神年齢の成長が急速だった。

料理は、小学校に入学した頃にはすでに熟練の域に達していて、背伸びをしながらキッチンに向かっていた。その後姿は、驚嘆を通り越して尊敬の域。

ぶかぶかのエプロンを花嫁衣装のように床に引きずる様は、本当の意味での幼妻だった。

掃除機の口にはっぺたを吸い込まれて大泣きしたのは、今でも良い笑いの種。

興味のあることだけに熱心な姉とは大違いで、何にでも一生懸命。さらにはある程度こなしてしまうせいか、器用貧乏なところもたまにきずだ。

……最初に母体から取り出したのが真由の方であったのなら、周囲の納得する良いお姉さんになれただろう。

そんな絵に描いたような姉妹と、そして、幼馴染みの構図。

今時ドラマでも流行らない、時代錯誤な設定の元で成長してきた。

幼い頃、公園の帰り道。

夕焼けに染まる空の下で、電柱にぶら下がっている電灯に少し早めの明かりがともる頃。

大ちゃん、今日はカレーだよ！

右手には姉由美の手があって、わがままぶりを象徴するかのよう
にぐんぐんと先へ進む。

由美お姉ちゃん、早いよ！ 大君だって苦しそうにしてるの
に！

左手には妹真由の控えめに握る手があって、自分も苦しいはずな
のに中央の俺を思いやってくれる。

とても心地の良い、幼き頃の思い出。

今でも、思い出さずにはいられない、淡く懐かしい思い出だ。

微笑みが無意識のうちに作り出されていく。

「大……アンタ、何を薄ら笑い浮かべてるのよ。気持ち悪い」

大は射場からのぞく早朝の空に、いつのまにか過去を投影していることに恥ずかしくなる。

急騰。

大の顔が燃え上がった。

第B・3話・弓道場の二人（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。区切りが悪いので、今回は二話に分けてしまいました。申し訳ありません。アクションパート……あと少しで……たどり着きます。久しぶりにアクションが書きたいです。

そんな作者ですが、これからもぼつぼつと頑張ります。評価、感想、栄養になります。

第B - 4話・的中

「心の中で、私を裸にするのがそんなに楽しい？」

呆れたように両腕を広げ、肩をすくめる睦月。

「ば、馬鹿を言うな！ 誰がお前なんかを裸にするか！ …… って」

肩をすくめた睦月の胸を凝視する。

もちろん、その形の良い胸が気になった訳ではない。

「あ、そうだ。そんな奴と話しに来たんじゃなかった。とんだ時間の浪費。私としたことが、今更思い出したわ」

制服の上から胸当てがされていた。

胸当ての中に押し込められている胸は、どこか窮屈そうだ。

「これ、後で返しておいて」

「……ふざけたことを言うな」

そんなことをすれば、間違いなく変態副部長のラベルが貼られるに決まっている。

副部長は、誰より早く弓道場を訪れ、鍵を任されているの良いことに、部員の胸当てで、あんなことや、こんなことをしていました……。

「ま、とにかくアンタがそう言っても、私はこれ置いていくけど。後は野となれ山となれ。アンタが適切に処理しないと、結果的には

同じことよ」

大はいくつもの言い訳と打開策を浮かべながら、奥歯をかみしめた。

「……それは我慢してやる。けどな睦月、弓道には」

礼儀、礼節を重んじる弓道にあつて、睦月のしている行為は無礼千万に値する。

目上の者に対する敬意や挨拶はもとより、弓道場に入室し、靴を脱ぐ最初の段階。

普通はそうした多くの礼儀と礼節を重ねて、射場に立つ。射場に立つまでの心構えから、射的し、残心を解いてからも、それは当たり前のように保たれていなければならない、いわば生きるための必須行為。呼吸に必要な空気のようなものだ。

「大、弓」

「……ほらよ。一回きりだ。それを射たらさつさと帰れよ」

「言われなくても」

弓と矢をむしり取るように受け取ると、鼻唄まじりで、射場へ向かう。

大は睦月を注意する気力も失せていた。

射場ではもつと静かにしろとか、邪念を払えとか、礼儀を重んじるとか。

目の前にいる睦月雫という傲慢な美少女には、規範とするものなどないかのような態度だ。

制服姿のまま、あまつさえ鼻歌を歌いながら、髪の毛を結おう

ともしないで、時々吹き込んでくる朝の風に遊ばせている。

睦月は、誰かの作った道を絶対に歩こうとしない。

自分の歩んできた道こそが、ただ一つの正しい道だと信じて疑わない。後塵を拝することを何より嫌い、常に唯一無二であろうとする。自己中心的で救いような思想だが、どこかうらやましいとさえ思える。

「文句が言いたそうね」

「当たり前だ。お前は何物にも縛られなさすぎる」

制約という鎖だらけで思うように身動きのとれない世界。

法律、ルール、暗黙の了解……他者との絆だってそうだ。

友情ですら時に足を引っ張り、家族ですら小さな箱庭に押しとどめる足かせに過ぎない。

「荒縄で縛られたことはあるけど？ 変なプレイされると、次の日の学校に響くから止めて欲しいのよね。だから今日は比較的スカートの方が長いわけ」

社会に至ってはもっとひどい。

「……そうか？」

誰もが仕事に追われ、問答無用で経済を動かす歯車にされる。

仕事、責任という重しを両肩に乘せられ、家族を養うという責め苦を負わされる。もちろん、それはとても悲観的な物の見方にすぎないが。

「冗談よ。あからさまにスカートを見る口実を作ってあげた私に、

感謝しなさいよ」

「誰がするかよ」

しかし、そう考えれば、確かに何物にも縛られない睦月は自由であるとともに、絶対的な個の強者だ。

誰もがそんな世界で、苦しみ、悩み、あがき続けるのに。涙を流し、痛みにもだえ、自由を叫び続けるのに。

睦月雫だけは違う。

ただ一人、鎖を簡単に引きちぎり、背中に生える巨大で美しい翼を羽ばたかせる。

睦月のいた場所を見れば、大地を蹴って、飛翔する姿があった。重力に引かれ、飛び立てずにいる大衆を見捨て、大空からあざ笑う。

そこにいるのは、何物にも縛られない代わりに、永遠の孤独を覚悟した女。

…… たった一人の、睦月雫。

唯一無二だから、誰も追いつけず、同情すらもされない。もちろん、彼女自身も願い下げだろう。

「睦月」

「何？」

執り弓の姿勢に入ろうとする睦月に、思わず声をかけてしまう大睦月は視線を的に集中させたまま、大に言葉の先を促した。

「寂しくはないか？」

「寂しいって何？」

睦月の言葉尻は、そのまま矢尻のように鋭く、目尻もそれ同様に鋭い。

「男が体を求めてくる理由？」

射法八節をつつがなく進行させていく睦月。

足踏み、胴造り、弓構え、打起し、引分け、会、離れ、そして、残心。

それらにあたっては、始めから終わりまで一貫性をもっていなければならない。

八つのパートに別れてはいるが、それはつまるところ一つなのだ。たとえるならば、一射は一本の青竹のようなもの。

この一貫した青竹に八つの節があるのと同じ。八つの節は相互に関連する一本の竹であるけれども、また異なった八つの節なのだ。

全ては一つであり、一つはまたその全てでもある。

「私を唾液だらけにして、指を入れて、自己満足に快感を与えよう
とすること？」

睦月はそれらを全て見よう見まねで、習得しているのだろう。
目をこらせば、それは睦月独特の流れであることが分かる。違和
感を覚えるのと同時に、睦月の堂々とした振る舞いに、自らが間違
っているのでは、という疑念すら浮かんでしまう。

「男の敏感な部分を勃起させて、私の中に突き入れること？ 必死
に腰を振り続けて、快感に逃げること？」

一方的に言葉を口にしながらも、射法八節を問題なく行つ。
引き分けた姿勢に移行した睦月を見計らって、大はあえてその言
葉を口にした。

「……睦月、そんな風にしか考えられないお前が寂しいんだよ」

矢が離れ、風を切る音とともに視界から消える。

矢の行方は、見ずとも分かった。

「大のくせに、私にもの申そうって言うの？ きまじめな童貞男の
くせに。それとも、私としたいからさういうことというわけ？」

人をいらだたせようとする睦月の気配が伝わってきたので、大は

あえて水を掛け合おうとは思わずに、身を引いた。

「イラつくなよ。悪かった、今のはなしだ」

どうしてか、睦月にはあえて人をいらだたせて、大事なことから話題をそらすとするときがある。

時々朝の弓道場で顔を合わせるぐらいの付き合いだが、何となくそうではないかと推測をたてることが出来た。

あえて汚い言葉を使ってみたり、他人の傷をえぐってみたり、態度にしてもそうだ。

そんな睦月を見ていると、思う。

睦月雫は、何かを恐れているような、そんな気がする。

弓道部副部長の勝手な妄想かも知れないが。

「だったら、最初から言わないで。アンタみたいな馬鹿を相手にするだけ疲れるし、イライラする」

胸当てをたたきつけて、大の弓を放り出す。

射場に転がった弓を大がため息混じりに拾い上げたとき、睦月はいらだたしげに足を踏み鳴らして退場するところだった。

「まったく……睦月の奴」

弓に傷がないことを確かめると、大は睦月の気配が残る道場内を見回してみた。

何度も改修を繰り返してきたのだろう。弓道場の至る所に、新旧

が入り交じっている。

時代を経た檜の板は、ちょうど両足を踏みしめる位置の色がはげている。

それは、数多くの人間が弓を引いてきた証拠だ。

雑念を払い、無心を求め、そして、己の中心を射抜いてきた。

心頭を滅却し、明鏡止水の境地を探求してきた。

「すごい女だな」

強さと暖かさを増した早朝の光が、的の設置された安土を照らす。

睦月の放った矢が、寸分の狂いなく的の中心を貫いていた。

話しながら、さらには、いらだちながらも中心を射抜く技量。集中力を確実に超越している腕。

頭で考えていることと、行動は別物とはよく言われる。

しかし、その行動でさえ、二つ以上を同時にこなしているわけで。睦月雫は、人間離れもはなはだしい。

良くも悪くも 睦月雫は翼を持つ者なのだ。

……が、どうやらそんな彼女にも、一部人間らしいところもあるらしい。

大は関心が半分、呆れが半分の微笑みをこぼす。

「図星……いや、弓道らしく予想が“的中”といったところかな」
的の中心を貫いた矢。

皮肉にしては、出来過ぎだった。

第B - 4話・的中（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

現在、二作連載中ですので、更新が遅れますこと、大変もうしわけございません。二兎を追う作者をお許しください。
評価、感想、栄養になります。

第B・5話・引き絞られた想い

……私は何をしているんだろう、と思う。

少し大きめのため息をついてみても、肺がきしむだけで、内側にため込んだもやもやに晴れ間はささない。

私はどんよりと曇った空の下、いつやってくるかも分からないある人を、偶然を装いながら待っていた。

もう何十回目かも分からない予行演習を終えて、何十回目かも分からない自己嫌悪にため息をつく。

鞆の中には、出番を待つ二枚の映画のチケット。

石造りの厳つい校門に背中を預けると、ひんやりとした感触を制服越しに感じる。鞆を足下に置いてハンドミラーを取り出すと、周囲の視線を自意識過剰気味に受け止めながら、そっと自分の顔をのぞき込む。

そこには、少し疲れたような自分の顔があった。

ふっくらとして血色の良い姉の顔に比べて、やせこけた印象のある青白い顔。

長くて綺麗にカールした姉のまつげに比べて、力なく気持ち程度の上向き加減。

ぷるんとして潤いのある姉の唇に比べて、リップを何度も塗らないとすぐに乾燥してしまうかさかさの唇。

小さくてしみ一つない姉の鼻に比べて、鼻の穴の形が気に入くないし、一回りも大きい。

なめらかで化粧ののりの良い姉のもち肌比べて、ファンデーションすらうまくのってくれない乾燥肌。

分けた髪の隙間からでも分かる形の良い姉の額に比べて、少し広すぎるとさえ思える私の額。

「お姉ちゃんばかり……」

ハンドミラーを乱雑に閉じて、足下に置いた鞆にしまっ。胸ポケットに入れておいたら、また自己嫌悪を誘発する元になるから。

「はあ……あ、またついちゃった」

知らず知らずのうちにため息をついてしまっ。

ため息をつく度に幸せが逃げていく、なんて言う人がいるけれど、実はそれは迷信なのだ。

夜に爪を切ると親の死に目に会えない、というのと同じで昔から語り継がれてきたもので、これといって根拠がない。

さらに、最近読んだ書物によれば、ため息は、体の中にたまった悪い気のこと、吐かずに溜め込んだままにしておくと、ストレスが蓄積し、不安感や自信の喪失などのマイナス思考を引き起こすのだそう。

つまりは、ため息により体の中から悪い気が吐き出され、その反動で深くゆっくりと酸素を吸い込むことで、内臓の動きが活発になり、血行が促進される。そして、全身に新鮮な酸素が行き渡り、心身ともにリフレッシュすることができる……とか何とか。

「でも、やっぱりため息をついている自分は、幸せから疎まれていく気がするよ……」

根拠や、実説を並べ立てて、前向きという方角を向いてみる。残念ながら、その方角にあったのは空虚な曇り空だけだった。

曇り空のようによどんでいく自分の心から逃げようと、今度は足下に視線を落とす。

ふと視界に入ってしまった自分の体に、またコンプレックスが膨らみ出す。

制服の上から、自分の胸に手を当ててみる。お椀型で形は悪くない。

……少し外向きなのは気になるけれど。

一方で、手のひらサイズなので大きさは悪くない。

近年上昇しているバストサイズの平均だって、まだかろうじて上回っているんだから。

本音を言えば、膨らんでいくコンプレックスのように、バストサイズも膨らんで欲しいところだけど。

「でも、お姉ちゃんは……」

タオルを用意し忘れて、バスルームに飛び込んでしまった姉が、私を大声で呼んだときだ。

私は日課になっているため息をつきながら、バスルームの扉から半身をのぞかせる姉に目をくれる。姉は舌をぺろっと出して、申し訳なさそうに片目をつぶる。

そんな姉の姿を見て私が真っ先に浮かんだ感情は、他でもない、嫉妬心だった。

大きさに似合わず形の良いバストは、誇らしげに、上向きにその存在を主張している。ウエストはモデル顔負けのくびれ具合だし、ヒップですら重力を無視した向上心に溢れている。

けなす言葉が見つからないほど、姉は魅力的だった。

濡れた髪の毛が鎖骨を通って、胸の谷間に張り付く様は、女の私、妹の私ですら、息をのんだ。

……その夜、バスルームの鏡の前で滑稽ポーズをとりながら、姉に対抗する自分がいた。

バスタブの中であまりにも悶々と考えすぎて、のぼせてしまったこともある。

「本当、情けないな……私」

足下の鞆をそつとつま先でこづくと、鞆はバランスを崩して簡単に倒れた。ちよつとした八つ当たりだった。すると、鞆の取っ手につけられたキーホルダーが鞆の外側に付いたポケットから飛び出す。ずっと昔、ある人が私にプレゼントしてくれたものだ。

私と姉、その人。

三人でみたホームビデオ。そのすり切れたビデオテープの中で、キーホルダーのモデルとなったキャラクターと、私は運命の出会いを果たした。

真つ黒な姿で、まん丸で、つぶらな瞳で、人見知り。

一見すると真つ黒な綿あめか、真つ黒なたわし。

森の中に住んでいる空飛ぶ毛むくじやらの巨大動物や、猫のバスが人気の大半を占めた映画だったのに、私の心は彼 彼女かも知れないが に首つ丈になってしまった。

それを見かねたその人が、後日そつと手渡してくれた。

「ごめんね……蹴っちゃって。痛かったよね」

私は校門前に座り込んで、倒してしまった鞆にぶら下がったキーホルダーを優しくさすってあげる。もう何年も前のもので、黒い塗装がはげてしまっているけれど、大事に鞆の外ポケットにしまっているせいか、老朽化はそれほどでもない。

私は無傷で住んだキーホルダーをじっと見つめ続ける。

ドラマだと、こんなところを大好きな人が見つけてくれて、こうしてくれる筈。

「……そのキーホルダー、まだ持っていてくれたんだな」

そう、こんな感じで。

「それさ、だいぶ昔に俺が買ってあげたヤツだよな。それだけ気に入ってくれると、贈った俺としても嬉しい」

事実は小説よりも奇なり。

いや……少し違うかな。

私はドキドキする胸を押さえて、慌ててキーホルダーを所定の場所にしまう。

「好きなキャラクターだもん。当然のことだよ」

「確かに。真由は物持ちも良いし。……誰かさんと違ってさ」

右肩に担いだ弓を抱え直して、夕暮れの景色に笑顔がこぼれる。私はそんな彼から視線をそらしながら立ち上がった。

「で、その誰かさんはまだ現れないのか？」

「……え？」

「あ、いや、だから由美を待ってるんじゃないのか？」

校門から校舎を眺めていた彼は、見当違いであることに気がついて、私に視線を戻す。私は、予行演習を思い出す。

「あ……う、うん、そう！ お姉ちゃんを待ってたら、たま、たま大君が通って。あはは……偶然だよ、ほんと偶然偶然」

なんのための予行演習だったのだろう。噛んでしまったては練習の意味などない。

「どのぐらい待ってるんだ？ あいつ図書部員だから、そんな時間かからないはずじゃないか。真由は帰宅部だとしても、二時間以上は待っていた計算になるぞ」

携帯電話を取り出して時間を確認する大君。困ったように眉を八字に曲げて、お姉ちゃんへの愚痴をこぼす。

「まったく、出来た妹を持つと、姉がだらしなくなるっていうのも考え物だな。約束してるんだろうに」

「あはは……本当にお姉ちゃんには参っちゃうよ」

「ごめんなさい、お姉ちゃん。」

いつかポテトのＬサイズをおごります。なんなら、ドリンクもつ

けます。

「真由さ」

「うん？」

夕陽を背中に背負いながら、大君は頬をぼりぼりとかく。

「由美のことはいいから、一緒に帰らないか？ 三人一緒じゃないっていうのも新鮮でいいだろ」

鞆の取っ手をつかむ私の手が汗ばんでいく。

緊張しちゃ駄目だ。

緊張したら、言葉につまずいてしまう。

つまずいたら、もう二度と繰り返せなくなりそうで怖い。

だから、緊張しちゃ駄目だ。冷静に、慎重に。かつ、普段の私の調子で。

「大君、その、あの……」

……きつと、つまずいたよね、今の。

本当、コンプレックスだらけ。

「あ、駄目だよな。由美と約束してるんだもんな。悪い悪い今のは無しだ」

私はうつむきそうになる顔を、慌てて右に左にぶんぶん振り回

す。

「違うの！ 私もね、もうお姉ちゃんのことあきらめて、帰ろうとしていたところだから。だからオツケーです。もうオールオツケーなんです！」

私は人差し指と親指で円を作り、大君の顔をその中に納める。

大君の愁いを帯びた顔が、夕陽の下で笑顔に変わっていく。大君の表情を変えてしまえる自分が嬉しく思う。

コンプレックスだらけの私が、ほんの少しだけ自信家になれる瞬間だ。

自信家というよりは、策謀家かな。

こぼれてしまった微笑みに、大君が疑問符を浮かべる。

「どうしたんだ？」

「なんでもないなんでもない。帰ろうよ、大君」

「ん」

大君が、手を差し出してくる。

「いいよ、鞆ぐらい私が持つよ。大君だって、鞆と弓、持っているんだし」

さしだされた右手を丁寧に辞退する。

「ん」

それでも大君は右手を差し出し続ける。

「だから、大君、気持ちは嬉しいけど鞆ぐらいどうってことないよ」
私はダンベルよろしく手に持った鞆を上下させる。案外軽いかと思っただけ、鞆を上下させるのは重労働だった。最近、運動不足だから、仕方がないのかも。

「鈍い奴め……仕方がない。真由、今から俺がマジックを見せてやる」

大君が困った顔を浮かべている。私の腕力の無さが見抜かれてしまったのだろうか。だとしたら、情けないかも。

……それはそれとして。

「えと、マジック？」

「そうだ。世にも奇妙なトリックだ。あらかじめ言っておくけど、各種も仕掛けもない。いいか、真由、俺の手のひらを良く見つめるんだ」

真剣な顔だ。弓を引くときと同じかそれ以上の面持ちだ。

「うん、わかった」

私は頷くしかない。

大君の手のひらは、大きくて生命線が長い。ごつごつしているその手も弓道の産物だと思うと、自分のことのように誇らしげになれる。指の付け根が黄色く、堅くなっているのは、豆がつぶれて新しい肉が付き、だんだん厚くなっていったためだ。

別名、努力の証とも言う。

野球部ほどバットを振るわけでもないのに、そんな手のひらになってしまっているのは、それこそ何千、何万という練習の積み重ねの結果だった。

「では、真由の手を俺の手のひらの上にのせる」

大君が宣言する。

私は、おそろおそろ大君の手のひらの上に自らの手のひらを重ねる。

やっぱり、大君の手のひらは硬かった。

大きくて、堅くて、でも、斜陽のように暖かくて、たくましい……まるでお父さんの手のよう。

「そして、俺はゆっくりと真由の手を握り、十秒待つ」

大君が驚いたような声を上げ、私に微笑みかけた。

「さて、帰るか」

「……………え？ 帰るって大君！」

「なんだ？」

何食わぬ顔で笑い、白い歯を見せる。

この顔は、分かっている馬鹿にしている顔だ。幼馴染み経験から推測する。

「マジック！ 起こってないよ！」

「怒ってるだろ」

「意味が違うの！ こう、コインが消えてなくなるとか、何もないとこから取り出すとか……そういうのがまだ、起こ……現出してないよ！」

しっかりと私の手を包んでいる大君の暖かさに、思わず大げさに照れ隠し。

「起こったと言わずに、現出と言うところが、何とも冷たいな。ボケを未然に防いでいる」

弓を担ぎなおしながら、大君が笑った。

「だから、違うんだってば！」

「なあ、真由」

大君が私を引き寄せた。握りあった手……私もつい握り返してしまった手を少しだけ強引に。

抱きしめあったわけではない。体を触れあわせたわけでも、口づけあうわけでもない。距離が少しだけ縮まっただけ。夕陽の下で、学校の校門前で。

放課後にだけ許される少し危険な距離。

「真由と手をつなぎたかった」

大君の目が私の瞳を吸い込み始める。視界に広がる大君の顔が私の記憶に否応なく、すり込まれていく。夕陽の下というシチュエーションはこの上なくムーディだ。

私もムードに弱い女の子だと言うことが再認識させられる。でも、きっとそれは大君だけのはずだから。

心の中でずっと引き絞ってきた私の想い。

すでに淡くなく、濃厚な一色に染められた感情の矢尻。

いつ解き放たれても不思議ではないくらい引き絞られている。私の心の中で磨き上げられてきたこの矢が、目の前の彼の心を打ち抜くことが出来るのかは分からない。

ずっとずっと引き絞ってきた。

弦が切れてしまっんじゃないかってぐらいの力で、長い時間をかけて極限まで引き絞ってきた。

もう、駄目だよ。

こんなことされると、溢れそうになる。矢を放ちなくなる。他でもない、あなたに向かつて。

「だから、真由さえ嫌じゃなかったら。ごつくて、荒れた手で申し訳ないんだけど」

「……ごつくて、荒れた手じゃなかったら、大君の手じゃない。頑張り屋の手がいい」

胸の中が暖かさでいっぱいになる。

締め付けられて、こぼれそうになる。胸の中で引き絞り続けた矢が、言葉となって口から……うん、体中から出たがってる。

もう、いいよね。我慢しないで、いいよね。

「大君、私……」

「うん？」

バッグを落として、大君の制服をつかむ。足下に落ちたバッグは音を立てて倒れた。

「私、私ね」

「うん」

大君は優しい笑みを浮かべながら、私の言葉を受け止めようとしてくれる。

「私！」

小さな頃から。

「小さな頃から」

大君が。

「大君が」

好きでした。

「あれー、二人とも待っててくれたの？ お姉ちゃん嬉しいな」

弓につがえたはずの矢が、足下に転がった。

弦は切れ、極限まで伸ばされたそれは、鞭のように私の頬を打つ。頬からは血がでて、私の唇を赤く染めた。舌でその赤い液体をなめとってみると強烈な鉄の味がした。

吐き気を催すような鉄の味。

「由美！ お前なく、真由をあれほど待たせるとはどういう根性してるんだよ」

大君の手が素早くほどかれる。

「え？ 私、約束なんて、したっけな……？」

ふりほどかれた手から温もりがゆつくりと抜けていく。

さらには、夜に変わろうという町から抜けてきた冷たい風が、私の手から加速度的に大君の温もりを強奪する。

私は、その温もりをわずかな間だけでも噛みしめたくて、わずかな間だけでもすがっていたくて、自らの手を強く握りしめた。

第B・5話・引き絞られた想い（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。作者多忙のために、一ヶ月ほど作品を更新できませんでした。大変申し訳ございません。

これからは、しばらく定期的に作品を更新していけると想います。こんな作者ですが、これからもよろしく願います。

評価、感想、栄養になります。

第B - 6話・決心

「全く、これだから由美は……真由もこんな薄情な姉を持って不幸ものだな」

「こら、大！ 言って良いことと悪いことがある！ 大はなんて言うか、こんな可愛い幼馴染みをもてて幸せだー、とかそういった感謝が足りないよね」

姉の朗らかな笑みが、大君に向けられている。

大君も、そんな姉に、先ほど私に対して向けていた笑顔と同じ……いや、それ以上の笑みを向ける。

二人で笑顔を共有し、楽しさを共有し、幸福な領域を作り上げる。

そこには、私が入る余地などないような気がした。

「可愛い？ それはまあ……否定できないところではあるけどな」

姉の頭からつま先まで、視線で行ったり来たりさせると大君はため息をついた。

確かにお姉ちゃんは、可愛いよ。私なんかとは違って。

だから、大君の言っていることに間違いはない。

でも、どうしてそんな当たり前のことを私は否定したくて仕方がないんだろう。

「ふむふむ、幼馴染みの暁大は、姉妹どんぶりを狙っているわけですねあ……いやいや、なんと破廉恥！ この変態！ スケベ！ ロリコン！」

「おいおい、ここ校門前なんだけど……それにロリコンって、年一っしか違わないだろうが」

「ああ、弓道部副部長は、私の豊満なボディをなめ回すように見て、脳内ハードディスクに記憶……そして、コラージュ写真のように脱がせたり、すぐ替えたりして、きつと今晚のおかずに！」

姉が体をくねらせながら、大君に軽蔑のまなざしを突き刺す。もちろん、そこには本当の軽蔑なんて微塵もない。姉特有の冗談がふんだんにちりばめられていた。

「……もう、大のえっち」

「黙れ、変態女」

肩に提げた弓で、姉の頭に面を入れる。主審が一本と勝敗を告げ、そうな勢いで。

「痛、痛い！ 大、仮にも乙女に向かってその暴拳は！」

頭を抑えた姉が、大君の後ろに回り込み羽交い締めにする。

「おわ！ 由美！ 止める！」

大君よりも背の小さい姉は、後ろからぶら下がる格好だ。体を惜しげもなく密着させて、チョークスリーパーに移行する。

校門の前で、恥ずかしげもなくとつくみあいを繰り広げる姉と大君に、通りかかった弓道部員がやし立てていた。

暁先輩！　ごちそうさまです！

これからは、二重の意味で大先輩と呼ばせていただきます！

これは姉フラグ成立だな。

「あはは……お姉ちゃんも、大君も、止めてよ。恥ずかしい。お似合いなのは分かったから」

乾いた声でそう言ってしまえる自分がいた。
心の中で壊れてしまった弓を足下に破棄したまま、矢を再度つがえる力もなくて。

私は心に鍵をかけた。

「ほら、みんな見てるし、早く帰ろう？」

「むう、我が妹の温情に免じて、大を無罪放免とする」

密着させていた体を離して姉は腕組みをした。

「つたく……」

刹那、大君は何かに気がついたようで、私と姉に背中を向けた。

こういうとき、めざとい自分自身に、本当に嫌気が差す。

大君は自分の体に起こった変化を隠そうとして背中を向けた。

グラビアモデル顔負けのスタイルを持つ姉に、後ろから抱きつかれて、あまつさえその柔らかい谷間を背中を押しつけられた。

大君は、気持ちよかったのだろうか。嬉しかったのだろうか。もっとこうしていたと思ったのだろうか。

大君は、反応してしまった男性自身を、見られなくなかったんだ。

そんな自分が格好悪くて、背中を向けたんだ。
つまり、大君は、姉の女としての魅力によって、男性の象徴を固くしてしまった。

……大君は姉に対してそういった欲望を持っている。

私ではなく、姉だから、大君は感じた。おおきくしたんだ。
大君は、きっと姉をそういう目で見ているんだ。

姉と比べて、姉と比べて、由美と比べて。

私には魅力がないから。

「そうそう。真由、ごめん！ 私本当に覚えていないんだよ……だからさ、どんな約束をしていたのか教えてくれない？ 馬鹿なお姉ちゃんにもう一度、ね？」

両手を合わせて懇願してくる。ウインクが様になっている。

「馬鹿と言うよりは、ボケだな」

瞬間、姉の鋭い眼光が大君に突き刺さり、大君は両手を挙げて降参のポーズ。正面を向いているところから見て、どうやら男性自身の高ぶりは鎮まったようだ。

「お姉ちゃん、あのね。約束なんだけど……あ、そうそう、思い出した！」

私は落ちた鞆を開けて、中から二枚の映画のチケットを取り出す。

「映画のチケット？」

私の手元をのぞき込む姉。

「うん、二枚あるんだけど、お姉ちゃん行かない？」

「え、いいの？」

姉の顔が喜びに染められていく。

「ほら、大君にもあげるよ」

「いや、俺は……」

「お姉ちゃんと姉妹水入らずで行こうと思ってたけど、私用事が出来ちゃって行けないの。だから私の代わりに大君が代打。土曜日、大君暇でしょ、知ってるんだから」

予行演習なんてしなくても、言える。自分にとってマイナスになると分かっているのに、こうも口がくるくると回る。

肝心な言葉は言えなくて、本当は言うべきではない言葉はすんなりと出てくる。

裏腹な心は、私を自己嫌悪の海に引きずり込む。

「真由、どうして俺が暇だって……」

弓道部員に聞いたからに決まってるじゃない。

「分からない、ただそうじゃないかって思ったただけだから。気にしないで」

「いや、でも真由……」

大君と二人で行きたくて、部員にこっそり練習の予定を聞いて。計画を練って。

旅行は計画を練っているときが一番楽しいって言うけれど、あれは本当だった。

だって、心臓が高鳴って眠れなくなっただけだから。

「あ、さては大君、お姉ちゃんと一緒だから恥ずかしいんだね？」

そこはほら、一つ年上なんだから、大人なところ見せてよ」

「真由……まさか」

毎日毎日……空想の中を泳いで、にやにやしたり、恥ずかしさにもだえ苦しんだり。

「あ、それと、お姉ちゃんにえっちなことしたら、妹の私が許さないから！　いくら大君だって、両者の合意なくそんなことしたら犯罪なんだから！」

本当……私、馬鹿だ。

「だから、二人で行ってきて。映画の感想、聞かせてね」

「……分かった。由美、その日大丈夫か？」

「私は大丈夫、予定はナッシング」

私は必死に微笑みを作り続ける。

「じゃ、決まりだな」

「大と二人でデートか、悪くないかな」

悪いはずないよ。むしろ二人なら、きっと素敵な一日になる。

「本当にお似合いだね、妹として鼻高々」

デート中、二人は仲むつまじく手と手を繋ぐに違いない。

「ほらほら、今から手を繋ぐ練習！」

私は姉の手と大君の手を取って繋がせる。そして、二人の背中を乱暴なくらいの力で押してやる。

「あれ、大、恥ずかしいの？ 顔が真っ赤」

「うるさい、中山姉。慣れていないんだ、仕方がないだろ」

「慣れていない、大は慣れていない、と。にしし、ではこれはどうかしらん？」

脳内にメモ書きした姉が、おどけたような古文調で、大君の腕に自らの腕を絡める。

確信的に自分の胸に腕を押しつけている。

大君の腕に押しつけられた双丘は、簡単に形を変えた。今、大君へは、姉の持つ凶悪な柔らかさが存分に伝わっているはずだ。

太陽の半分が山の向こうに消えてしまった夕闇の中、身を寄せ合って体温を共有する二人は、まるで恋人のように見えた。

「真由！」

「真由！」

うつむいてしまった私と、太陽と一緒に山の陰に隠れてしまいそうになる私の心を、二人の声が呼び戻す。

二人とも笑顔で手を振っている。大君は担いでいた弓を振って大きくアピールしていた。

私は十メートル以上間隔を開けられてしまった二人に、走って追

いつこうとする。

慌てて足下に落としてしまった鞆を拾い上げた。

夕暮れを覆った暗闇の中で、何かが転がるのが見えた。

「あれ……？」

嫌な予感がして、鞆の取っ手を見る。

いつもあったものが、なくなっていた。

チェーンだけが、虚しくぶら下がっている。

「あれ……？ あれ？」

私は伸ばした膝を、汚れるのも構わずに地面に付け、コンタクトレンズを落とした人間のように、地面に手について探し始める。

辺りはすでに暗闇が支配している。

もとより黒いキーホルダーだ。目をいくらこらしても、手でアスファルトの上を探しても、土下座するように這いつくばっても見つからない。

「……あれ？ ……あれ？」

涙をたたえながらも、笑ってしまいそうになる。

「おかしいな……？ 見つからないよ……」

きつとこれは罰なんだ。自分勝手になろうとした罰。

姉の想いも、大君の想いも。

全てを出し抜いて、自分の幸せを求めた罰なんだ。
だから、宝物はどこかへ消えてしまった。

「見つからない……大事にしてきたのに……ずっとずっと宝物だったのに……」

私の様子がおかしいことに気がついた二人が、引き返してくる。

「どうしたの？ 真由？ 何か落とした？」

姉の優しい言葉が、私の悲しみを、滑稽さを増大させる。

姉がいなければ良かったなんて、いなくなってしまうなんて、少しでも考えてしまった自分に、さらなる自己嫌悪が押し寄せた。

「よし、俺達も手伝うぞ」

二人が差し伸べてくれる手。

大君は荷物を置いて、腕まくりをした。姉も鞆を置いて、やる気十分だ。

「……あ……でも、もういいの」

私は、その二つの手をやんわりと断って、立ち上がった。

「そんなに大事なものじゃないから。もう、あきらめたから」

そこに私の心があつたのだろうか。

限りなく無感情に近い声。まるで薄暗闇を吸収したかのようなうた。

二人の優しさに、私は決心するしかなかった。

私は……もう気持ちを吐露しない。

二人はお似合いだから。私が勝手に想って、悩んで、そして、自滅しただけ。

変わらないことがあつたっていい。想い続けることがあつたっていい。

姉は大君が好き。大君だって、姉が好きはずだ。

二人の幸せを祈ることが、いつかきつと私の幸せになる。

……でも、そんな日は決して訪れるはずがないと、私は不意に思ってしまう。

私はその日、姉と大君、二人から半歩遅れて歩こうと決めた。
家に帰って、未練たらしくぶら下がっているチェーンを捨てようと決めた。

もう、決めたの。

第B - 6話・決心（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

久しぶりの連続更新です。この調子で、どんどん書ければよいのですが……。

評価、感想、栄養になります。

幕間・事件の朝、彼女が感じ、彼女が思ったこと

携帯電話を開き、暗証番号を入力。再度メールの内容を確認する。

「とうとうこの日がきちゃったね……」

そこには、私にしか分からない文章がつづられていた。私の頭の中で速やかに暗号は解読される。知りたくもないのに、メールは計画の決行日が今日であることを告げている。

組織にとって、今日は重大な転機。

組織の人間なら、誰しも十分に承知している。もちろん私も例外ではない。私が組織の中で育つ過程で、嫌というほど、頭に、体に叩き込まれてきたから。

孤児だったらしい私が、餓死寸前のところで組織に引き取ってもらって、そこで初めて人生の歯車が回り始めた。

孤児だったらしい……とは、幼い頃の自分の記憶でさえ、私は持っていないから。餓死寸前で引き取られたということも、実は文字上のことだけで、私の記憶にはない。好奇心として組織にその疑問をぶつけて、初めて私は自分がこの場所にいる理由を知った。

もちろん、母の記憶も、父の記憶も、家族の記憶も皆無。

生まれてから初めて記憶した風景は、私が知る限り、白、だった。

無ではなく、白。

上下左右、東西南北、喜怒哀楽。

今では当たり前前に思えるそう言った事柄でさえ、私には新鮮に思えて仕方がなかった。

そんな私。

自意識が芽生える前の段階で、命を散らしていたはずの私。

その私をここまで育ててくれた人。父とも呼べるその人のために、私は尽くさなければいけない義務がある。

それは結果的に、組織のためでもあるし、その人のためでもある。それは結果的に、私にとっての恩返しでもあるし、親孝行でもある。

瞳を閉じて、私はその人の姿を脳裏に浮かべた。

誰よりもたくましい、鋼のような肉体。多くの屈強な部下を従えながら、先陣をきるその人の姿。誰もが羨望のまなざしで見つめる彼は、組織特殊部隊の部隊長。私と大好きな彼を迎えに来てくれる人……。

深い思いから抜け出して、瞳を外界にさらした私の目前には、アパートがある。そのうちの一室。扉の前にたたずむ私は、メールの履歴画面を下にスクロールさせていく。

画面に現れるのは、色の異なった二つの手紙。

組織からの通達メール。

大好きな人からのメール。

その二つのメールが、交互に入り混じっている。

組織からのメールは定期的に届くけれど、大好きな人からのメールはなかなか届かない。

何度も何度も勇気を振り絞ってメールを出して、やっと手に入れることができる彼の意思。そっけなく、面倒くさそうにメールをうったであろう彼のたった一言が、今では私の生涯で唯一の宝物にな

った。

私はまるで馬鹿の一つ覚えのように、彼からのたった一言を音読して、彼の表情を、声音を想像する。暗記してしまった彼からの数少ないやり取りは、この世のどんなものよりも深く私の心を打った。寄せては返す波のように、飽くことなく私の心をかきたて、胸を高揚させる。

私は彼のアパートの呼び鈴を鳴らした。

「……大好きだよ」

つぶやいてみる。

メールを受け取る度に、私は今すぐにでも彼の元へ飛んでいって、私だけのものにしてしまいたくなる衝動に駆られた。

彼に全てを捧げてもいい。

彼の望むことなら何でもしてあげたい。

どんなことをされてもいいから、彼のそばにいたい。

どんなことをしてでも、彼のそばに居続けたい。

ただそれだけの望みのために私は生きている。

組織から下された命令は、もちろん実行しなければならぬ。

でも、重要度で言ったら、この町に派遣されてきた当初から比べれば、雲泥の差。そう断言できてしまうほど、組織の命令よりも、彼のことのほうが大切に思える。

だから私は、組織に、父と呼べる人に、最初で最後のお願いをした。

大好きな人ができました。その人を助けてもいいですか？

きっと本来なら許されないことなのだと思う。

でも、組織はそれを許してくれた。完璧な教育をされた私が、ここまで執着したことが初めてだったから、少しだけ興味を持ったのだろうか。

いや、それ以前に、計画実行の段階まで来て、最適任者である私が裏切ることを恐れたのだろう。

計画の齟齬は、即組織の瓦解を意味しているから。

過程はどうあれ、私は彼を手に入れることを、彼と二人で生きることを許された。後は、彼と心を共有するだけ。

私のわがままを許してくれた父は、そんな私の頭を優しくなでてくれた。

生まれて初めてだった。

私を張り倒すことはあっても、決して優しく手を伸ばしてくれたことはなかったその手。仏頂面は相変わらずだが、手のひらの大きさと、温かさだけはいつまでも消えることはなかった。

今でも、頭の上にはその大きな手の感触がある。

私は寄りかかった扉から体を起こし、彼の登場をひたすらに待つ。彼が一向に出てこないのを訝しがって、私は玄関前をうろろしたりしてみたが、彼が出てくる様子はない。

……計画実行までの時間は残り少ない。

地域担当者である私は、バッグの中にあるものを、体育館に放り込むという使命を帯びている。彼が遅刻することは、私があらかじめ仕組んだこと。でも、もし彼に会うことができなかったら。

愛は、ここで途切れてしまうことになる。

考えるだけで、心が刻まれるように痛い。

「はい、今開けます」

待ち望んだ声とともに、彼と私を隔てていた扉が開かれた。

「……何をやってるんだ？」

長く伸びたぼさぼさの髪をなでつけながら、彼が顔をしかめる。
そんな彼が、なんだかとても可愛い。

「あれ、正臣も遅刻？ 奇遇だね」

私は自分ができる唯一の感情表現を、満面に浮かべる。

「奇遇だね……って、香奈も遅刻か。珍しいな」

「うん、なんか完全に遅刻って分かったら、あわてるのも億劫になっちゃうって」

本当は違う。でも、今は普通の二人でいたいから。

「和輝は？」

私は首を横に振る。

「今日は雪でも降るのか？ いつも遅刻してるあいつが遅刻しない

なんて……」

「同感」

すべては計画通りに進んでいる。和輝が遅刻をしなかったのも、正臣が遅刻したのも。

この町で組織が自由にならないことなんてない。

「にしても、だ。遅刻した人間が、どうして俺の家の前にいる」

「うーん、なんでだろ。正臣も遅刻するような気がしたんだよね」

自分で言っただけに馬鹿だと思う。でも、そんな嘘も正臣とやら本当に楽しく思える。計画なんてそっちのけで、日常に戻ってしまったみたい。

でも、正臣はそんな私に不満げだ。

「あ、置いて行かないでよ、つれないなあ……」

私の言葉を見殺しして通り過ぎる。頬を強張らせて、怒ったふりをしている正臣が、ますます愛しい。

「正臣、髪の毛切ってあげようか？」

無視される度に、彼が意地を張っているのが分かる。

「私としては、短い髪の毛のほうが好みなんだけども」

正臣の髪の毛がゆらゆらと揺れる。

「そういえば、睦月さんが、正臣のこと……」

私の切り札に、正臣は足の動きを止める。

「……なんて言ってた？」

「髪の毛切らせてくれる？」

本当は出したくなかったこの話題。正臣は誰にでも優しいから、そんな正臣をみんな好きになってしまう。

でも、本当に正臣を分かってあげられるのは私だけ。

「……短すぎないように」

渋々承諾する正臣が、唇を尖らせる。

「どんな髪型にしようかな……」

正臣の髪型候補が、私の頭の中をぐるぐると回る。

「……で、その、睦月さんの件。なんて言ってたんだよ」

言われなくても分かっていたけれど、私はあえて忘れていたふりをする。正臣と二人きりなのに、他の女の話なんてしたくない。

「聞きたいの？」

「決まってるだろ！」

無人の通学路に正臣の大声が響き渡る。

「……そんなに大声出さなくたっていいじゃない」

どうして正臣は私がいるのに、他の女の事を考えるのかな。

「悪かったよ……」

やっぱり、正臣の周囲を軽くしてあげないと私を見てくれないのかな。

「睦月さんは……こう言いましたとさ」

でも、ごめんね。

睦月さんは、正臣には気がないみたい。

「東城正臣？ 知らないわ」

私がそのときの光景をリアルに演じながら、正臣に伝える。正臣はまるで世界の終わりでも訪れたかのように、顔を真っ青にする。

「……は？」

「一言一句もれなく伝えました。短かったから、忘れようも、間違えようもないけどね」

「本当にそれだけ？」

「本当にそれだけ。『東城正臣？ 知らないわ』」

正臣に分かってほしくて、私は繰り返す。

「『東城正臣？ 知らないわ』」

正臣には私がいる、他の女なんていない。
ね、分かるよね。

「『東城正臣？ 知らないわ』」

「聞こえてる！」

「……あら」

「いや、当然といえば当然の結果だよな。かたや、学校一の優等生にして、スカウトの目にもかかるほどの美女。かたや、ただの男子高校生だもんな……」

正臣が肩を落として私の前を歩いていく。

「正臣……だいぶ落ち込んでるね。でも、いいじゃない。私がいるんだし。ほら、慰めてあげるよ。この大きな胸に飛び込んできなさいな」

私は正臣に向かって両手を広げる。いつでも正臣を受け入れる準備はできてる。あとは、正臣次第なんだよ。

「そんなに胸大きくないだろ」

「あ、セクハラ」

確かに、胸は大きくはないけれど、小さくもないはず。

「正臣……。私、胸、小さいのかな」

「気にしてたのかよ」

「正臣がそう言うから、気にした」

私は制服の上から胸の大きさを確認する。手のひらサイズで、形もいいし、きっと正臣に気に入ってもらえると思っていたのに。

「じゃあ、例えば俺が髪の毛の短い子が気になるって言ったら？」

「短くする」

正臣がそう思うなら、私は正臣が思うがまま、私を変えるよ。正臣が好きになってくれるなら、私は自分の色を正臣の色に染め替えるよ。いつでも、どんなときでも。

私には、その準備がある。

「厄日だな……。これは」

正臣が、校舎に向かって黒いため息をつく。

「厄日なんかじゃないよ。きっと最高の一日になる」

私は立ち止まり、正臣の背中に向かって精一杯の感情を届ける。

「だって今日は、二人にとって人生で一番大切な日になるんだから！」

私は正臣が好き。大好き。

誰よりも、何よりも、この世界よりも。

この愛は、誰にも止められない。

そして、私はその愛を止めるつもりもない。

「それが中井香奈なんだよ」

幕間・事件の朝、彼女が感じ、彼女が思ったこと（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。

最近、気がついたことです。

現在「スクール・オブ・ザ・デッド」ジ・アナザーデッド」と「多重人格な彼女」を同時連載しているのですけれども、作者は作品ごとの読者数というものが分ります。ちなみに、この二つの作品でいうと、実は「多重人格…」の方が「スクール・アナザー」よりも、二倍以上の読者数があります。ホラーとラブコメディの差でしょうか。作者的には、力を入れているのは、「スクール」なのですから……もともと悲しいお話好きですし（笑）

それが気がついたことです。どうでも良いことでしたね。

それでは、評価、感想、栄養になります。

第B・7話・デート

「これで二日だぞ」

「はい、十回目、大台突破」

呆れ顔の由美は、テーブルの上にあるストローを口にくわえる。ストローがオレンジ色に染まるのと同時に、オレンジジュースの海から氷が顔を出す。

大は、例えとしては場に不適切だと分かっていたが、輸血のチューブを通る血液のようだ、と心の中で想像し胃を収縮させた。

「ねえ、大きく、せっかく真由が映画のチケットをくれたんだよ？ 真由が楽しんできてって言うてくれたんだから、楽しまなきゃ真由にも私にも失礼だと思うんだけどな」

氷山が崩れ、清澄な音が会話の間を取り持つ。

「そうだけどな……その真由は一体どこに行っただっていうんだよ？」

大は注文した飲み物も飲まずに、ウィンドウの外に視線をくれている。

ふくれっ面なのは、決して二人のデートが楽しくないからではない。

事実、思っていた以上に二人のデートを楽しんでいた。

当たり前のように待ち合わせに遅れてきた由美に悪態をつくのすら、大はどこか初々しく恥ずかしげだったし、途中で立ち寄ったアクセサリーショップだって、店員を冷やかしては思う存分指輪をは

めたりした。

確かに楽しかった。

二人が予想していた以上に。

でも、それは二人でいる時間が少なかったから、そう思えたに過ぎない。昔から三人で行動するのが通例となっていた幼馴染み達は、一人欠けただけで新鮮な空気を味わうことが出来たのだ。それがゆえに、楽しく思えるのも今のうちだけだということに、大と由美はうすうす気がつき始めていた。

「分からない」

由美も視線のやり場に困って外の風景を目に移す。

「姉だろ？」

由美はその言葉に少しだけいらだつ自分が理解できた。

「姉だからって、妹の全部が分かるなんて、そんなの傲慢すぎー」

口をとがらせながら、窓の外を歩く恋人達にしかめっ面を見せてやる。

窓の外を歩く恋人達は、そんな洪面には一切気が付く様子もなく、お互いの顔を見てはにこにここと楽しそうにしている。

「……ったく、一体どこに行ったんだ真由は……」

大の手元に置いてあるウーロン茶は、すでに結露でびしょ濡れだ

った。一口も口をつけられずに、水かさだけが増していく。

「分からない」

「由美に言っただんじやない」

結露はやがて互いにより集まり一滴となる。ガラスの表面を駆けていき、コースターにぶつかる。コルク製のコースターは、大量の水が染みこんで薄黒く変色していた。

「私に言っているように聞こえる」

窓の外に目を向けたまま、由美はストローを口にくわえる。飲み物が底を尽きかける証拠に、溶けた氷で薄まったオレンジが舌の上に微妙な後味を残した。

「悪い、なんか俺いらついてるな」

大は大きいため息をついた。そして、今更ウーロン茶に気が付いたかのように口をつける。

「映画、行くの止めよっか？」

「……そのほうがいいかもな」

軽口のもりで言った台詞を、真正面から、真っ正直に受け止められる。

「む……やっぱり行く。絶対に行く」

頬を膨らませて、ストローに唇をつける由美。グラスの底を吸い上げるストローが、うるさく音を立てる。

「こうなったら、意地でも行くんだからね」

大はストローの立てる音を聞きながら、真由と一緒に歯医者に通っていたときのことを思い出す。唾液を吸い上げる機械が、今の音と同じ音を立てていたのを思い出したのだ。

「止めるとか、行くとか、どっちなんだよ」

「行く。いゝくゝの。今の大を見てたら、意地でも行きたくない」

「勝手なヤツ。ま、今初めて知ったわけではないけどな」

鼻で笑い、濡れたグラスを持ち上げる。グラス越しに見える由美の顔が、年齢よりもだいぶ幼く見えた。

「……真由、二日も家を空けるなんて、何かあったのかな。由美にも何も言わずになんて、今までそんなことなかったのにな」

「むむ……知らない」

十回を数えた段階で、由美は数えるのを止めた。

会話が途切れた後は決まって真由の話題だ。大が真由を心配するのは分かる。仲の良い幼馴染みだし、真由が誰かに心配をかけることは希だから。

でも、大が真由を心配するのは、それとはまた違う毛色のような気がする。

由美はふと思う。

真由の立場が私になったとして、同じように心配してくれるのかな、と。

だからこそ、由美は大に対して意地悪をしたくなった。

「大ッてき、真由のこと好きでしょ」

「ああ」

意外にも、即答だった。

「私のこと好き？」

「ああ」

同じタイミング、同じ音量、同じ抑揚。
その二つに何らの違いも発見できない。
由美の中でさらなる嗜虐心が溢れていく。

「じゃあ……私のこと愛してる？」

「馬鹿か」

ウィンドウの外に視線を向けていた大は、大きく右手を振って、
付き合ってられないといった風だ。

氷の溶けたグラスに口をつけ、今更のどを潤している。

「真由のこと愛してる？」

「……馬鹿だろ」

グラスを口の手元で止めて由美をにらむ。由美は口元をグラスで隠した大の表情を読み取ろうと、にらみつける大に応戦するように視線をぶつけた。

拮抗する視線の探り合い。

大はグラスを下げるのも忘れ。

由美は瞬きをするのも忘れ。

二人は互いの瞳の内側に映る景色を読み取ろうと、レントゲン写真のように視線の色を変える。

「やってられるか」

先に折れたのは大だった。

グラスを下ろし、やり場に困った視線を、奥に座る初老の女性に投げかける。

瞬間、由美は大の内側に隠れていた本心を読み取る事に成功する。大は、互いに譲れないはずの、譲ってはいけないはずのつばぜり合いの中で、あろうことか背中を向けて逃げ出したのだ。

冗談だとされても、由美は一向に構わなかった。にらめっこだと勘違いをして、大が吹き出しても怒るつもりはなかった。それはそれで良かったのだ。

ただ一つ。

ただ一つだけ、由美にとってして欲しくないこと。それが目をそらされることだった。

「そんな馬鹿な質問に真面目に答えてられるか」

由美は、二人の幼馴染みの間で揺れていたはずの心が、片一方に傾いてしまったことを、大の態度から知ってしまう。

何が違ったのか。何を間違えたのか。何がきっかけだったのか、何を動機としたのか。

大はいつから、私ではなく、妹の真由を見るようになったのか。

いつから、どうして。

第B - 8話・決心2

「真由のヤツ……二日も帰ってこないって事は、外泊してるって事だよな。友達のところだったらいいけど、そうじゃなかったら、金銭的にも限界ってものがあるぞ」

大は再びウィンドウの外に目を向ける。

こうして何度も何度もウィンドウの外を眺めるのは、きっとただの退屈凌ぎや、人間観察ではなく、ある一人の女の子を捜しているから。

雑踏の中で揺れる真由の陽炎。

お気に入りの髪留め、お気に入りの黒いオーバーニーのソックス、お気に入りのNのアルファベットが入ったスニーカー、お気に入りのバッグに、お気に入りの黒いキーホルダー。

大は、それら全てを雑踏の中に溢れる一人一人に重ねていく。犯人を捜す鑑識のように。指紋を照合するように念入りに。

「月曜日は大事な全校集会があるって言うのに……サボったらどうなるか分かったもんじゃないぞ。あれだけ先生方が厳しく言うんだから、きつとただごとじゃない」

大は残ったウーロン茶をぐいっと一気に飲み干すと、テーブルに手をつけて立ち上がる。

「おしっこ？」

水の染み込んだコースターは、まるで由美自身を表すかのようだった。

由美はそんな自分を嫌い、太陽のように明るく振る舞おうとする。

出来るならば、濡れたコースターを、コースターごと蒸発させてしまおうと。

「……ああ、まあ、そうだよ。……といふかな、女ならせめてお手洗いと言ってくれ」

大は残念そうにため息をつき、後頭部をぼりぼりとかく。

「ふん、じゃあ、大、だね？」

「……。名前ネタはもう耳が腐るほど聞いた」

口を真一文字に結ぶと、懽然としたまま背中を向けようとする。

「小学校の頃、それでいじめられたりしたもんね、っていうか耳、もう腐ってただれてたりして」

由美は自分の耳を引っ張って、猿のようにおどけてみせる。

「女の子なら、せめてもつとおしとやかになれ。ついでに言えば、身近なおしとやかである妹を見習え」

今日で何回目か分からない。

大の口から発せられた、真由、という固有名詞。

「おしとやか！ 大、それは前時代的な考えというものだよ、今時、ジェンダーとか、男女雇用機会均等法とか、夫婦別姓とか、男女の垣根はなくなってきたいるんだから。ということで、私はおしとやかじゃなくても良いんです」

「真由が聞いたらきつと嬉し泣くぞ。姉が難しい言葉を覚えました、ってな」

まただ。また言った。

真由。

今まで何千、何万回と聞いてきたはずなのに、なぜか今になって憎らしく思えてしまう。
流麗な明朝体だったそのフォントが、おどろおどろしい字体へと変貌していく。

「それに、由美は由美。真由は真由。由美が由美じゃなかったら、大はきつと悲しむと思うな」

大好きな妹。

いつも私に振り合わされて困ったように付いてきた妹。
泣かせたこともあった。喧嘩したこともあった。でも、どんなに怒っていても、そっぽを向いてしまっても、謝ればとびきりの笑顔をくれた。抱きしめなくなるほど可愛い……いや、何度も何度も両手で強く抱きしめた、たった一人の可愛い妹。

なのに。

「口だけは一人前だな」

「あらやだ。一人前なのは力、ラ、ダ、もですよ奥さん」

「誰が奥さ　……由美、俺をお手洗に行かせない気か？」

「ばれましたよ？」

「俺に問いかける意味が分からん」

なのに。

「……まったく、由美と話しているといつまで経っても目的が達せられる気がしない」
いつから。

「ふふ、用を足してらっしやいな。こころおきなく、どばーっとな」

「真由が聞いたら妹であることを悔やむな」

大は由美に背中を向けて店の奥へ。

弓道を長年続けているせいか、その背中はずつ直ぐと伸びていて揺るぎない。由美は時々見かける大の執弓の姿勢を思い出す。

由美はその姿勢の名前を知らない。

しかし、その姿勢を持つ大を、その大の持つ瞳を、その大の瞳に映る少女を、その瞳に映る少女の持つ、澄んだ眼差しの先を、その眼差しに映る執弓の姿勢を……由美は知っている。

そして、二匹の蛇は、互いの緒を食らい始めるのだ。

メビウスの輪のように未来永劫終わることのない想いのどうどうめぐり。

互いが互いを追いかける思恋のおいかけっこは、実はどちらかが

振り返れば簡単に終わる。

しかし、その二人の、本来絡み合うはずの視線を遮るように、この少女は立っている。

「……私のせいなのかな、やっぱり」

喫茶店の天井で回るプロペラ空調機を眺める。レトロな映画に出てきそうなアンティーク具合。

的に向かって一直線に飛んでいく矢のように潔い背中が、ドアの向こうに消える。まぶたの裏に思い描くのは、長身の大だからこそ表現できる大きな背中。

広い肩幅も、たくましい腕も、大きな豆だらけの手のひらも。きつといつかは誰かのためだけに広げられるのだろうか。

「真由……ごめんね、こんなお姉ちゃんで」

氷だけになったグラスの中。溶けてバランスを崩せば、繊細な音が胸に入り込んでくる。

それは、今までずっと変わらず保ち続けてきた幼馴染みのバランスそのものだ。いつから、想いは熱を持ったのだろうか。燃え上がり出したのだろうか。

例えてみる。

きつと幼馴染み三人の足下は氷だったのだ。

姉妹の思いが、大の思いが、淡いものからきちんとした熱を帯びるものになる頃、足下の氷は溶け出した。それが分かっている、私達は幼馴染みというバランスを必死に保ち続けたんだ。

いつか。

今ではない、いつか。

すぐそばまで迫っているだろう、いつか。

溶けてなくなった足下……落ちていく姉妹のどちらかの手を、大の
手がつかむ時がくる。

その手は、姉妹のどちらかを暗闇からすくい上げてくれる。

確実に一人を救い。確実に一人を失う。

そしてそれは……確実に、私達姉妹のどちらか。

大の想いは、お菓子のように分け合ったり出来ない。いつまでも、
仲好し小好しの姉妹ではいられない。子供のままではいられない。

女と女の醜い感情が、大という男を取り合う。

それが現実。

「……………真由？」

グラスの中の氷が全て溶ける。

つぶやいたウインドウの向こうに、夢遊病者のように通りを歩く
真由の姿があった。

毎日の手入れを欠かさない整った髪は乱れ、少し脂ぎっていて鈍

く外光を反射している。制服は薄汚れていて、スカートからのぞくオーバーニーのソックスにも、泥がこびりついていた。靴紐は解け、地面をなめている。まるで、鉄球を引きずる奴隷の如く。

普通の真由ではないことは一目瞭然だった。

由美は、腰を浮かして飛び出そうとする。

どうしたの真由？　一緒に帰ろう？

駆け寄りたい衝動が溢れ出る。ウィンドウの向う側を、人波に流されるように歩いていく妹。ひどく痛々しい。

お姉ちゃんが一緒にいるから。もう大丈夫だよ。

ウィンドウ越しの由美には気が付かず、真由はふらふらと幽鬼のように歩いていく。

ブラジル系ストリートドラマーがそんな真由をいぶかしげに見上げていた。

お姉ちゃんが助けてあげる。汚れを拭ってあげるよ。

真由に駆け寄り、膝を、顔を、制服を、妹をハンカチで拭ってあげよう。

ほら、遠慮なんてしない。そ、れ、に。そんなの当然だよ。だって……。

真由はきつと恥ずかしかって、遠慮がちに顔を背けるだろう。でも私はそんな真由の正面に素早く回り込んで、無理矢理ハンカ

チを汚れた顔に押し当てるんだ。

真由は、愛する妹なんだから。

「待たせて悪い、トイレがなぜか混んでてさ……」

真由が人波にのまれて見えなくなった瞬間だった。

「大！」

由美は大の声を聞き、音速で振り返る。

演奏を始めたストリートドラマー。小刻みな高速スラッシュビートが、由美の心をせき立てる。

「……外に」

外に真由がいるの。

「ん？ どうした？ 真っ青な顔をして」

「外を……」

外を真由が歩いていたの！ 今から向かえばきっと追いつける！

「お、すごいな。あのドラムさばき」

大ならきつと……真由を助けてあげられる！

「大なら！」

真由。真由。真由。

たくさんの真由が溢れる。記憶が年月をさかのぼる。

笑顔の真由。純粹な真由。心優しい真由。苦労性の真由。引つ込み思案な真由。努力家の真由。器用貧乏な真由。恥ずかしがり屋の真由。大好きな真由。

窓の外、スラッシュビートは加速する。

真由の温もり、真由の声、真由の涙、真由の瞳。真由の眼差し。真由の……。

「きつと！」

……大を見つめる眼差し。

「練習すれば出来るようになるよ」

何かが胸の中でつぶれた。

「いや、あれは無理だ。早すぎてスティックが見えないぞ」
そこから流出する罪悪感。

「あはは……そうだね……あれはさすがの大でも無理かな……」

罪悪感。

私は確かに思った。

真由がいなくなれば、大は私のものになる。

罪悪感。

私には確かに聞こえた。

ガラスが割れるような、砂利を踏みしめたような、黒板をひつかくような、不快きあまりない音。心の潰れる音。

胸なんかすぐに押しつぶされて、今では影も形も残っていない。心さえも圧搾され、砕け散って。

「大でも……無理かな」

大を渡したくない。渡してはいけない。

それがたとえどんなに大切な妹でも、決して譲れないもの。譲ってはいけないもの。

「さて、真由のことは気がかりだけど……あいつのためにもチケツト無駄にするわけにもいかないよな」

等価交換なんて言葉が実際に通用するのなら。

いつそ私は、妹を犠牲にして、大を手に入れる。

「そうだね、張り切っていきましょう」

私は大の腕に自らの腕を絡め、意図的に胸に押しつける。

「お、おい！ 店内だぞ！ ふざけるのも……！」

真由、実を言つとね、お姉ちゃん……もう、疲れちゃった。考えることに。

だから私、もう目の前の人だけを見ることにする。何も考えないことにする。

「……好きだよ、大」

大の胸元でつぶやく。

「なんだって？ 今なんて言った？」

大だけを見ることにする。見ることにするの。

こんな傲慢なお姉ちゃんでごめんね。でも。

もう、決めたから。

第B - 8話・決心2（後書き）

興味を持ってくださいました方、読んでくださった方、ありがとうございます。

評価、感想、栄養になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3243b/>

スクール・オブ・ザ・デッド～ジ・アナザー・デッド

2010年10月9日18時38分発行